

385
594

0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 ¹⁸/₁₀ 1 2 3 4 5

始



特217
112

元海軍參議官
海軍大臣

永野修身閣下題字

元衆議院議長

富田幸次郎閣下題字

貴族院議員

野村茂久馬先生題字



近代土佐人



張外士式人



永理參兵閣下閣字

田幸次海閣下閣字



西見
齋眞

梁新十一年
修身書

下閣身修野永 臣大軍海元

然此女去後人
一田
家守
向

下閣郎次幸田富

長議院議衆元

前省覽成

貴族院議員

野村茂久馬

貴族院議員 野村茂久馬先生

序

高知尙文社同人著なる『近代土佐人』出版に際してさきに余の序を求められし事がある。即ち現代土佐の各方面に活躍しつゝある代表的人物を網羅して普くその面目を紹介し併せて永く後世に傳へんの趣旨であつた。當時余は同人の何れもが文筆に堪能なる文壇人揃ひのこととて必ずや科學的範疇を超越し興味深い評傳の成就を見るべしと大いに期待した事であつたが果して其上梓なるや筆致頗る穩健中正、親疎遠近の距離によつて描寫に厚薄なく、好惡愛憎の感情に動く褒貶相紊れるなり何れもよく楯の両面を觀察し犀利の眼光を以て人物の核心を把握するや妙、正しく昭和土佐人の全貌を盡くして後昆に傳ふべき青史に恥じざるものがあつた。また更に其後の舞台に登場をみたる新人、或るひはさきの収録に洩れたるの士幾百を加へてその第二版を出すと云ふ、よつて以て近代土佐人を剏すところなく、画龍点睛以て本書の權威と重厚味を増すもの近來の良書と信じて敢て江湖に推薦する所以である。

昭和十三年六月

高知縣立圖書館にて

建 依 別 生

序に代へて

『近代土佐人』の刊行は、出来得る限り廣範圍に亘ることを主眼としたのであつた。然るに既刊の『近代土佐人』は、發行を急ぐの事情の爲に、尙多くの人物を残し甚だ遺憾とするものがあつた。茲に於て、更に近代土佐人刊行の主眼の目的を達成するためあらゆる努力を拂ひ、略目的に近いものを實現するに至つたのである。嚴密なる意味から言へば、近代土佐人としては 勿論意に満

たないものがあらう、併し、限られたる紙數により以上を望むことは實際に於て不可能である、されば、出来るだけ多くといふ程度に依つて刊行することに満足しなければならぬことを諒とされたい。

昭和十三年夏

編輯同人識

凡例

- 一、本書の編輯は、材料の集まる順序によつて筆を執つたから、從來の言葉で謂ゆる次第不同である
- 一、本書の編輯には前後通じて約一年六ヶ月を要してゐるが、此の間には既に原稿を印刷に附して後に或は故人となられ、或は其の仕事に異動を生ぜられた方々もある、製本の關係上此等を訂正することの出来なかつたことは編者の遺憾とするところである
- 一、近代土佐人にして本書へ収録洩れの分が澤山あるが、その人々をも他日普ねく網羅して増補することは勿論編者の義務であると考へるから適當の機會に於てこの義務を果すことを一言する

目次

井上熊兄
伊野部重明
池内實吉
岩戸辨吾
伊野部恒吉
岩本仙吾
泉芳輔
岩原正雪
飯田俊廣
井上武重
石坂岩太

二
四
四
四
五
一〇一
一〇〇
一〇六
一〇七
一〇六

石坂勝英
入交太藏
猪野馬太郎
一柳松次郎
稻内龍太郎
岩村勳之助
井元辰吉
池田頼信
池田誠享
市原辰泰
池本進
井上綱次
猪野重壽
池知源治
入交喜三郎

二〇六
二〇三
二〇七
二〇六
二〇六
二〇六
二〇七
二〇七
二〇七
二〇七
二〇七
二〇七
二〇七
二〇七
二〇七

濱田定太郎 濱口柳吉 濱川金十郎 濱田耕式 島中卓爾 原重壽 秦親芳 原福馬 島中邦雄 原唯次郎 橋本富治 春田毅一 原親一 秦親敏 林田備德

一四八 一三三 三二七 三三〇 三三五 三六三 四七三 四八一 四八八 五〇〇 五〇七 五〇七 五四一 五四四 五五八

に之部

濱田龜太郎 林川茂彌 濱口千尋 原祐之 橋田萬之助 濱田稔 西山龜七 西山德治 西山極山 西山閣二 仁尾進 西岡寅太郎 西野維城

五七三 五七三 五八八 五八八 六〇九 六〇九 六〇九 六〇九 六〇九 六〇九 六〇九 六〇九 六〇九 六〇九 六〇九

池本律 池内實行 岩井叶 幾井眞水 井上修 入木茂 池道長 石川涉 池田利三郎 池川兼吉 今村貞太郎 井上峰吉 岩井寬 岩井儀 井上卯太郎

四六〇 四六〇 四六八 四七七 四八八 五一二 五二四 五三三 五三八 五六一 五六一 五七九 五八六 五八六 六〇八

は之部

猪野博範 入交盛嗣 板原重義 泉谷彦治 伊丹卯之八 井上可澄 橋田早苗 橋本善勝 服部久吉 濱田彦藏 馬場敬春 島中義雄 島中愷夫

六三三 六三三 六三三 六三三 六三三 六三三 六三三 六三三 六三三 六三三 六三三 六三三 六三三 六三三 六三三

ほ之部

西岡里吉
西田鎌太郎
西本直太郎
西内龜太郎
西岡寅四郎
西内政次郎
西武彦
西内篤行
西本義盛
西内基八
西村信久
西田良
細川嘉治次

二六
二七
二八
二九
三〇
三一
三二
三三
三四
三五
三六
三七
三八
三九
四〇
四一
四二
四三
四四
四五
四六
四七
四八
四九
五〇
五一
五二
五三
五四
五五
五六
五七
五八
五九
六〇
六一
六二
六三
六四
六五
六六
六七
六八
六九
七〇
七一
七二
七三
七四
七五
七六
七七
七八
七九
八〇
八一
八二
八三
八四
八五
八六
八七
八八
八九
九〇
九一
九二
九三
九四
九五
九六
九七
九八
九九
一〇〇

と之部

穂岐山時衛
堀見虎衛
穂岐山萬視
野老山齊
友永安太郎
徳直左衛門
徳弘鴻
徳久勇
東條順吉
徳平幸吉
土居政之助
徳岡鶴次
富田幸次郎

四九〇
五九
六七
二
三
四
五
六
七
八
九
一〇
一一
一二
一三
一四
一五
一六
一七
一八
一九
二〇
二一
二二
二三
二四
二五
二六
二七
二八
二九
三〇
三一
三二
三三
三四
三五
三六
三七
三八
三九
四〇
四一
四二
四三
四四
四五
四六
四七
四八
四九
五〇
五一
五二
五三
五四
五五
五六
五七
五八
五九
六〇
六一
六二
六三
六四
六五
六六
六七
六八
六九
七〇
七一
七二
七三
七四
七五
七六
七七
七八
七九
八〇
八一
八二
八三
八四
八五
八六
八七
八八
八九
九〇
九一
九二
九三
九四
九五
九六
九七
九八
九九
一〇〇

ち之部

土居輝吉
利岡秀雄
土居莊一郎
戸梶義正
富永宗範
豊本多市
堂野庄三郎
士居駒吉
得能通貞

三九
四〇
四一
四二
四三
四四
四五
四六
四七
四八
四九
五〇
五一
五二
五三
五四
五五
五六
五七
五八
五九
六〇
六一
六二
六三
六四
六五
六六
六七
六八
六九
七〇
七一
七二
七三
七四
七五
七六
七七
七八
七九
八〇
八一
八二
八三
八四
八五
八六
八七
八八
八九
九〇
九一
九二
九三
九四
九五
九六
九七
九八
九九
一〇〇

ぬ之部

沼連

お之部

岡内滯一
岡林敏輝
岡協幾司
小川澄夫
岡林楠吉
岡峯磯之助
大原祐一
岡崎眞積
岡村長藏
岡兵馬

五五
三
四
五
六
七
八
九
一〇
一一
一二
一三
一四
一五
一六
一七
一八
一九
二〇
二一
二二
二三
二四
二五
二六
二七
二八
二九
三〇
三一
三二
三三
三四
三五
三六
三七
三八
三九
四〇
四一
四二
四三
四四
四五
四六
四七
四八
四九
五〇
五一
五二
五三
五四
五五
五六
五七
五八
五九
六〇
六一
六二
六三
六四
六五
六六
六七
六八
六九
七〇
七一
七二
七三
七四
七五
七六
七七
七八
七九
八〇
八一
八二
八三
八四
八五
八六
八七
八八
八九
九〇
九一
九二
九三
九四
九五
九六
九七
九八
九九
一〇〇

大石泰象
太田辨吾
大西正幹
岡鬼之吉
大粟次郎左衛門
織田眞壽
大石金重
岡崎正枝
岡林信衛
小島益爾
尾崎莊
岡田政利
小野明
小川吉堯
岡村三省

二七
二六
二五
二四
二三
二二
二一
二〇
一九
一八
一七
一六
一五
一四
一三
一二
一一
一〇
〇九
〇八
〇七
〇六
〇五
〇四
〇三
〇二
〇一
〇〇

岡豐功憲
大井治茂
尾立良樹
岡田健茂
岡村梅茂
岡林勇吾
岡本虎繁
尾立良猪
小笠原源次郎
大野正一
小笠原圓次
尾立角之助
岡崎重喜
岡村勇
小笠原廣志

四五
四六
四七
四八
四九
五〇
五一
五二
五三
五四
五五
五六
五七
五八
五九
六〇
六一
六二
六三
六四
六五
六六
六七
六八
六九
七〇
七一
七二

大谷定
岡村秀美
岡田重直
苧坂岩吉
大久保廣元
岡林直枝
小澤國三郎
小川汜滋
大久保千濤

わ
之
部

和田知求
和田吉太郎

か
之
部

六〇
六一
六二
六三
六四
六五
六六
六七
六八
六九
七〇
七一
七二
七三
七四
七五
七六
七七
七八
七九
八〇
八一
八二
八三
八四
八五
八六
八七
八八
八九
九〇
九一
九二
九三
九四
九五
九六
九七
九八
九九
一〇〇

川崎庄五郎
片岡武雄
川村嘉市
川口虎衛
桂井學司
香川一
川村虎雄
門田學
川田豊太郎
門田福壽
川崎源右衛門
川島正件
川島幸十郎
川淵洽馬
川谷横雲

三
七
九
一〇
一一
一二
一三
一四
一五
一六
一七
一八
一九
二〇
二一
二二
二三
二四
二五
二六
二七
二八
二九
三〇
三一
三二
三三
三四
三五
三六
三七
三八
三九
四〇
四一
四二
四三
四四
四五
四六
四七
四八
四九
五〇
五一
五二
五三
五四
五五
五六
五七
五八
五九
六〇
六一
六二
六三
六四
六五
六六
六七
六八
六九
七〇
七一
七二
七三
七四
七五
七六
七七
七八
七九
八〇
八一
八二
八三
八四
八五
八六
八七
八八
八九
九〇
九一
九二
九三
九四
九五
九六
九七
九八
九九
一〇〇

高島正旭
竹村源十郎
武内友一
多田嘉之助
田中信元
竹村與右衛門
谷脇賢輔
田島正夫
瀧川知章
谷流水
竹村貞次郎
田村實
田所助吾
竹崎五郎
田野岡元吉

二七 二五 二五 二五 二三 三〇 二四 一六 一六 一五 一四 二七 二二 二五

武内小太郎
田村昇
高原伊三郎
竹内英省
竹村謙三
武市源三郎
高本晋五郎
瀧本精一
武正徳夫
高島義則
棚橋浩二
竹内氏馬
田中實
武内春吉
團野肇

三〇 三〇 三九 三三 三五 三六 三六 三七 三六 三六 三六 三六 三六 三六

そ
之
部

武市義吉
高村健吉
田中寅次
田所孝
高村梧樓
竹村茂義
武内利張
谷博
高野源吉
多田健二郎
高橋幸吉
堀田福太郎
曾我長次

四八 五八 五五 五五 五五 五二 五七 三三 三六 三五 五七

つ
之
部

な
之
部

辻琢利男
塚本利男
鶴見宗利
都築兵左
都築龍馬
土夕内美代
常光競
辻大吉
長崎健夫
長尾芳吾
浪越康夫

五 三九 三六 四二 五七 五八 五八 三六 三六 三六 三六 三六 三六 三六

南	中	中	中	中	中	中	中	永	長	中	中	中	長	中
部	島	島	島	西	田	島	川	野	山	内	島	山	崎	川
	覺	成	壽	町	鹿	鹿	喜	秀	直	松	和	百	伊	恒
博	衛	功	馬	衛	次	吉	義	吉	樹	次	三	馬	之	之

三〇 二九 二五 二五 二六 二七 二五 二四 二四 二三 二〇 一九 九 九

永	成	鍋	中	永	中	中	中	長	並	長	長	永	中	長
國	岡	島	屋	井	島	島	城	崎	村	尾	尾	野	村	尾
龜	楠	運	喜	福		巖	悖	龜	總	峯	利	修	信	忠
齡	彌	猪	之	吉	造	樹	一	彌	七	馬	枝	身	之	觀

四六 四〇 六五 六〇 五九 五七 五三 五〇 四九 四〇 四三 四〇 三九 三五 三二

む

武藤 龜次
武藤 三男也

う

村田 久太郎
村田 熊太郎
村田 辰衛
村上 正豐

白井 鹿太郎
宇田 耕一
宇田 與八
宇田 友四郎

二六 二七 二八 二九 三〇 三一 三二 三三 三四 三五 三六 三六 三六

の

内田 菊惠
上田 紫郎
植田 日出雄
宇田 喜太郎

野中 楠吉
野村 好之
野村 清太郎
野中 常三郎
野田 菊之助
野中 慶太郎
野村 茂久馬
信清 誠一
野田 忠

三六 三五 三五 三三 三二 三二 三〇 二九 二八 二七 二七 二三 二三 二〇

野島一郎 野中德治 野島博愛 野本源吉 野島吉喜 野口直通 野村好久

國吉貞吉 黑岩常幹 栗田鶴之助 國吉八十一郎 久万小馬吉 黑瀬光則

く 之 部

四六 五三 五四 五三 五〇 五九 五九 五九 五九 五九 五九

山崎秀吉 山本善吾 安並宏篤 山下嘉平 八井田稔 山西房次郎 山本博章 山脇國馬太 山本輝美 矢作健 矢田勇 山脇信平 山崎太郎 山田嘉治 柳瀬勇

二六 二九 三三 三三 三三 三九 三九 三八 三五 三三 三三 三〇 三四 三五 三五

楠瀬大太郎 倉橋繁 久米象一 久保田直巳 公文利吉 楠瀬慶吉 窪田淺馬 國吉清次 窪川清 桑名董延 山本忠秀 山本義孝 山本源三郎

や 之 部

三四 三五 三四 四八 四八 四八 四八 四八 四八 四八 四八

山崎嚴龜 山本長藏 山本正巳 安並壽之助 山崎斌 山岡八郎 柳瀬寛 八井田茂實 山崎導壽 山本淺吉 山本地林 山本楠樹 山岡廣馬 大和榮

三二 三七 四〇 四四 四七 四七 四八 四八 四八 四八 四八 四八 四八 四八 四八

ま
之部

山 山 山 山
本 本 本 本
猪 豊 豊 猪
助 吉 吉 助
山崎 八井 山本 山本
龜田 井田 本 本
太郎 寛 豊 猪
松村 松 松 松
正太郎 松吉 松喜 松政之助
松岡 松喜
松原政之助
松本治一
松村誠二
前田芳吾
松岡寅八
前田基晴

五九 五八 五三 五二 五五 五九 六四 六三 六二 六一 六〇 五九 五八 五七 五六 五五 五四 五三 五二 五一 五〇 四九 四八 四七 四六 四五 四四 四三 四二 四一 四〇 三九 三八 三七 三六 三五 三四 三三 三二 三一 三〇 二九 二八 二七 二六 二五 二四 二三 二二 二一 二〇 一九 一八 一七 一六 一五 一四 一三 一二 一一 一〇 〇九 〇八 〇七 〇六 〇五 〇四 〇三 〇二 〇一 〇

前 前 松 町 松 松 松 松 馬 松 松 松 前
田 田 岡 田 田 村 淵 山 山 村 田
堯 堯 太 太 秀 秀 美 美 吉 吉 資 資
松井 董 市 郎 松岡 佐太郎 前田 陽龜 前田 芳樹 松岡 庸樹 町田 榮助 松田 義景 松村 幸松 馬淵 重馬 松井 襄美 松山 秀美 松村 太吉 前田 堯資

五〇九 五〇二 五〇一 四九六 四八四 四八二 四七〇 四六〇 四六一 四三二 三七八 三五五 三三六 三二二 二八二 二六〇 二五九 二五八 二五七 二五六 二五五 二五四 二五三 二五二 二五一 二五〇 二四九 二四八 二四七 二四六 二四五 二四四 二四三 二四二 二四一 二四〇 二三九 二三八 二三七 二三六 二三五 二三四 二三三 二三二 二三一 二三〇 二二九 二二八 二二七 二二六 二二五 二二四 二二三 二二二 二二一 二二〇 二一九 二一八 二一七 二一六 二一五 二一四 二一三 二一二 二一一 二一〇 二〇九 二〇八 二〇七 二〇六 二〇五 二〇四 二〇三 二〇二 二〇一 二〇〇 一九九 一九八 一九七 一九六 一九五 一九四 一九三 一九二 一九一 一九〇 一八九 一八八 一八七 一八六 一八五 一八四 一八三 一八二 一八一 一八〇 一七九 一七八 一七七 一七六 一七五 一七四 一七三 一七二 一七一 一七〇 一六九 一六八 一六七 一六六 一六五 一六四 一六三 一六二 一六一 一六〇 一五九 一五八 一五七 一五六 一五五 一五四 一五三 一五二 一五一 一五〇 一四九 一四八 一四七 一四六 一四五 一四四 一四三 一四二 一四一 一四〇 一三九 一三八 一三七 一三六 一三五 一三四 一三三 一三二 一三一 一三〇 一二九 一二八 一二七 一二六 一二五 一二四 一二三 一二二 一二一 一二〇 一一九 一一八 一一七 一一六 一一五 一一四 一一三 一一二 一一一 一一〇 一〇九 一〇八 一〇七 一〇六 一〇五 一〇四 一〇三 一〇二 一〇一 一〇〇 九十九 九十八 九十七 九十六 九十五 九十四 九十三 九十二 九十一 九〇 八十九 八十八 八十七 八十六 八十五 八十四 八十三 八十二 八十一 八〇 七十九 七十八 七十七 七十六 七十五 七十四 七十三 七十二 七十一 七〇 六十九 六十八 六十七 六十六 六十五 六十四 六十三 六十二 六十一 六〇 五十九 五十八 五十七 五十六 五十五 五十四 五十三 五十二 五十一 五〇 四十九 四十八 四十七 四十六 四十五 四十四 四十三 四十二 四十一 四〇 三十九 三十八 三十七 三十六 三十五 三十四 三十三 三十二 三十一 三〇 二九 二八 二七 二六 二五 二四 二三 二二 二一 二〇 一九 一八 一七 一六 一五 一四 一三 一二 一一 一〇 〇九 〇八 〇七 〇六 〇五 〇四 〇三 〇二 〇一 〇

け
之部

町田喜四郎
前田寛雄
益井長次

下司凍月

ふ
之部

藤田喜郎
藤澤富士馬
福島磯彌
藤村徳次
深瀬重薰
古谷喜久吉
藤澤喜久治
藤尾重喜
藤宗民藏
福島元治

六六 六五 六四 六三 六二 六一 六〇 五九 五八 五七 五六 五五 五四 五三 五二 五一 五〇 四九 四八 四七 四六 四五 四四 四三 四二 四一 四〇 三九 三八 三七 三六 三五 三四 三三 三二 三一 三〇 二九 二八 二七 二六 二五 二四 二三 二二 二一 二〇 一九 一八 一七 一六 一五 一四 一三 一二 一一 一〇 〇九 〇八 〇七 〇六 〇五 〇四 〇三 〇二 〇一 〇

こ
之部

福永萬治
福島正五郎
福田早苗
福留元徳
福留彌通
船谷國治

小林民吉
小松米吉
小松龜吉郎
小松義卓
小西寅之助
小藏靖雄
近松牛次
小松熊太郎
近藤楠吉
小牧德身
幸川彌隆
小松隆與

五〇九 五〇二 五〇一 四九六 四八四 四八二 四七〇 四六〇 四六一 四三二 三七八 三五五 三三六 三二二 二八二 二六〇 二五九 二五八 二五七 二五六 二五五 二五四 二五三 二五二 二五一 二五〇 二四九 二四八 二四七 二四六 二四五 二四四 二四三 二四二 二四一 二四〇 二三九 二三八 二三七 二三六 二三五 二三四 二三三 二三二 二三一 二三〇 二二九 二二八 二二七 二二六 二二五 二二四 二二三 二二二 二二一 二二〇 二一九 二一八 二一七 二一六 二一五 二一四 二一三 二一二 二一一 二一〇 二〇九 二〇八 二〇七 二〇六 二〇五 二〇四 二〇三 二〇二 二〇一 二〇〇 一九九 一九八 一九七 一九六 一九五 一九四 一九三 一九二 一九一 一九〇 一八九 一八八 一八七 一八六 一八五 一八四 一八三 一八二 一八一 一八〇 一七九 一七八 一七七 一七六 一七五 一七四 一七三 一七二 一七一 一七〇 一六九 一六八 一六七 一六六 一六五 一六四 一六三 一六二 一六一 一六〇 一五九 一五八 一五七 一五六 一五五 一五四 一五三 一五二 一五一 一五〇 一四九 一四八 一四七 一四六 一四五 一四四 一四三 一四二 一四一 一四〇 一三九 一三八 一三七 一三六 一三五 一三四 一三三 一三二 一三一 一三〇 一二九 一二八 一二七 一二六 一二五 一二四 一二三 一二二 一二一 一二〇 一一九 一一八 一一七 一一六 一一五 一一四 一一三 一一二 一一一 一一〇 一〇九 一〇八 一〇七 一〇六 一〇五 一〇四 一〇三 一〇二 一〇一 一〇〇 九十九 九十八 九十七 九十六 九十五 九十四 九十三 九十二 九十一 九〇 八十九 八十八 八十七 八十六 八十五 八十四 八十三 八十二 八十一 八〇 七十九 七十八 七十七 七十六 七十五 七十四 七十三 七十二 七十一 七〇 六十九 六十八 六十七 六十六 六十五 六十四 六十三 六十二 六十一 六〇 五十九 五十八 五十七 五十六 五十五 五十四 五十三 五十二 五十一 五〇 四十九 四十八 四十七 四十六 四十五 四十四 四十三 四十二 四十一 四〇 三十九 三十八 三十七 三十六 三十五 三十四 三十三 三十二 三十一 三〇 二九 二八 二七 二六 二五 二四 二三 二二 二一 二〇 一九 一八 一七 一六 一五 一四 一三 一二 一一 一〇 〇九 〇八 〇七 〇六 〇五 〇四 〇三 〇二 〇一 〇

近代土佐人

山本忠秀氏

數年前の大患時に、多田牧師から洗禮を受けて、基督教信者となり切てからの山本忠秀氏には、普通の肉眼には映じない心靈上の一大轉換が行はれたことを、床かしく想像して、一入敬仰の情を新たにするものがある、山本氏は次來神を見るに相應はしき性格の持主である、嚴父賢一郎翁が全村民から其の徳を慕はれて、氏神の社頭に立派な顯彰碑が建てられてある一事で、岩村の殿様の光りが永く後代に傳はるであらふことを考へるまでもなく、將た賢息忠興博士が、夙に敬虔なるクリスチャンたる其の篤信情緒を、此處に引用するまでもなく、心の清き者は幸福なり其の人は神を見ることを得ればなりと基督が言つた通り、地上に人間と爲つて以來、心の清き点において、終始一貫した山本氏である、年少の時から板垣伯を崇拜し、片岡健吉氏を尊信して、其の活きた感化を受けた因縁が、氏の品性に一段の磨きをかけて、水晶の如き八面玲瓏の人物に仕上げた所以だと

ひ

白岩秀夫
秦泉寺悦龜
島崎五郎
芝崎甚馬
下村次男

三三
三六
三五
三三
三二
三二

も

廣井益水
廣田榮一
廣末靜一
久馬之助
廣瀬伊佐吉
廣松熊太郎

二五
二〇
四二
四八
五三
五七
六三
六五

森田立樹
森田正治
元田政太郎

三三
三三
一五

せ 之 部

森木恒之助
元吉秀太郎
森本光磨
森岡彦三
毛利覺治郎
森岡泰勇
森本清龍
森本健

一八
三三
三三
三三
三五
三五
三六
三六

す 之 部

關川繁與
助石稻茂
鈴木彌太郎
鈴木澄志治
須藤治美
菅藤治晃
杉本邦利

五三
一六
一六
一六
一六
一六
一六
一六

附記 (編輯後の移動者)

思惟する、氏が歳久しき生粹の黨人でありながら、微塵も黨臭に染まずに、その清節を堅持した大丈夫振りは、俗悪の社會人に伍して、曾て自己の眞を汚がされなかつた柳下惠にも比すべく、實に黨人界の明星であり、至寶であるとの底から敬服する、貴族院議員、土佐農行銀行頭取、四國銀行顧問、政友會支部長など云ふ肩書は、新たに神の國に生れんとする氏に取つては、古ぼけた門札位にしか價値づけられぬであらう、然り山本氏は人間として、一点の批難無き完人であることを我等は朗らかに看取する

井上熊兄氏

井上熊兄氏は、土佐紳士綠筆頭の人物である。之れを知能的に觀察し、之れを人格的に解剖して幾んぞ一点批難の打ちどころが無、乃ち辯護士としては、在野法曹界のナンバーワンたる實力聲望を有し、特に民事が御手のものであると承はる、政治家としては、縣會議長の肩書以外に、代議士の候補、民政黨支部の總務と云ふ如き閥閥が雄辯に物を言ふ、辯護士としても信用があり、政治家としても信用がある、氏は日本法律學校を卒業して以來、堅實なる信用を處世の秘訣と心得て、此の信用の基礎工事の上に、一を加へ、三を加へ、四を加へ、五を加へて終に今日の偉大を積重する

に至つたのである、蓋し信用の根柢には、正直をモットーとする強き正義心が光つてをらねばならぬこと勿論である、氏が政治家として、故濱口雄幸氏を崇拜し、徹底的に之に傾倒した明らかな行動は、心の底から正直なる濱口氏の遣り方が好きであつたからであらふ、氏が政界に足を踏み込むやうになつたのは、濱口と云ふ正直漢が、政界一方の將となつて、第二維新の風雲を叱咤した其の武者振りに感激したからである、井上氏は高岡郡須崎の出身であるが、須崎には明治維新前に、間崎滄浪もをり、吉村寅次郎もをつた、此の如き歴史の因縁から考察して、井上氏の血管中には、國士の血液が流れてをるとも解せられる、だから氏が國士の典型たる郷土の英雄濱口雄幸氏に傾倒した其の動議が、自らにして他人の想像を許すべき或る物がある、だから若し濱口氏にしく、政界の人とならざつたならば、井上氏も或は政黨に關係するやうな心の萌芽は永遠に葬られたかも知れぬ斯の如く解釋する事によつて、濱口氏の死は氏の政治的向上心に、大なる打撃を與へたに相違ない、民政黨支部の中に、今でも濱口氏の風格にあこがれる一派があり、類を以て集る人情の自然として、謂ゆる濱口系を成し、その濱口系の最高峰に井上氏の存在せる風景は、偶々氏の人を爲りて雄辯に代辯せるものであつて、吾らが氏に敬意を表する所以の一半は亦た此處にある、氏が往年其の同志たる濱口系から推されて、第一區から立候補した其の心事にたち入れば、眞實の意味に於ての引ひ合戦であつたのではなからうかと今にして追憶せしむるものがある、想ふに氏の政治的生命

は尙ほ春秋に富んでをる、選挙の肅正が本統に實行せらるる曉には、大衆の人気は氏の如き良心の政治家に集るであらう

伊野部重明氏

伊野部重明氏か、最近その知人に洩した言葉がある……自分が二度縣會へ出たことは、今にして考へると甚だ無意義であつたことを痛感する、自分は決して議場の人間で無い……然り、自己を知るものは自己に如くはない、伊野部氏の此の言は、自己を欺かざると同時に、他人をも欺かざる良心の聲であることを首肯する、氏は農事に趣味があり、農民に理解があり、農村の利害休戚に關して切實なる關心を有つ、故に一縣の農會長としては、氏自身も之れ我が安住の場處なりとして、定着するところであらうし、亦た他の眼から觀ても、適材適所の箴り役なるが如くに思はれる、氏の性格をもつて、政黨に關係したことが既に大なる間違ひであつた、氏には黨人に必要なる闘争心もなければ亦た 權謀とか策畧とかいふものは無い、だから歲月と共に黨人生活を物憂く感ずるやうになつたのであらう、其處に氏の正直性が露はれていたのである、氏は珍らしい好人物であり、珍らしい恪勤家である、それに事務を處理する才能に秀でてをるから、農業會館を出たり、入つ

たりして、蠶の事や、米の事を心配するには、打つて附けたものだ、だから米藪政策や、肥料政策などに對しては、農民をして傾聽せしむるに足る知識と抱負の持合せがある、斷然離黨を表明した以上、二度と政黨入りをせぬこと

辻 琢 磨 氏

明治十三年高知市永國寺町に生る、縣立第一中學校を経て、東京高商を卒業し、明治火災を振り出しに、高田商會の鑛業部に入り、奮闘を續くること十數年、偶々歐洲戦後の好況時代に入るや、大阪にて獨力製釘事業を開始し、一面各種事業に關係して大に得るところがあり、此の間に多大の實地的修養を積んだが、大正九年土佐セメント會社に迎へられ、入つて事業部長となつた、當時社長の宇田氏を援けてをつた廣瀬重正氏が恰度支配人を勇退した際で、新進氣鋭の氏が其の後を襲ふた格となり氏の入社は土佐セメントに清新の空氣を吹き込む新しい時代をもたらす契機となつた。廣瀬氏の時代には、孰れかといへば保守主義であつた、ところで氏は此の保守政策を斷然あらためやうとした、何んとなれば同社の保守政策に膠着してをつては、當時の社の資金では、到底事業の發展を圖るの不可能なるを看破した結果、身を以て改革の任に當り、驥足を縣外にのべて有力な

放資者を物色し、大阪取引所と取り組んで、前後二回の増資を執行し、遂に現在の如き一千萬圓の會社に擴大する基礎をつくり上げたのである。これは確かに氏の功績に歸すべきものである。氏は資性温厚篤實で、然かも進取の氣象に富み、縣下の實業界で一個の存在として認められてをる、現在には土佐セメントの取締役兼支配人として社の内外に信用と勢力を張り、小高坂に立派な成功記念館を新築して、人生の幸福に恵まれてをる、内職には東洋海上火災保險の代理店を引き受け、公人としては高知商工會議所議員で幅を利かしてゐる。辻氏の部下にのぞむや精神主義であり、その主義のあらはれが修養團の組織となり、獨り會社の従業員のみならず、全社員の家族までも、此の修養團に参加して眞劍味に銘々の精神を鍛錬してをる、西田天香氏なきを時々招聘することも、矢張り同一精神の發露であると思ふ、此の精神主義こそ現在の物質萬能の銅臭世界に唯一の清涼劑であり、吾等が特に有りがたく感ずるところである。

谷 信 讚 師

土佐の佛教界を見渡すに、實のところ、これと云ふ程の人物がゐない、唯だその中で、鷄群の一鶴とは行かないけれども、多少頭角を抜いて、知識階級にまで、其の存在を認められてゐるのが高

野寺の住職谷信讚師であらふ、佛教年鑑を見ると、谷信讚 號を寂堂といふ、古義眞宗派、權僧正、明治十一年一月十日徳島縣に生れ、趣味佛を拜むこと、高野山大學卒業云々とあり、近頃の坊サン達の趣味と言へば、酒を飲むこと、肴を食ふこと、少し上品なところで、和歌、俳句、茶の道、謡曲、生花、園藝、圍碁、作詩、讀書等々の類である、然るに谷信讚師の趣味が、朝夕に佛を拜むにありと聞いて、我等は言ひしれぬ最高の敬意を表することに於て、敢て人後に落伍せざる谷フアンの一人たることを誇りとする、我等は師の口から「佛を拜むこと」の一語を耳にして、もうそれで、すつかり大満足であり、大安心であり、大往生である、學問とか、智識とか、辯舌とか云ふやうなものは、衆生濟度の坊サンに取つては寧ろ末枝である、況んや高野寺の境内に、板垣會館を建てるとか、建てぬとか云ふ如きは問題でない、要は佛を拜んで下さることである、然かも其の佛を拜むことが、人前の儀禮的でなく、師の趣味だと云ふに至つて尚更ら有り難い譯である、何うか信仰の世界のために折角自愛して頂きたい。

長 崎 健 夫 氏

今日の社會は大學出身でなければならぬ、といふもの。否、矢張り長い經驗に依つて叩き上げた腕

のものに限る、といふもの、其の何れが當を得てゐるかといふ問題は容易に解決するものではない、が、唯だ、いかに経験者でも、勤勉であり、良い頭脳を持つてゐなければある程度以上は難しい。と、いふことは云ひ得られる。

高知縣が生んだ経験者の代表的人物としては金子直吉氏を挙げるのに誰れも異議はあるまい、然し其の金子氏が學校の順序を踏まず、唯だの平凡な経験者で好運的な人物だと思つたらそれは大きな間違である。小僧生活の時代に於て英語の辭書を覚え覚え、頁は次々に破り捨て、行つたととなつたのである。決して平凡な経験を辿つて來たのではない。

四國銀行の長崎健夫氏を語らんとせば、高知銀行大阪支店の給仕時代を語らねばならぬ。十五、六歳の遊び盛り、日曜日の休暇には、道頓堀、千日前の興行師が是等の少年をひきつける時に於て、獨り日曜日を利用して川口の居留地に外人の子供を相手に會話の稽古をしてゐた長崎氏であつた。金子氏のそれと似通つた點があるではないか。現在幾多の學校出のゐる四國銀行で、完全に外人と話をなし得るものが長崎氏一人であるといふことは、又獨學の偉大さを物語つてゐるものではないか。

長崎氏は今日の地位を自ら築き上げた人で、決して好運に恵まれた人ではない。其の力量才腕を認められたながら、上席が寒がつてゐる爲に長い間支店巡りをして來たのである。漸く本店の副支配人として本店詰となつてからは、重役直接の認識があり、それ以後は可成に順調に進んだ。高陽銀行が四國銀行の姉妹銀行となつた際には抜擢されて高陽の常務となり、同銀行が四銀と合併するに及んでは再び四銀の重役秘書として戻り、所謂幹部級の一人となつた。其の間、氏の眞面目と敏腕とが、惜しまれてであることはいふ迄もない。氏は實に誠意の人であり、勤勉の人である。濃厚な好實家タイプの人であるが、一面非常に意思が鞏固で、自己の信念には何處迄も勇敢な人である。

曾て、高知銀行大阪支店時代の同僚であつた某氏が、不遇にして窮境にあるのを見兼ね、數回に亘つて之を援助し、その病死に際して一家の困窮を見るや、一切を引受けて處理した如きは氏の人格を窺ふことの出来る一事である。

長崎氏は築屋敷の出身だ。高等小學を卒へてから直ちに銀行に入り、精勵幾十年を此所に盡した人で、頭腦の明晰なるは少年時代より既に認められてゐた。

小林民吉氏

土佐の實業界で八方無敵の人が果して幾人あるか、八面玲瓏の人物にあらざれば、八方無敵にはな

り得ない、神様や佛様は八面玲瓏であるが故に八方無敵である、此の前提から出發して、八面玲瓏の人物、八方無敵の人物は、神に近く佛に近い準神様、準佛様の人だと云ふ小結論に到達する、土佐商船の常務取締役小林民吉氏こそ右の範疇に該當する人物ではなからうか、吾々の眼には、小林氏は人間として實に上乘なるもの、同時に各方面に敵のない好々人であるとして映するのである、氏の前任、大阪商船高知支店長の關次郎氏は、持つて生れた十九世紀式の外交肌であつた、昔の外交官は上手に嘘を言ふて自國の利益を圖るのが秀でたる手腕の持主だと稱讃されたものだ、關次郎氏は此の種の型に倣つた人物で、才を以て會社の外交に従事したのであつた、小林氏は性格から對事業方針が一切切關氏とは正反對であり、萬事を正直の尺度に合はすことを忘れない、隨つて華美ではないが地味である、要するに倫理主義、道徳主義の人物である、否な倫理や道徳から百尺竿頭、歩を進めた宗教主義かも知れない、こゝに八方無敵、八面玲瓏の本領がちらつく、氏は明治十五年十二月の生れで、拓殖大學の出身である、明治四十年大阪商船に入つたのが實業界遊泳の振り出しで、鹿兒島、門司、別府の支店で修養を積み、大正九年の初春、關次郎氏の後を襲ふて高知支店長に榮轉し、忠實一天張りで土佐航路の諸問題を解決した、この間、野村茂久馬氏と至誠相許し、肝膽相照らして、同心一體の關係を結ぶに至つたことは世間周知の事實である、其の結果、土佐商船會社の設立（昭和八年）となり、野村氏の社長の下に専務取締役となつて、如實に

「小林の土佐商船」時代を出現してをる、すべての事業には、その事業の主體を爲す人物の心の型が自らにしてあらはれる、してみると今後の土佐商船には、小林氏の人格が浮き彫りの如くに美はしく浮かび出るだらふと思う。

小林氏は、土佐商船の常務以外に、神戸送迎株式會社取締役、高知商工會議所議員、交通部長、土佐商工聯合會商事顧問、土佐觀光協會副會長等を兼ねてをる、此等の肩書を一見しても、氏が八方無敵の人たるを知るに餘りがあらふ

橋田早苗氏

「金持喧嘩せず」橋田氏の處世道は斯の一句に盡されてをる、若い時代には相當政黨にも深入りをし自から進んで土陽新聞の經營を引き受けた程だが、それでも曾て喧嘩をしたことがない、「政友會の橋田」として民政黨を敵に廻はしながら、喧嘩づくで勝敗を決しやうといふ事を考へずに、財界の中心人物たる宇田友四郎氏を、民政黨に獨占せしむるのは、政友會の不利益であるとの見地から先づ宇田氏の知囊である吉本彦次氏と接近し、政黨政派を超越した社交俱樂部やうのものをつくり此處にウマの合う者同士が集つて、碁を打つたり、飯を食たりするうちに、銘々の氣どころが解り

次第に肝膽相照らすやうになつた、當時政友會からこの俱樂部に出入した者は、水野吉太郎、森淳太郎氏等であつたが、日を経るまゝに橋田氏の胸に描いた筋書通りに、水野氏や森氏なども何時の間にも宇田氏と親善の間柄となつて、或る意味において宇田氏は、その片脚を政友會の有志によつきキヤツチせらるゝ形となり、政黨的にながめて虚勢されたやうにも見へた、橋田氏の目的はこゝにおいて半ば達した譯で、民政系の曾和貞雄氏なきが、高陽銀行を陣營として、橋田氏の乾兒のごとくに見へだしたのもこれからの事である。

『金持喧嘩せず』の橋田氏は、土陽新聞社長としても、自己の周圍に、野村茂久馬氏だの、大脇順路氏だの、中川恒之氏だの、吉村近次氏なきが政黨色のない人物を引き寄せて來た、そして是等實業界の實力家に、土陽新聞の洗禮を施したものだ、これも觀方によつては橋田氏の成功であると同時に、温良なる氏が新聞の經營に人知れず如何に苦心したか、窺ひ知られる、土陽新聞は決して經營のらかな新聞でなかつた、そこに社長橋田氏の苦心がある、此の苦心を知らぬから、土陽を高知に賣つたなど云ふ同情のない言葉が、勝手な黨人輩から出だすのである、政友會支部の連中が一厘の錢をも出さず、何等の援助を橋田氏に與へずにおいて、橋田氏を傷くるのは實に以つての外である、あの當時、橋田氏が土陽を投げ出したならば、土陽は廢刊以外に何等拓くべき運命がなかつた筈だ、橋田氏は六十年の歴史ある土陽を生かすために眞に、己むを得ずして、あの最善の方法をと

つたのである、橋田氏のこの苦衷を察せずして、兎や角の批評をするやからは、無責任を通り越してをることを筆者は斷言する、土陽新聞が今日あるは、全く橋田氏の智慮の結果である、土陽の編輯局は、全部政友會系統の人物をもつて充され、をり、編輯局は獨立してをる、それで澤山だ。實業家としての橋田氏は、四國銀行取締役、十佐貯蓄銀行頭取、高知瓦斯株式會社監査役等々である、此等の肩書が氏の本縣實業界における信望、勢力を如實に物語つてをる、豈に蛇足を加ふる必要あらんやである。

齋藤琢磨氏

吉本久太郎氏は、昭和十年初夏の候をもつて市會議長を辭した、氏は全國市會議長會議に臨むと中々に光つたものと言はれたが、高知市會では最初から不思議にこじれつゞけで氣の毒であつた。市會に多數を擁する民政派は吉本氏の後任について幾度も詮衡を車ね、最初世評では細川彦太郎氏が有力に傳へられたが、黨歴、閱歴からお鉢は齋藤琢磨氏に廻つて其の内諾を得たので、六月二十九日の市會で二十三票といふ多數で當選した、市の議長は近時厄介視されてをる、佐竹晴記氏、氏原一郎氏なきの無産派議員からアブラを取られるから大概の者は神經衰弱にかゝる、齋藤氏のお

手並如何は一般市民興味の焦點であつたが、就任の挨拶よろしくあつて、あの魁偉な巨軀をきつかと議長の椅子に落ちつけたところを紅紫群に見せふものなら「いよー、サーさん!!」と拍手や黄色い聲の起つたのは必定、その日、民政派は勿論、中立も政友もバチ／＼とやつた、此等の態度先づ申分無しとして、佐竹議員例に依つて「議長は二讀會でも慎重審議の趣旨を體し質問を許す意志なきか又た參與に答辯を促がす考へなきや」と一本釘をさしたので、之れぞ新議長の試金石とハラ／＼した者もあつたが、存外從容として「議事本則に依ると、質問は一讀會で終了するを本議としてあるが……小休!」と宣した、佐竹氏たゞみかけて追求すると「小休です／＼」と手を振つてニタ／＼と佐竹氏の議席へ巨軀を運んだところは朗らかな愛嬌であつた。

頭毛の植林地帯、既に頗る荒廢してすべり山となり、光頭の横綱で斷然光つてをるが年はまだ五十に足らぬ、市商の出身、高岡郡宇佐の資産家に生れたゞけあつて万事にこせつかぬのはその外貌が如實に示してをる通りである、柔道五段の猛者、健康な體軀には健全な精神が宿るといふ古語は蓋し氏に當て箝めて極めて剴切である。意志は堅固で、稜々たる俠骨は武徳殿に鳴つてをる。然も破顔一笑すると子供もなつくと云ふから田村磨將軍にあやかる柔と剛の兩徳を兼備してをると云へやう、市議として三期、市政のため向上が展に努力すること十餘年。その一方では縣水産會長をも三期勤め、海産王國のため盡瘁しつゝある、清廉潔白、曇つたことは大嫌ひ、然し市には幾多の懸

案が横はつてをる、折角自重し、市政のため柔道五段以上の腕を揮ひたまへ、至囑々々

橋本善勝氏

縣下の三大病院と云へば楠病院、高知病院、武田病院。だと人々の頭腦に深く印象づけられてをる楠病院の楠正任、高知病院の野並魯吉、武田病院の武田信勇——此三人は實に土佐の名醫傳に特筆大書せらるる斯界の權威であることにおいて何人も異議はない、而して三人は功成り名遂げて、恰も云ひ合せたやうに相前後して他界し、當年の三大病院は、時勢の流れに従ふてソレ／＼適當なる後継者を得て、各々特色を以て向き／＼に經營せられてゐる。

楠正任氏には、正信と云ふ養嗣子があつた、獨逸に留學中脾臟及び血液中の類脂肪に就ての論文を提出し、大正六年醫學博士の學位を授與せられ、歸國後、楠病院の院主となり診療に従事してゐたが大正七年四月病を以つて俄に易簣した、養父正任氏の死去未だ百日に満たざる際の際の事として、楠病院は茲に經營中心人物を失ひ、一時途方に暮れたが、衆議は遂に正任氏夫人の實弟である橋本善勝氏に懇請して、院主代理の任を托することになつた。

橋本氏は、明治十年、大川筋に生れた、大川筋の橋本と云へば一廉の名門であつた、早稻田大學の

政治經濟部を出づるや、帝都の新聞記者となつた、そして少壯記者中の花形として重きを爲した、と云ふのは氏は天性の政治家肌であつて政界の巨星達と常に相往來したからである、氏の生れた大川筋には久保義道といふ土佐政界の一怪星がをつた、池知春水なきと板垣伯の自由民権主義に反対し、随つて政友會にも反対した、稱して土佐國民黨と稱する保守黨の頭目であつた、橋本氏は新聞記者として此の久保、池知の人々と政見において共鳴するものがあつた、そして土佐の政友會が中央派、郡部派の二つに割れて互に勢力争ひをしてゐるうちに、中央派即ち富田幸次郎、森下高茂氏等の一派は、久保、池知、橋本氏等の舊國民黨と合体して鞏固なる非政友同盟をつくりあげた、偶々總選舉に出喰はす事になつたので、橋本氏は中央において乾坤一擲の大芝居を打ち、土佐政界の沈滞梗塞を打破すべく計畫した、當時橋本氏は東京日日新聞の政治部長であつた、そして同社の社長は加藤高明であつた、加藤は三菱の女婿で土佐と縁故があり、それに大選區の時節柄、天下的人物を代議士に挙げねばならぬと云ふ觸れ込みで、加藤を土佐から出さうぢやないかと云ふ策謀が極秘裡に行はれ、その策謀の中心人物が實に橋本氏であり、見事その策謀は成功したのである、これは橋本氏の大手柄として特に記しておく、

此の一事で橋本氏の人物手腕が解る筈だ、此の橋本氏が今や楠病院の總取締として、善智を搾り、善謀を練つてをるから、その前途は推察に難くない

宇田耕一氏

土佐實業界の大御所宇田友四郎翁の二世で明治三十七年生れだから人生を花に譬ふれば今が蕾と云ふところだ。學歷は城東中學から高知高校を経て京都帝國大學經濟科を卒業してゐる。中學校時代から學生仲間で人氣があつたが夫れは親爺が土佐の大實業家と云ふ光があるのみではなく、耕一氏の個性に人を引きつける魅力があつた爲である。氏が大學を卒業した當時は恰度友四郎翁と親善な仙石貢老が南滿洲鐵道株式會社の總裁であつたので其の關係で同社に入り、天性の明敏を實社會の仕事の上に働かして且つ修養し、且つ活動し、大いに其の將來を囑望されたが、併し滿鐵と云ふところは半官半民の會社であつて内地の會社とは餘程其の趣を異にしてをり、加ふるに滿洲の日本人から見ると滿鐵様々で、滿鐵あつての日本人と云ふ觀念がこびりついてをるから滿鐵社員と云へば内地人の想像以上に滿洲では大持てゝあり、特に料理屋などでは下にも置かぬ待遇振りである。だから青年のためには滿鐵と云ふところは身の樂になるところではない。此の意味において嚴父友四郎翁が病のため土佐の事業界を隱退するに當り迎へられて土佐電氣株式會社の常務取締役となり更に社長の重職に推されたのは寧ろ氏のためには慶すべき機縁であつたと思はれる。

氏が初めて社長に就く時社内には不平の聲をあげたものがあつた。白面の一書生が一十萬圓の大會社を背負ふて、親の光の七光りで血氣に任せ、獨斷専行をやられては耐つたものでない。この危惧心が不平の聲と爲つて爆發した。けれども此の青年社長は親の光りで其の椅子に就いたのでなく自己の實力、自己の理想でどしどし改革を斷行し、そして其の改革が會社の營業を黒字に導く華やかな業績となつたのであるから、年寄株も半歳ならずして青年社長に心服することになつた。氏は學生時代から韌氣があり普通金満家の子弟のやうな温室育ちでなかつた。之を友四郎翁の波瀾多き生涯に比すると苦勞の足りない點はあらうが、天性利發であるから苦勞人の鼻を摩する程のよさがチラ／＼見へる。今から十年前に縣の實業界では「第二の宇田は誰か？」と盛んに論ぜられたものだが、其の第二の宇田は敢て他人を煩はさず第二世自らが立派に第二の宇田と爲つたのであるから之れ以上の幸福は滅多にあらう筈がない。病中の友四郎翁も定めし安心したことであらう。

白井鹿太郎氏

白井鹿太郎氏は明治三十四年の生れで高知商業學校の出身である。土佐の先輩者間で人を見る明において横山又吉翁は第一人者の烙印を押されてをるが、翁は能く白井氏の人と爲りを知つてをる。

其の横山翁が白井氏を評して、「現代の鹿太郎氏は性質から手腕から一切が祖父の鹿太郎氏そっくりである。祖父の鹿太郎氏は土佐では他に比類無き大商人で徹頭徹尾「吾は商人なり」と云ふ立場を守り、市會議員だとか、縣會議員だとか云ふやうな名譽職をば見向きもしなかつた變りものであつた。今の鹿太郎氏が恰度それで實利實益以外の何物をも追はない。祖父は剛毅で駈引に強かつたが今の鹿太郎氏も矢張り剛毅で駈引に強い。」と言つたことがある。恐らく氏の全貌を盡した批評であらうと思はれる。氏の營業は海運業と石炭業が其の主なるものであり、

白井商事株式會社々長、白井酒造台名會社代表社員、合資會社富田屋出資社員、四國日産自動車株式會社々長

等々が其の肩書である、一見したところ男でも惚れさうな好男兒だ。だが此の好男兒は其の昔、大江匡房が八幡太郎を評して、「好男兒惜むらくは兵法を知らず」と言つたのとは事かはり、株をやつても斷じて損をしないでふ株戰の兵法にも通じてをると聞くから、度胸のある商人であることが解る。明治時代の實業家で言へば藤田傳三郎か、天下の糸平か、五代友厚か、岩崎彌太郎か、此等豪商の型と相似たものを見ることが出来る。蓋し氏は土佐實業界の風雲兒で現代の主役を演ずる一方の雄だとの折紙を附けられてをる、隨つて氏の支配力は益々廣汎、深刻かつ強力となりつゝあるのである。氏の令室は名士藤崎朋之氏の令嬢で琴瑟能く相鼓し、姑即ち朋之氏の未亡人をば自分の母の

やうに大切にし新町田淵に立派な邸宅を供し存りに孝養を盡してをる。斯様な點から考へて氏は一面亦た純情の人でもある。敬嘆々々。

野中楠吉氏

土佐の新聞界で成功した謂ゆる新聞人を擧げるなら何人も先づ指を現高知新聞社長野中楠吉氏に屈するであらう。昔の土陽新聞の經濟記者(月給四圓)を振り出しに遂に今日の地位を築いた其の過ぎ來し道振り返ると、波瀾重疊、まさに人生の惡戰苦闘史である。

土陽新聞が京町に在つた時、即ち富田幸次郎氏が主筆、岡本方俊氏が事務取締役で在つた頃氏は既に編輯部の幹部として重きを爲し一面亦た縣政界にも關係してゐたが、縣政界が中央派、郡部派に分かれ、土陽新聞が郡部派に占領されるや、氏は岡本氏や富田氏等と共に高知新聞社を創立し、自から營業部を主幹して最も困難なる經營の生命線を擔當したのである。

元來新聞の經營學から云ふと、最初編輯局に居り記者としての休養を有し、後ち營業部の仕事にたづさはつた人物が最も理想的だとされてゐるから、氏は恰も此の條件に嵌つた人物である。蓋し岡本方俊氏の歿後、氏が社長の椅子に据へられたのは極めて順當である。それに氏の頭腦は數理的

に活躍し、理智的に働くから新聞の經營には持つて來いである。世人或は故杉駿三郎氏と同格にく者があるけれども新聞の經營と云ふことにかけては杉氏は野中氏の側にも寄れない。杉氏は感情で動き野中氏は理智で動く其處に大なる差違があることを知らねばならぬ。

要するに氏は新聞の經營者として生れて來たやうな人物であり、岡本氏の後に野中氏あつてこそ高知新聞が初めて堅實なる地盤をかためることが出來たわけである。唯だ問題は野中氏の後繼者ありや否やである。

野老山齊氏

人間の精神とか心とか云ふもの其の面貌に表現されてゐる。多士濟々の野村組にあつて取締役と總務部長を兼ね、事實上同社の樞軸を占めて居る野老山氏はうち見たところキビ／＼した眼に入つたら鼻へ抜ける様な、一を聞けば十まで直ちに吞むといった様な才子肌の構へに先づ人の快感をそゝるものがあり、其處に又氏の一徳が自からにして具備されてゐる。高知鐵道時代には大野武夫氏と管鮑の交りで思ふ存分に驥足を伸べ、同氏と共に其の將來を大いに囑望されたものだが、大野氏も仲んだが野老山氏も亦更に大成を見たものである。即ち氏の行き方は一歩／＼に堅實なる地盤を

踏み固めて行く主義だけに、御大野村茂久馬氏の信任頗る厚く、氏の地位には微塵危つ氣のないところが、他の所謂新人と稱されるもの乃至新進實業家と趣きを異にしてゐる。現に高知市會議員として活躍する傍ら、四國海運株式會社、東洋貿易汽船株式會社、共同海運株式會社等の各取締役として順風滿帆行くとして可ならざるはない活動振りである。

氏の出生地は安藝郡安藝町、明治二十八年生れで、市商中途退學後、高知銀行から關西貯蓄銀行に轉じ、大正九年の黄金時代に土佐商工會社を創立して取締役となり暫らく帝都に活躍、歸縣後高知鐵道會社と野村氏との締結の功勞者として同社の支配人に就任、後土佐バス株式會社常務取締役となり、前記の會社の外に土佐古代漆器の社長、司牡丹株式會社、資生堂高知販賣株式會社、高知クラブ化粧品販賣株式會社の監査役等々、縣下實業界の花形として縦横の手腕を見せてゐる。

川崎庄五郎氏

八百屋町川崎本家の先代源右衛門氏は弓術日置流雪荷派の免許皆傳を取つた斯道の達人であつたが川崎庄五郎氏は十六歳の時から此の源右衛門氏に就いて弓術を習得する機縁に恵まれ、明治、大正を通じ本出流の宗家に入門し、東京で八年間その術を磨き、更に日本武徳會の範士岡内先生に就い

て八、九年間研究をつゞけ大いに其の道に精進したものだ。然るに其の時代は弓術の眞價が一般から認められなかつたから折角の實力を持ちながら京都武徳會の試験を受ける氣にもならなかつたところ、昭和九年五月時の本縣知事坂間棟治氏が大に氏の實力を嘆稱し、熱心に勧めた結果遂に試験を受けて教士號を貰つた。

爾來武徳大會にも堂々出席し松山の支部からも特に招待を受けるし、又た徳島支部で有名な弓の先輩中島龍之助氏とも交りを許し、次第に名聲が高まるに及んで昭和十年五月には京都武徳會範士阿波研造氏、同神長範士が態々來縣して、本町乗り出しに川崎邸を訪ひ敬意を表したのであつた。

氏は今や高知武徳會弓術部長となつてゐる。而して之は決して旦那藝でなく、十六歳の時から鍛練された實力の輝きであることを知らねばならぬ。高知には昭和十一年の二月から早起會が獻立つたが氏は數年前より毎朝五時に起床し武徳會へ出掛けてゐる。

氏が富豪の身でありながら飽食暖衣の安樂に墮せず終始一貫弓術の爲に全魂を打ち込む其の精進振りは特筆大書に値ひする。

×

×

×

西山龜七氏

安藝郡は由來實業家の驥北であるから、大實業家も出で、中實業家も出で、小實業家も出る。高知市中の丁稚小僧は大半が安藝郡出身者であると聞く。今日の丁稚小僧は明日の實業家であることを知る者は、安藝郡から大實業家の輩出することが決して不思議でもなく偶然でもないことを解するであらう。現代の土佐の實業界において安藝郡奈半利村出身の野村茂久馬氏と、田野町出身の西山龜七氏とが相提携してゐる風景は至つて朗らかである。兩者の性格は或は正反對ではないかとも見られるが、人間界には反對性の調和といふものがある。陰性の亭主と陽性の女房とが能く調和する如く疎枝大葉主義で荒削りの野村氏に配するに細心にして周密なる西山氏を以てする天の配劑は亦た甚だ妙である。西山氏はクリスチャンで律義一天張りの流儀である。勿論商才の勝れたものもあるであらうし、實業その物に天性の趣味を持ち合せてゐるであらうことは西山合名会社の營業振りを一見すれば判明する。土佐セメント株式會社の取締役、高知鐵道株式會社の副社長、合資會社四國モーターズ代表社員、高知穀物同業組合長、高知縣肥料協會々長、高知商工會議所議員商業部長等々の肩書で如何に實業界に信望があるかを想像するに餘りがある。氏の如き人格者を有するこ

とは實際土佐實業界の誇りである、明治十五年五月五日生れだから今からが働き盛りだ、自力成功の眞人として特筆大書する。

西山徳治氏

包容力の偉大な野村ムツソリーの旗下には種々の人材が百花燎亂の形である。

昭和十一年の新春早々、高知市長を何人にするかの問題が起つた時、野村組の幹部どころではムツソリーニを市長に推す者と、それに反對する者との二つの色に分かれた、其の時親爺を市長にと大馬力をかけたのが野村自動車株式會社營業課長である市會議員の西山徳治氏であつた、氏は野村御大直參の松山秀美、川谷良馬氏等と固く握手して自信に邁進した、筆者は彼の時初めて氏の熱と力とを知つたのであつた……氏は安藝郡田野町出身で縣立農林學校卒業後王子製紙、專賣局、レコード石鹼會社等に勤務後、歸郷して野村組新聞部に入り同自動車部を経て土佐バス株式會社に轉じ更に自動車部の課長となつた、資性温順、明敏なる頭腦と卓越せる手腕は一般から認められ野村組の重要人物として名聲の籍甚たるものがある、前年最高點を以て市會議員に當選せる一事をもつても其の社會的信用をトすることが出来る、蓋し少壯實業家中の好々人である、明治三十年生れだから尙ほ壯なり、これから思ふ存分に腕を揮ふべしである。

北村秀實氏

北村秀實氏は四國銀行上街支店の支店長として重きを爲してをる、四國銀行は高知市内に三つの支店と一つの出張所を有してをる、乃ち江ノ口支店と、北街支店と、鴨部の西出張所と、そして上街支店であるが、江ノ口支店は支店長以外に三名の書記と一名の見習生、北街支店は支店長以外に三名の書記あるのみで創立も新らしければ仕事も少ない方だが、上街支店は此等に比して斷然群を抜く最高峰であり支店長の次に次長があり、書記の数が恰度十人である、北村氏は將に本社重役の眼鏡をもつて此の重要な支店の總裁として据へられたのであるが、渾身これ活動と云つたやうなキビくした手八丁、口八丁、足八丁の遣り手であるから成績がグン／＼擧つてをる、出身地は香美郡立田村、明治十七年生れたから本年五十三歳の働き盛りである。

宮地巖氏

宮地巖氏は縣社天滿宮の社司である、近時日本精神の高調せらるゝと共に神様に對する國民の崇敬

心は驚く程高まり、小中學校の男女學生など神社の鳥居前を通過する時には必ず最敬禮をする習慣となつてをる、之は洵に結構なる現象であるが、これと共に神官の地位も亦た從來に比して一段と向上したことを否むことが出来ない、同じく縣社とは言へ滿江の天滿宮は管公の嫡子高親朝臣と深き關係があるから縣民の天滿宮に對する敬神的觀念は亦た格別であり、此の尊嚴を保つ神社の社司に宮地氏があることは謂ゆる適材を適所におきたるものとして頗る其の人を得てをることを慶祝する、どうも近頃の神職の中には余りに職業的なのがあつて甚だ不愉快を感じることがあるが、宮地氏は神の心を心とする天真爛漫の人で何時會つても春風に座する思ひがある、これではなくては天滿宮の社司は勤まらない。明治十八年六月二日生れ、吾川郡芳原村の出身である。

竹村茂雄氏

竹村茂雄氏は元貴族院議員竹村與右衛門氏の二世である、與右衛門氏は土佐實業界の聖人君子をもつて一般から尊敬せられた神様のやうな人である、菜園場木屋橋の元において祖先代々の家業たる金物業を經營しつゝ、ブラジルへの移民會社を起しなごして國家のため貢献した篤志家である、此の篤志家は謙遜その物の如き好々爺であるが、二世の竹村茂雄氏も同翁の善き遺傳は悉く取り入

れて、之れ亦た謙遜の美德に富み、多額納税者たることを毫も鼻に掛けたりせず、町内の弱き人達貧しき人達には心から同情して色々と世話を焼き、同時に町の總代として模範的の行爲をすることゝろなど確かに紳士中の眞紳士である、明治二十四年四月二十九日生れだから本年四十六歳、安田善次郎翁の言葉では四十、五十は鼻垂れ小僧ださうなから、氏の特徴とする靜かなる歩みが十年二十年の後も如何に美はしき花となり果實となるかそれは氏の品性と人格を智る者の齋しく待望するところである、大日本度量衡協會の高知支部長に推されてをり、別邸を巢窟庵と稱するなど、如何にも平民的で、如何にも奥床かしいではないか

櫻木健一氏

土佐は昔から酒の國であり、従つて酒造業者が澤山である、そして其の數ある酒造業者の中で最もふるき歴史を有してをるのが、名たゞる「高知の櫻木」である、「花は櫻木、酒も櫻木」と謳はれた程の名家たる東種崎町の櫻木からは明治の末期になつて貴族院議員を出してをる、その貴族院議員こそ今尚は高知市民から追慕尊敬せられてをるが、二世の嘉右衛門氏は不幸にして病弱のため家政を見ることが出来ない、然るに二世には立派な令嬢が二人あり何れも評判の美人である、そ

こで其の長女が高等女學校を卒業して年頃となるや、安藝郡土居村より迎へられて養嗣子となつたのが即ち當主の櫻木健一氏である、氏は資性至つて温良、志操堅確、人と交るに誠意を以てする、故に櫻木家は此の人を得て「葉柳」の再建が出来たのである、明治の中期から末期にかけて銘酒葉柳の名は全縣の酒造界を風靡してゐた、それが二世嘉右衛門氏の久しきに亘る病氣のため一時衰へてゐた、けれども積善の家には必ずや余慶がある、健一氏の代に至つて葉柳は昔の輝やかしい姿に復活した、若き健一氏は今後其の恵まれたる天稟を働かして、櫻木家を葉柳の名聲を全縣に高鳴らすであらふことを待望する。

高木契闔氏

高木契闔氏は三重縣の出身、野村自動車株式會社の専務取締役として飛ぶ鳥を墜す勢がある、夙に早稻田大學を卒業して大倉組に入り紐育支店長に拔擢せられて米大陸の空氣を吞吐してをるから土佐の田舎にくすぶらすは惜しい位だ、土佐へ來ない以前に、共同商事、九州鑛業、大平建築等々に各會社の取締役だつた閱歴が物を言ふのは勿論、氏が最初米大陸に派遣せられたのは明治四十年であり、大正三年一旦歸朝して大倉組の大阪支店次長を勤め、翌四年より五年に亘り中部アメリカに

出張を命ぜられ、同六年カリホルニヤ地方に出張、同七年再び歸朝、同八年大倉組を辭して南洋ジャワとの通商貿易機關たる共同商事を創立し、兼ねて九州鑛業、大平建築等に關與し、昭和元年大倉組に復歸することになった、此の間の波瀾は相當なもので随つて自己鍛鍊の機會に恵まれた昭和二、三年偶々野村組自動車部が大倉組と提携の氣運を醸成するや氏は大倉組を代表して來縣、直に同社の常務取締役となつて全權を揮ふたが、郷に入つては郷に従へで同六年末遂に大倉組を辭して野村組の人となつたわけで、氏の明敏と果斷は野村組の人々から荐りに稱讃されてをり、野村茂久馬氏も亦た深く氏に傾倒してをるさうだ、氏は此の以外において宇佐自動車、四國自動車、城北自動車、土佐自動車、中央自動車、愛媛自動車等々の取締役を兼務し、土佐の交通のため最善の努力を拂ふてをるところ、縣民の感謝に値ひする。

岡内瀨一氏

辯護士岡内瀨一氏は吾川郡諸木村の出身で少壯辯護士界の白眉として知られてをる、刑事の辯護で來い、民事の辯護で來い、行くところをして可ならざる莫しで裁判所方面の信用も厚いと聞ひてゐる、天性聰明にして霸氣に富み、人に接するに城府を設けず、清濁併せ呑むの雅量を備へてをり、

加ふるに人情に厚いから「人間岡内」としての名聲が大衆的に籍甚たるものがある、随つて氏の人と爲りに推服する岡内ファンは氏をして政治家たらしむべく既に市會議員に當選せしめ、次いで縣會議員に選出する用意は出來てをるものゝ高知市では上の方が聞へてをるため滿を持して放たずの姿勢を取つてをるところに將來を約束せらるゝ希望と光明が輝ひてをるから何も焦燥の必要はない筈だ、大器は晩成であり天才は三十にして凡人に劣る、岡内氏の骨相から判斷するに晩成の運命を有つてをる、だから徳川家康の教訓の如く、人の一生は重き荷を負ふて歩むが如し急ぐべからずを紳に書かして千里の牛を學ぶのが賢明だとする、氏の如き有爲の士は行くく代議士にも出し中央の檜舞臺で其の力量材幹を磨くことが、やがて土佐の人才を彬出せしむる所以とならふ、高知無盡株式會社の監査役、司牡丹酒造株式會社の監査役に選ばれなどして其の足跡を實業界にも印してをるが、氏の圓滿なる性格を以てせば各方面の引つ張り風となること請合ひである。

森田唯彦氏

明治生命高知支店の幹部に森田唯彦氏の存在を知らないものはないだらふ、氏は歐洲戰當時の好況時代に滿洲へ渡り相當の富を擱んで歸來小高坂越前町に居を卜し、數軒の貸家をこしらへて悠々自

適の出来る身分であるなれども、活動力の旺盛なる氏は左様な隠居じみたことが大嫌いであつて明治生命の社員となり大に外交的手腕を揮ひ謂ゆる外交部長の格で年々歳々素晴らしい成績を挙げたのである、だから本店の重役達も高知に森田あり以つて意を強ふするに足るとの信任を拂ひ氏の力量を認め次第に氏を重用することになつた、氏は頭腦實に明敏で如何なる問題に當面しても快刀亂麻を斷つ如くに片付け、搗て、加へて辯舌最も流暢であり、且つ感情に馳せず常に理性を以て物事を處理するので未だ嘗て違算のあつた例がないと言はれてをる程だ、往年城北問題の起るや、甲藤竹八、奴田原俊吉、北村勝馬、大西正太郎等々の人達は知事の措置を憤慨し、縣會の決議に反対を聲明し勇敢に闘つたのであつたが、森田氏も亦た知事の片手落ちと縣會の横暴に正義の憤りを發し挺身して城北中學校復活の輿論を喚起するに力めたのであつた、然るに父兄の委員達の中には或は感情に馳せ、或は自己の野心に出發して此の渦捲を利用せんとする人々もあつて一部からは頑冥とか不純の批難さへ受けたが、唯だ獨り森田氏のみは左様な批難を受けずインテリ階級から「森田の意見は正しい」と尊重せられたことを筆者は記憶してをる、氏の如き純潔にして硬直なる有爲の士は保險界以外の社會でも、有用の材として用ゐらるゝこと勿論であるが、一面から考へて此の有爲の士人が保險界にあると云ふことは、保險の價値を一般民衆に解せしむるために歓迎すべきことであらねばならぬ、好漢自愛せよ。

とであらねばならぬ、好漢自愛せよ。

岡林敏輝氏

毀譽輕きこと塵の如しと古人は言ふてをる、岡林敏輝氏が久原房之助氏に接近し、氏の權利に屬する長岡郡嶺北の滿庵山を久原の手を通して非常に高價に賣り附けた時、世人の多くは其の成金振りを羨望して蟻の甘きに附くが如く氏の周圍に集つた、がその後氏が政友會支部の利權問題に連坐して刑務所に收容せられ二百數十日間未決監に拘禁せらるゝや幾んど岡林のオの字を口にする者がなくなつた、金を儲けたと言へば「岡林は偉いものだ」と褒め上げ、牢に入つたと聞けば「それが何なるか」と悪口を言ひたがる、之れが普通の人情らしい、乃ち成敗を以て人を論ずるのが俗衆の心境であつて、成功すれば無暗に好評を浴せ、失敗すれば散殘にこき卸すのが普通人の態度であるところで筆者は之れと人物眼を全然異にする、岡林氏等と相前後して刑務所に收容せられた名士非名士、有象無象は箒にて掃く程ある、そして彼等の中には平生事無きの日には小さい人間の智恵を振りくり廻つて天晴れ人の風上に立つた男なのに、今度刑務所へぶち込まれてみると弱ひこと夥たゞしく丸で青菜に鹽の尾羽打ち枯らした姿となり平生の豪語何處へやらの感を深くせしむる者が決

して鮮少でない、換言すれば彼等は自己の非常時に際會して男振りを下げ切つた連中である、然るに唯だ獨り岡林氏のみは彼等とは正反對に心ある者をして其の男らしき態度に舌を捲かしめたのであつた、人間の眞價は平生には解らない、何か人生の嵐に遭遇して初めて判る、筆者は敢て多くを言はない、陸奥宗光や林有造やが牢から出て来て男振りを上げたやうに岡林氏も牢から出て男振りを上げてゐることになるだらふ、好漢前途尙ほ春秋に富む、宜しく自重自愛して捲土重來の勇を養ふべきである。法學士で市會議員、縣會議員、未來の代議士である。

松村正太郎氏

松村正太郎氏の先代松村寛藏氏は宇田、川崎と比肩した實業界の重鎮であり豪放の一面に細心の用意があり且つ人生意氣に感ずる熱血の快男子であつた、此の父の血を多量に享けてゐる第二世は市立商業學校で横山又吉翁に仕込まれた一人だが、翁が會て市商出身の青年實業家をかすへ將來大成する器量を備へてをる者に松村があると心から望みを囁してをつたことがあつた、人を見る明のある横山翁のことだから其の眼鏡に狂ひのあらふ筈はない、由來大器は晩成する、慶應義塾の大學經濟科に學んで秀才の譽れ高かつた氏が土佐に歸つて、土佐銀行の國庫課長となり更に土佐東部電氣

株式會社の社長となり或は高知商業會議所の常議員に擧げられなごした過去の華やかなコースを回顧する時、その如何に實業界の輿望を負ふてゐたかを知るに余りがあらふ、人間は誰でも過去、現在、未來の繋がりを有つてをるが氏の現在は高知瓦斯株式會社、土佐電氣株式會社、土佐織物株式會社、土佐貯蓄銀行、四國銀行等々の取締役たると共に土佐倉庫株式會社の監査役を兼ねて然かも多々益々辯する概のあるところ、流石は舊師横山翁の鑑識に狂ひ無きことを立證してをると思う、明治十七年二月十六日生れだから本年五十三歳で正に人生活動の最高潮期である、地下の寛藏氏も此の好後繼者の事業振りを見て滿悅の態であらふ、正八位在郷軍人陸軍三等主計は余興の肩書として附け加へておく。

山本純義氏

土佐實業界の慧星的人物と稱せらるゝ山本純義氏（舊名義孝）は高知市大川筋の出身、青年時代から縣外に出で、富を作り、後免より手結に至る高知鐵道株式會社が創立當時幾んど收拾すべからざる亂脈の状態に陥るや、氏は郷國の交通事業のため一臂の力を添へ其の社長となつて之を經營した氏が本縣の事業に關係するやうになつたのは此の時からで同時に自分の生れた大川筋に宏壯な

る邸宅を営み、同じ大川筋の流れに深瀬、大脇、野村と云ふ如き富豪が東西に薨を並べたのであつた、氏は是より大に驥足を郷土の舞臺に伸ばすべく或は市會議員となり或は縣會議員となつたこともあるが、併し氏の理想は高遠であり氏の志は遠大であつて區々たる蝸牛角上の政争などに没頭することは氏の明朗なる性格の拒否するところであるものだから間もなく政界より隱退して雌伏生活に入ることになり、其の間社會事業協賛會理事長、高知市融和事業協會々長などをして社會公共のために犠牲を拂ひ、或は閑に乗じて鑛山業にも手を着けたこともあつた、氏は天性の美質に加ふるに磊落で太つ腹であり特に弱者に同情する義侠心に富んでをるから土地の人望は頗る盛んである、明治十八年生れで本年五十二歳だから大仕事はまだく、之れからである、元來慧星的人物だから眼界豆よりも小なるやうな俗衆の豫斷を許さず如何なる風雲を捲き起すか端倪すべからざるものがあり、末知數の人物として興味百パーセントたるを想はしめるが、近時何を感じてか『生長の家』に精神的修養を重ねてをる風景など愈よ出で、愈よ面白いではないか。

齋藤島太郎氏

高知市水道課長齋藤島太郎氏は高岡郡浦ノ内村の出身、明治十一年二月二十四日生れだから本年五

十九歳、氏は其の前身が長い間の教育家である、縣師範學校修學中に多分大西正幹氏と同窓であつた筈だ、此の關係からして爾來大西氏とは密接な關係がある、持つべきものは友人だとの感は水道課長たる齋藤氏の胸中に日夜徂徠してをるだらふ、氏は中々の伶俐者だから師範卒業後も身を處すること極めて巧みで平々凡々の椅子に甘すすることが出來ず、向上心の發露するがまゝに、そして天性の能文家たる趣味も手傳つて一時、高知新聞の記者となり、八濱郎の名で文壇に鳴らしたこともあつたが、土佐の新聞社は由來待遇が酷薄で、寧ろ小學校長以下であつたから、氏は久しく居るべき處でないとの悟りを開き復た舊の教育界に返り咲きをして、宇佐尋常高等小學校長、高知市第五尋常小學校長を勤め押しも押されもせぬ第一流の校長に納まり熱心に教鞭を執つたのであつた。教育者としては少しく覇氣に富み過ぎる方ではあるが、世の中が能く解つてをるために部下などに對しては洵に思ひ遣りの深い方であり隨つて校長として盛名が傳へられた、然るに機を見るに敏なる氏は足の洗ひ時を心得てをるから川島正件氏の市長時代市長秘書に轉向し隱忍數年、そして現在の水道課長に昇進したと云ふのが氏の經歷の概要である、天性世話好きで二六時中飛び廻つてをる高坂高等女學校協會の常務理事も畢竟世話好きのあらはれと見るのが間違はないところだ、恒産はあるし、恩給はあるし、其の邊は泰然たるもの朗らか々々々。

友永安太郎氏

友永安太郎氏は安政六年九月二十七日生れだから高知市では古老組の一人に算して不都合はなからふが、然し兎ても元氣で壯者を凌ぐ慨があり衆人稠坐の前で今頃の若い者は俱に語れぬきに困る、六丁目なら何時でも御伴をするぞよと冗談半分に青年を鼓舞鞭撻するところ流石は昔し取つた杆柄だけあると感心せしめる、自由盛んなりし時には、板垣伯の氣に入りで上街組の牛耳を執り、伯の主唱で土陽新聞を起すや氏は上街組の重鎮を卒るて土陽新聞の營業部に入り財産を注ぎ込んで創業當時の土陽新聞をより立てたのであつた、だから氏は見かけによらず新聞の經營の事が能く腹に這入つてをり、そして今尙ほ當年自由黨の志士たる氣魄の名残りを藏し近時の土佐の政界を眺め實に地下の伯に相濟まぬと涙を流してをる一人である、此の政界の志士は一面において中々の理財家であり随つて實業界との交渉が深く、前には高知巡航株式會社の社長に換され、現に浦戸灣汽船株式會社取締役、宇佐運輸株式會社取締役、三和自動車株式會社監査役等々の重職にある其の勢力は湖畔の松の如くに擴がつてをる、氏が年を取つて老ひないのは想ふに此等の仕事にたづさはり二六時中活動をつゞけてをる爲ではなからふか、土佐の青年は宜しく氏の精力絶倫に學ぶところあつて可

なりである、そして此の歴史的人物を大尊敬すべきである、上街の元老友永安太郎氏の名は蓋し永久にのこるであらふ。

小松米吉氏

芝蘭幽谷にあるも衆香下風を拜す、人格の士、實力の士は自から焦らずして必ず重く用ゐらるゝことにきまつてをる、四國銀行の取締役兼支配人たる小松米吉氏は押しも押されもせぬ土佐實業界の重要人物として信望と勢力を收め、實業界に無くてはならぬ人物だと各方面から推重されてをる、氏は市立商業學校の出身であるが大正八九年度頃の好況時代に高知商業銀行が出来て縣の財界に活躍し氏より後に市商を出た人達が同行の重役に收まり我が世の春を歌ふた時代には俗物の眼には小松氏の姿が甚だ訝へないやうに見えた、けれども小松氏自身の人生哲學から言へば夫れは蜚ばず鳴かすの時代であり雌伏の時代であつた筈だ、そして小松氏は其の間に於て靜思し且つ修養した、氏が今日あるは或意味に於て其の當時の靜思修養の賜物とも言ひ得らるゝであらふ。

試みに氏の過ぎ來し道を振り返ると市立商業を卒業して高知銀行に入やる漸次頭角をあらはして貸附課長の椅子を與へられ大に其の才華を發揚したのであつた、大正十二年土佐銀行と高知銀行が合

併して四國銀行の設立せらるゝや氏は信任と興望を負ふて支配人の重職に就いた、爾來銀行の内
 から理想の支配人だとの折紙を附けられ年と共に四國銀行の行實となり、大黒柱となりて生命線
 を握り一面縣財界に重きを爲し昭和八年同行取締役に擧げられ安川保善社の副參事と爲り益々將來を
 囑望さるゝに至つた、此の間三四銀行支店の侵入があつたけれども小松氏の用意周到なる善戰健闘
 により四國銀行は微動だもせず泰然として大銀行の男振りを示したのであつた、氏は資性濃厚、頭
 腦明晰で人と交る至極圓滑であるから嘗て非難の聲を聞かない加ふるに力量、才腕、氣魄、明識が
 伴つてゐるそれは要するに氏の自己鍛鍊より生ずる人徳の然らしむるところであらねばならぬ、歴
 代の常務が大船に乗つた心地で居り得らるゝのも大支配人の實力を信すればこそである。
 近頃は政黨にも大幹事長といふのがある、それと同じ意味において小松氏は大支配人である、四國
 銀行は小松氏の銀行だと世間では言ふ者もあるが夫れ程小松氏の勢力は四國銀行内に培はれてを
 る、明治十八年生れたから五十二歳の働き盛りだ、氏の堅實主義を以てせば更に／＼大成すること聞
 違ひ無しである。

芝藤濱市氏

天狗堂眼鏡店經營者芝藤濱市氏が高知商工會議所議員に當選した時、筆者は氏の昵近者から成功立
 志傳中の人物たることを聞かされた、氏は徳島縣三好郡三好町が其の故郷で明治二十三年八月二十
 二日生れた、同地は古來眼鏡、小間物、文房具等の商品を肩にして縣外へ行商に出づる者が多い、
 氏も亦たその一人として十八歳の時、一肩に擔荷して高知に來り爾來三ヶ年間、一荷の商品を資本
 として有らゆる困苦欠乏に耐へ、奮闘又た奮闘、明治四十三年 年齢二十一歳の時、本町上二丁目
 に天狗堂なる眼鏡店を獨立開業し青年實業家としての第一歩を踏み出したのであつたが、業務日増
 に繁昌し、内容の充實を圖ると共に販路の擴張に力め、天狗堂の名は一市七郡に知らるゝに至つた
 、斯くて開業以來二十數年間に亘り此の間、市内各眼科病院の指定、縣廳その他官公衙の用達商と
 なり數名の店員を指揮して躍進又た躍進のコースを辿り隆々たる業務を示すに至つたのである、此
 の二十數年間における令夫人内助の功は特筆に値ひするものがあるけれども此處では略する、氏は
 眼鏡商をもつて天職と心得てをるから市内同業者と諮り、品質の向上、値段の協定を爲し、需用家
 本位と且つは同業者の共存共榮を趣旨とする高知眼鏡組合の創立に奔走し、組合の爲に盡くしたる

功績は永久に没することが出来ない、氏は一見魁偉なる體格の所有者で滿々たる鬪志と霸氣を藏し尙ほ將來において大に爲すあるの前途を約束せられてをる、氏はアメリカ合衆國眼鏡士の免許を有し會々島根縣主催の大日本産業博覽會や、高知市の第三回街道共進會等に出品して有功賞を授與されるなど輝やかしき歴史を有してをる近時は度量衡器の業務をはじめ益々發展の途上にある日本度量衡協會高知支部參事、伊野蘇鶴溫泉株式會社取締役、徳島縣人會常任幹事などの役目を忠實に盡してをるところ矢張り一代成功者の面影がある。

池内實吉氏

高知市主事教育課長池内實吉氏は八方無敵の人物だ、高岡郡新莊村の出身、師範學校では半山出身の大野美樹氏と同窓一級下であつた、大野氏は縣下の教育界に多數の乾分を植へつけ非常な勢力を有してゐたが、教育界の一部では池内氏が大野氏の後繼者だと言つてをる、が筆者の眼に映する池内氏は大野氏より、もつとく人物が大きいやうに思う、大野氏の天地は教育界に局限せられ或る意味において教育家の臭氣があつたが、池内氏の游泳する舞台は、遙かに廣い、そして大野氏に比して圓轉滑脱で人觸りが甚だよろしいから何人も好感が持てる、教育家と云ふよりも寧ろ政治家タイプを備へてをる、氏が須崎小學校長時代には坂本重壽氏など其の部下であつた、須崎小學校長は高岡郡の最高峰だから氏は間も無く郡視學となり、そして縣の學務課に入り中央の檜舞台で天賦の材幹を思ふ存分に伸べる時期が到來したのである、果然大金課長のたゞならぬ信任を得た、其の結果幡多郡立高等女學校長となり一時中央から遠ざかつたけれど、同校の縣立移管と共に再び市役所に入り學務課長を申付かつた、氏が得意の舞台は是より大に拓かれ、歌川學務部長の如き氏を事實上の相談相手と爲し、爾後歴代の教育上司は皆な氏を參謀としたのである、従つて氏の勢力は高知市の教育界を壓倒したが、世渡りの上手な氏は力めて自ら謙抑し片々たる小才子のやうにえらたがらず益々力を蓄積して他日に備ふるところがあつた、此の如き奥行きのある人物だから池内教育課長と云へば市役所の課長仲間が一番光り出したので、何時とはなしに助役の候補者として呼び聲が立つやうになつた、蓋し其の人柄が助役向きに出來てをる爲でもあらふ、適材を適所にと云ふ人材登用方針からすれば將來二名の助役を置く場合に氏が其の候補者の一人に指を屈せらるゝことは既定の事實として大鼓判を押捺する。

野村好之氏

野村好之氏は野村茂久馬氏の御曹子として有名である、昭和の維新だと言はるる一九三五年は野村王國のためにも第二の維新であつて、好之氏は此の非常時を迎へ豁然として大死一番の境涯に蘇生し來つたのである、乃ち過去の一切を清算して更生の新天地を打出したのである……業鏡高く懸く三七年、一槌に撃破すれば大道坦然たり……精神の鍛錬、品性の修養、悉く一槌の撃破から始まつたのである、顧みれば好之氏の前半生は煙幕のかかつた朦朧體であつた、氏自身の言の如く慙愧の過去でもあらふ、然しながら大悟徹底の好之氏には今や明皎々たる明鏡が至善の玉となつて現はれたのである、過つて改むるに憚るなかれ、かくて好之氏は斷然自己の改造と同時に天を敬し人を愛し神を拜み佛を拜む菩提心が出來た、報本反如は人間の識である、更生の好之氏は父ムツソリーの愛に對して深く感激した、孝子として面目を一新した氏は、毎朝五時に帯屋町の門を出て大川筋の父の家を訪ふことを日課とし、約一時間ばかり父子の朗らかな對談がある、好之氏の眼には茂久馬氏が頽然として老境に入つた感がある、老爺は何時までも今迄の元氣はつくまい、今後の野村王國を背負ふて立つものは自分である、三千の従業員の安危は自分の双肩に委ねられてゐる、自分は此等の従業員のため奮ひ起たねばならぬと云ふ涙が光る、斯くて渾身の勇氣を朝風になびかせながら先づ本町の自動車部に出勤して事務を執り、午後は白洋倶楽部の本社において二世らしき統

制振りを示す、好之氏は既に身を以て範を示すの意氣に燃へてゐるから、従業員に不眞面目な者があれば、自己の體驗を語り、それを實物教育として懇切に其の人の改過遷善を促すのである、従業員は叱り飛ばしてはいかぬ、慈愛をもつて化する事が大切である、第一世は動もすると弱い者をひしぎ附る癖がある、其の点において二世の方が和やかである、野村王國の揺がぬも一に好之氏の持ち方一つである。

正田 廉氏

南海晒粉株式會社の取締役たると共に同社土佐工場の工場長として羽振りを利かせてゐる、氏の本籍は和歌山市で現在は高知市八軒町に住してゐる、明治九年一月生れだから本年恰度六十一歳の還暦で之から大に若返るところである、氏は事業家としての經歷に富んでをり明治四十二年三月和歌山縣に在る南海晒粉株式會社に入社し青岸工場主任として敏腕を揮ひ、大正二年十月米國紐育ウワンタービルト街ワーナーケシカル株式會社の專賣特許にかゝるネルソン式食鹽電解苛性曹達製造法の研究と之に要する機械購入のため渡米出張して大に得るところあり翌三年六月大なる收穫をもたらしめて歸朝し、歸國直ちに南海晒粉小雜賀工場長として資金七十萬圓を以て前記苛性曹達製造工場

の設立に取りかゝり舶來の新智識を應用して其の設計及び建築に従事し、更に其の翌年八月北海曹達伏木工場の電解苛性曹達及び晒粉製造工場の設計並びに建築に従事し何れも成功を収めた大正八年九月圓滿に南海晒粉を退社、同時に獨立して工業藥品及び諸機械工具販賣業を創めたが、同十年十一月北海曹達の吉富社長と小泉專務の懇請により同社伏木工場の技師長として入社、同十一年六月吉富社長、小泉專務の辭任するや氏も亦た勇退して泉陽煉瓦株式會社を經營、同十二年七月同社の事業を立派に整理して退社、由良染料株式會社の支配人として入社中、同十四年土佐硫曹株式會社の取締役支配人として迎へられた、氏が抑も土佐と縁故が出来たのは此の時からで、昭和三年十一月一日土佐硫曹が南海晒粉へ併合せらるゝや氏は乃ち同社の取締役兼土佐工場長として其の生命線となり爾來十餘年氏の頭腦と手腕によつて經營實に宜しきを得益々成績を擧げつゝ今日に至つてをるのである、事業家としての氏は如上の事實が雄辯に其の實力を物語つてをるが、茲に人間正田氏として特記すべきは資性清廉潔白で従業員から慈父の如くに敬慕されてをる事であり、明眼の社長小泉米藏氏が正田氏を絶對信賴する所以のものは此の性格と、今一つは事業そのものに精根を打ち込み氏の爲には事業が第一の趣味である事であらねばならぬ、氏が第二の趣味は盆栽と將棋で其處に亦た氏の風雅と鬪争をよろこぶ男性的氣性を見ることが出来る。

岩 戸 辨 吾 氏

高知映畫界の巨人たる岩戸辨吾氏は世界館の支配人である、世界館の經營者は栗田鶴之助氏だが實際の仕事は岩戸氏が任かされてをり、世界館に關する一切の事は岩戸氏が切り廻はしてゐるのである、氏が世界館に招かれたのは辨形の出雲館が廢館となつてから間もない時からであつた、出雲館は故岡林謙三氏等辨形在任の有志を株主的背景としたもので岩戸氏はその經營の衝に當つてゐた、氏は元來親から仕込まれた生へ拔きの興行家であり亦た興行の天才でもある、此の人が出雲館を成功せしむることが出来なかつたのは主として同館が地の利を得てゐなかつた事に起因する、岩戸氏如何に敏腕家であつても水もの商賣である映畫では條件が具備しない以上駄目な筈で早く思ひ切つたところに氏の聰明を窺ふことが出来る、それに目をつけたのが栗田氏であり、松竹の優秀の映畫をもつて聞え更に地の利を占めてゐる世界館を岩戸氏の手腕に依つて縦横に經營せしめんとした栗田氏の人物鑑識眼には敬意を表する、果然栗田氏と岩戸氏の名コンビは大當りに當り當時日活映畫をもつて人氣を集めてゐた大山館をグン／＼抜いて「映畫はSへ！」の定連を獲得し世界館は高知第一の人氣を更に／＼向上せしめたのである、由來世界館の映畫は映畫鑑賞の知識階級に歡迎され

る風がある、例へば高校生の映畫研究者だとか、或は男女中等學校の卒業生だとか、或は又た一般の映畫研究者だとか言つたやうな映畫通に歓迎されてゐる、彼等の連中は「S」と稱して世界館の映畫に最も興味を有つてゐるが、詰まり優秀なる映畫が一番多く世界館へ來ると云ふ觀念を映畫ファンに頭腦に植へ附けたのが岩戸氏の政策であらふ、同館上映の映畫は外國物と日本の現代物とに重きを置いてゐるかの風があるが、千偏一律な時代劇映畫が然かも大河内傳次郎とか、片岡千恵藏とかいふ人氣役者がゐない松竹の時代映畫を以て對抗せず、巧みに外國ものと、現代物との優秀映畫に依つて近代人の映畫鑑賞心理を擱んでゐるところに岩戸氏の天才が閃めいてをる、岩戸氏は此の天才に加ふるに英斷がある、資本家に其の人を得た世界館は經營者にも其の人を得た、此くて現在の世界館が作り上げられたのである……岩戸氏は長岡郡天坪村の出身で明治十九年十二月十三日生れ……確かに映畫界の巨人たる資格を備へてをる。

伊野部恒吉氏

高知の實業界、政治界、社交界において伊野部恒吉氏の名は余りにも著聞してをる、氏は早稻田大學政治科出身の俊才で、銘酒瀧嵐の二世が大凡そ酒釀業とは縁の遠い政治學を修むると云ふ其の志

望を見て當時筆者は氏の將來に甚大の興味を繋ひたことであつた、果せるかな氏が早稻田の學窓を出で、舊き歴史を有する瀧嵐の店務を董督するや、天賦の俊敏なる頭腦をもつて銳意品質の改良を圖り、同時に販路の擴張に全力を傾盡したので同家の營業振りは實に人目を聳動するの飛躍を示し幾んど面目を一新せるかの觀を與へ、その品質、その造石高の如き斷然群を抜ひて各地の共進會、品評會等に出品して毎回優等賞を受領せざることなく瀧嵐の名は全縣を風靡し、多年灘酒でなくては夜の明けなかつた上戸黨の上層部も、瀧嵐があらば結構だ、灘酒の必要はないと云ふことになり非常な好評を博するに至つたのである、之れといふのも氏の頭腦の働きからであつて其處に伊野部氏の實力眞價が一般知識階級にまで認めらるゝ契機を醸醸し、政界方面にまで人氣が高まり、高知市同志會並びに民政黨支部として荐りに持て囃やさるゝやうになり「少壯伊野部」の名聲が縣政界に喧傳せらるゝに及んで、氏が早稻田大學の政治科を修めた其の意味が櫻花の如くに世人の鑑賞するところとなつたのである、そして政治家として其の華やかな行動は益々同志者間に重きを爲し、市會議員をもつて組織せる十五日會などを中心にして一時「伊野部時代」をつくつたこともあつた、明治二十九年生で前途春秩に富んでをるから氏の大成は蓋しこれからであらふ、高知市會議員、高知商工會議所議員、工業部副部長、高知市水産會々長、縣水産會議員、大高釀造株式會社取締役、土佐漁

業株式會社取締役として盛んに活動してをり、多額納税者仲間の新知識として尊敬せられてをる。

山本源三郎氏

保善社の眼鏡で、今春四國銀行の常務取締役に据へられた山本源三郎氏は大阪の生れである、大阪と土佐とは昔から財的な密接な脈絡關係を有してをり、土佐人から見た大阪は當さに飛躍の檜舞臺たる感じがするのである、だからこそ大大阪において活躍する土佐人の數は今や無慮十萬に達するの盛況であり、三つの土佐人會が地の利によつて組織せられ各々隆昌を呈してをる、幕末の卓見家林子平の言葉を借りるなら、浦戸灣の水は淀川に連なり、大阪灣の水は土佐灣に注ぐのであつて、此の天恵地恵交錯する大阪人と土佐人とは文字通り水が合うべく約束づけられてをる、大阪に育ち大附阪の水を飲んだ山本氏が四國銀行へ來たその最初から土佐の水に合うとの評判を取つた所以で之で判る。

そこで順序として氏の經歷をものすると、氏は學校を卒業するや、直に銀行界に游泳をはじめ、明治三十五年帝國商業銀行の大阪支店に入り雨滴岩を穿つ堅忍不拔の精神を確持して十七年間實務にだつさはり銀行人たる修養を積み頭腦と手腕を鍛鍊した後、大正七年その支店長に進み大に成績

を擧ぐるや、同十三年安田銀行の招聘をうけて主事補となり、間もなく秋田支店長を命ぜられ、同十五年三月京都支店長に榮轉、昭和五年三月大阪統轄店の主査を命ぜられ、翌六年八月銀行職制改正に依り重役席第二常務課長に擧げられ、七年二月主事に榮達し、斯くて銀行人として完成するに至り、氏が學窓時代の志は茲に達した譯で精神一到何事か成らざらんの金言は朗らかに實行せられたのだと我等は敬意をもつて觀する次第である、然るに氏は前途尙ほ春秋に富み多々益々辯ずるの餘裕綽々たるものがあるから、人材を尊重する保善社は今春氏を四國銀行常務取締役に擧用し、その豊富なる知識經驗を鮮やかに應用せしむる地位を與へたのである。

我等は氏に對して決して諛言する者ではないが、我等が初對面の第一印象を露骨に筆にするならば温厄にして快活、圓滿にして社交的、頭腦明晰、性格恭謙、捌けて垢抜けがしてゐて宛かも春風駘蕩の感じがある、要するに完璧の銀行人である、我等は地方財界のため大白を浮かべて慶賀する。

長尾芳吾氏

高知市内知名の實業家、海產物商、高知商工會議所議員の肩書がある、香美郡三島村の出身、本年五十四歳の働き盛りだ、人と爲りは至極眞面目で純朴にして無飾、渾身これ誠意誠心の結晶だと思

はせらるゝ氏が高知海産物商組合の組合長に推されたのは昭和八年であつたが、就任後間もなく一時世間を騒がした中央卸賣市場鹽干魚部の問題が持ち上り、海産物株式会社々長白井鹿太郎氏と對立して白井氏を敵に大喧嘩をやつたことがある、其の時に氏の令兄長尾渡吾氏は白井の番頭で主君のため馬前で討死する氣概を示し、茲に端なく骨肉の兄弟が敵味方に分れて鎬を削る修羅場を現出した、恰度その昔、源義朝と鎮西八郎爲朝が戰場に雌雄を決したのと古今同一事で、氏は大義親を滅すの信念より堂々兄を敵に廻はして旗鼓の間に相見へたのであつた、私情を棄て、組合の爲に奮闘した當時の涙ぐましき軍物語は後代に傳へらるゝ美譚だと今に噂されてをるが、當時の眞劍勝敗に依つて氏が如何に職務に忠實なる男性的人物であるかを判知するに餘りがある、海産物商組合の副組合長は竹内壽龜氏であり猪突猛進が其の主義だから、氏の堅實主義と能く相調和しそこに組合の美風を見ることが出来る、氏が海産物商を創めたのは明治三十六年で氏が二十歳前後の頃だ、氏の長令息は藥專に在學中で二男は海南中學校を卒業し氏の業を補佐してをる。

氏は野村茂久馬氏と親善であり肝膽相照の間柄であると聞く、氏の私心無きところに野村氏が惚れたのか、將た亦た氏の堅實に全幅の信頼を拂ふたのか、兎も角二人者の相許すところに人物鑑識の滋味があるのである。

國吉貞吉氏

土佐の紙業界における國吉貞吉氏の地位と名聲とは近時頗る輝かしい、日本紙業株式会社高知支店長の中内松次氏は今や病中の人となつて其職を辭し國吉氏がその椅子に坐つた、氏は土佐郡宇治村の出身、縣立第二中學校を出で、丸一紙會社に入り、天性の慧敏と眞面目な性格は中内久太郎、中内彌三郎、中内松次の三兄弟によつて愛せられ、漸次驥足を伸べるに至つたが、丸一が日本紙業株式會社に合併せらるゝに及んで同社の典具課長と爲り最も重要な海外輸出紙の振興に其の才華を働かし大に貢献するところがあつた、氏が現在日本紙業高知支店を双肩に荷ふて紙業界の爲に善戦健闘を續けてをる風景は、業界一般の大に意を強ふする處であつて亦た氏の爲に好壇場を與へられたものだと思ふ、人間の實力は機に觸れて初めて認められる、明則そのものゝ如き國吉氏に、明則の舞台が廻つたのは蓋し天意であらふ、天の與ふるところ取らずんば則ち禍ひありと云ふからには國吉氏たるもの遠慮なくドシ／＼天稟の手腕を揮ふべきである。

氏の趣味は浦戸灣内の釣りで休日は必ず太公望をきめてをる、此の餘裕あつて初めて大事業が出来るのである、好漢自重せよ。

竹内壽龜氏

高知市旭區赤石で堂々たる海産物商(主として鹽干魚類)の看板を掲げてをる竹内壽龜氏は長岡郡介良村出身である、介良は純粹の農村で氏の家も代々農家を業とし嚴父は勤儉の一天張りて淳朴な土の生活に始終したから氏も村の尋常小學校を出づるや直に百姓の手傳を命ぜられたが、社會の下積みとなつてゐる百姓の家庭經濟は想像以上にみじめなもので、一家一人の收入平均二十八錢位のもので、此のまゝ家業を繼承してゐたら所謂一生を擧げて水呑百姓に終始しなければならぬと云ふ生活問題に刺戟を受け、斷然商業をもつて身を立つるの臍を固め、先づ其の準備行爲の意味で鹽干魚物の行商を始めた、そして一ケ年位之に従事してをる間に大體商賣のコツが解つたから、大正十年赤石に在る片倉製糸の用達を請負ひ、翌十一年進んで朝倉聯隊の用達を志望し中尾主計に面會して其の理由を開陳した、理由の梗概は「自分は正九年まで台灣の一兵卒であつたが、病氣のため充分の御奉公が出来ざつたから、御恩返しに聯隊の用達でもつて御奉公を致したい、固より出来るだけ安價に物品を納入するから出入の許可をして頂きたい」と云ふにあつた、中尾主計は氏の熱心と誠意に動かされ「よろしい入札をやれ」と快諾してくれたので、大に喜び介良の嚴父に相談して村

の信用組合から三千圓の金を借り、これを資本に全部落札した、當時朝倉に興産組合なる聯隊の用達があり、此の組合が氏の事業を反對したけれども、營利を目的とせず奉公を目的としての氏の事業であるから何物も此の至誠を遮る譯には參らぬ、氏は草鞋履きで一生懸命奮闘した甲斐あり、一年の間に三千圓の借金を全部皆済して茲に凱歌の第一歩を奏したのであつた。

氏は現在赤石で鹽干魚類の大量取扱ひを爲し片倉、佐川、越知等の製糸會社と取り組んで盛んに用達をやつてをるので、店は中々多忙であり、昨年迄は大學出の事務員を置ゐてゐるが、令息が商業學校を終へ専ら家政を手傳ふてをる、氏は驚くべき精力家で朝は午前三時に起き夜は十時まで働くのが其の日課である、趣味は事業で仕事が三度の飯よりも好きであり他に何等の道樂がない、高知市會議員、亦た立志傳中の一人物と謂ふべきであらぶ。

高島正旭氏

江ノ口高島醫院といへば高知市内で誰れ知らぬものがない程高名である、と云ふのは高島醫院の歴史がふるいことも高名なる理由の一つであらふ、高島正旭氏は國手高島爲義翁の嗣子で長岡郡三里村仁井田が其の生れ故郷だ、明治四十四年に京都醫專を卒業して高知に歸り、研究の爲め楠病院に

入り居ること九年、此の間醫師として最も必要なる知識経験を修得したがなれど、元來研究心の旺盛なる氏は尙ほ二、三年同病院において研究を續々する考へであつたが、嚴父爲義翁が江戸口で醫院を開業してをり、其の嚴父の希望に従ひ大正八年三十三歳の時父の業を繼承することになつた、研究を生命とする氏のことだから、土佐のみならず東京に出て研究に従事したこともあり居常頭腦の新鮮と云ふことを心懸けてをるから感心だ、随つて醫を天職とし、醫以外の事は一切合切何事も忘れ唯だ全魂全心を自己の天職に打ち込むと云ふのが氏の信條だから貴い、人間としての氏の特徴は温厚篤實と仕事に忠實などの二つであり、温厚篤實な性格が流露して美はしき孝養となつてをる氏は本年五十歳、嚴父爲義翁は八十三歳の高齡であるが令翁はとても健康なのに死に對する恐怖心が猛烈であるものだから、安心を與へるため金錢の出納から家政万端悉く令翁に委ねてある、令夫人は中々の能筆家と承るが此の好夫婦は子福長者であり、慶應大學と、高校と、城東中學へ三人、高等女學へ一人と云ふ具合に理想的の教育を受けつゝある風景は他處眼にも羨ましい「積善の家に餘慶あり」氏の家庭が即ちそれだ。

浪越康夫氏

帶屋町の浪越病院は此の頃次第に名高くなつてをる、院長の浪越康夫氏は香美郡川村の出身で明治三十四年生れと聞くからにまだ若い、大正七年三月城東中學校を卒業して岡山第六高等學校に學び同十年卒業、直に九州帝國大學に入り十四年醫學士の資格を獲得して同大學整形外科教室の助手を拜命で累進して醫局長となつた。

氏は中學校時代から柔道が好きで高等學校時代には柔道部の雄將をもつて鳴り、大學校に入つて後にも柔道部の主將格として万丈の氣を吐いたものだ、蓋し柔道の修養あつて整形外科のコツを自得する關係を見通がしてはならぬ。

氏は昭和四年末「少年期後變症」及び他十二篇の論文を提出して美事醫學博士の稱號を授けられ、翌年福岡縣三井病院の外科院長に聘せられ、昭和六年現在の帶屋町に獨立開業したのである。

氏は博士になつて後にも好きな柔道には益々精進する一方で、昭和八年には講道館師範嘉納治五郎氏より五段に列せられ、次いで同八月日本武徳殿會長鈴木莊六氏より武道階級例の規定により柔道五段を允許せられた。

趣味は投網、謡曲、能樂、書畫、金魚、熱帶魚、小禽、活動寫眞等々に亘り多々益々辯ずる方が就中謡曲能樂は有傳者として縣下のオーソリチーである。現に醫業で目の廻る程忙がしいにかゝは

らず、高知熱帯魚飼育會々長、高知愛網會々長を忠實に勤めてをるところを見るも、天職と趣味とに對する精力の如何に旺盛なるかを知るに足るのである、社交界で博士浪越と呼び聲が高いのは由來するところがあると首肯される。

小松龜吉郎氏

二十代の小松網店といへば網を手にしない者でも知つてをる程高名である、小松網店の歴史はなかくふるく随つて縣下の河川漁業者間には店の名が鳴り響ひてをる、小松龜吉郎氏は大正十年三月市立商業學校を卒業するや、早速先代の業を繼承して歴史に輝く老舗の若主人公となつた、明治三十六年六月生れの青年である。

氏は體格が強健なところから、一年志願兵として四十四聯隊に入り、大正十三年十一月歩兵軍曹に進み十四年四月曹長に昇格し、昭和二年三月陸軍歩兵少尉に任じ正八位に叙せられ、昭和三年十一月大禮記念章を授與され、越へて四年四月大禮記念として帝國在郷軍人會の計劃にかゝる軍人會館に對し金品寄附の廉により謝狀を受けたが、昭和五年七月帝國在郷軍人會本部より高知市北街分會副長を囑託された。

昭和七年十二月、講道館に入門し、師範嘉納治五郎氏より初段に列せられた、八年三月には陸軍歩兵中尉に進み從七位に叙せられ、同十年六月帝國在郷軍人會北街分會顧問に推舉され、十一年一月縣より高知市選舉肅正實行委員を囑託、現在高知出品協會副會長、町總代、衛生、納稅組合長の職にある。

趣味は釣、謡曲、投網などであるが、投網に至つては商賣柄縣下名人の筆頭だ、家庭には富美子夫人との間に一女がある、夫人は高坂高女の出身で茶の湯、活け花に頗る堪能だとの評判が高い。

水野於兔彦氏

明治三十年九月六日をもつて高知市掛川町に生れた、大正五年二月海南中學校を卒業後、笈を負ふて愛知縣立醫學專門學校に入り、大正十年業成りて目出たく同校を終へ、同十二年高知病院内科に勤務し居ること三年、その間荐りに經驗を積み確信が出来たから大正十五年四月先代亮齋翁の後を繼ぎ獨立開業のかたはら第三小學校の囑託醫となり忠實に天職を勵んでをる。

氏は有名な光頭組の旗頭でドクトル、ハゲーマンのユーモアを發揮し御醫者仲間の愛嬌漢をもつて知られてをる、容貌から動作が如何にも飄逸で、何處までも如才のない洒々磊々たる人物だか

ら何人にも好かれる、一たび氏に接する者は自らにして頤を解き快感を満喫せずにはおかないだらふ、蓋し高知の刀圭界中最も愛嬌のあり人氣のある好々人である。

松井松吉氏

實業界に活躍し、政治界に游泳す、風貌雄偉、態度堂々、金もあり力もあるので高知市の一名士として知られてを、曾ては市會にも出で政友會支部の幹部にも居り大に政治的に脂の乗つたこともあつたが近時何に感じてか漸次政界より遠ざからんとする傾向が見ゆる、氏は高知市北奉公人町に生れ縣立第二中學校卒業後長崎醫科大學藥學專門部を優秀の成績で終へ藥學士の稱號を得をや實力才幹の鋭脱するところ直ちに岐阜縣立病醫藥局長に聘せられ數年後同様衛生試驗場の技師に昇進した、時偶々歐洲大戰前後の所謂好況時代に遭遇し志ある者は滔々官界を去つて實業界に入る風潮の時代の際會したから氏も其の波に乗り神戸鈴木商店播磨造船所に入り、爲すあらんとしたるも忽ちにして好景氣の反動來となつたから機を見るに敏なる氏は茲に船舶事業を斷念し再び本來の素志に復歸すべく大正十一年高知に歸り本丁筋三丁目に高知藥局を開設したのである、氏が政界に關係を有するは此の時からの事であつたが併し氏の本心を叩けば一種の餘興として政黨界に片脚を踏み入

れて見た程度のものではなかつたらふか、勿論これは筆者の想像ではあるが爾來左程政治に深入はせず、繁劇なる店務の傍はら高知實業藥劑師會の牛耳を執り、日本藥劑師會高知縣支部長として二期に亘り奮闘したのでも分るやうに思はれる、特に醫藥分業の問題に當面するや氏は大馬力を振ひ起し先頭に立つて能く奔走し万丈の氣を吐き其の偉大なる功績は業界一般の深く感謝するところである、明治二十三年生れで前途洋々だから氏の將來は刮目すべきであらふ。

西山極山氏

土佐は昔から非藝術國との稱がある。殊に遊藝的方面に至つては全くゼロである。尙武を第一としたが爲めに、自然この方面に擡頭する者のなかつたことは止むを得ない、近代になつて、漸くこの方面の勃興を云々するものが多くなつたが、古くからの傳統は俄にさうした人々を得るに難く、彼の文樂座に於ける土佐太夫が僅に土佐演藝人のために氣焰を吐いてゐるに過ぎない。藝術家出でよ天才出でよ、の聲は十年此の方土佐人の叫びである。

西山極山氏は實にこの叫びに應じて現はれたかの觀がある天才的な人である。尺八を志したのは既に三十歳を過ぎた頃であつて、言はば藝術的には晩年であつた。しかし、其の天才的な素質は、一

年にして既に師星田一山氏を驚かし、前途に多大の望みを囑されてゐたが、果して師を裏切らず、グン／＼と特色を發揮して、先輩兄弟子等を凌駕し、縣下尺八界の第一人者の折紙を付けられるに至つたのである。昭和十一年三月、一山師より都山流師範を許され、尙將來の伸展を期待されてゐること、誠に偉としなければならぬ。

森立樹氏

森立樹氏は拓植大學の出身で在校中より劍道の選手であり、現武徳會高知支部の四段で一方の雄である。昔の劍客でもさうであるが、其の奥儀を究むるものは、平素頗る濃厚で、あの人が劍客かと思はるゝやうな人がある。森氏もこの型に屬する人で、非常に濃厚であり着實である。高岡郡戸波村の豪家に育つただけであつて、何處かに落ち付きがあり、寛かさがあつて、セセこましくない。之れは境遇の然からしむところであつて、自然に備はる貫祿とでもいふのだらう。かつて、政友會高知縣支部の常任幹事として活躍し、犬養總裁、森恪氏等に認められ其の前途に多大の光明があつたが、癩氏逝き、犬養氏斃れてからは政黨的生活に一抹の寂しさを感じ、其の任を辭して悠々句作を樂しむかの風である。森氏は唐花と號して室積徂春氏主幹するところの俳誌ゆく春の同人で、錚々たる重鎮

である。縣下に於けるゆく春派の俳人を牛耳つて居り、良い作家として中央でも認められてゐる。ゆく春の誌上ではその句作が常に巻頭を占めてゐて、主幹徂春氏の信任も厚いのである。戸波にゐた時分には、附近の自然に親しんで、その句が多かつたが、近ごろ潮江に寓居して筆山を詠ふ句などが多く、ます／＼光りを添へてゐるやうである。句作は實に同氏の生命であると言つてもよく、今後の氏は南海の大家として愈々俳壇に重きをなして來るであらう。

松岡松喜氏

高知城中にある料亭得月花壇が、四季の眺望に富んでゐることは、汎く縣外にまで知られ、高知に遊ぶ者、必ず一度はこの花壇にのぼつて眺望を擅にする。得月花壇は海南第一樓の稱ある得月樓の支店であつて、經營者は、松岡寅八氏の二世松岡松喜氏だ。花壇今日の聲價と誇は、勿論、本店たる得月樓の影響であることも數へなければならぬのであるけれど、その主なる原因は、經營者たる松岡松喜氏が熱心、研究の結果であつて、松喜氏の意志の反映である。

松喜氏は早大出身のインテリであつて、學歴から言つても斯界に異彩を放つてゐるものである。在學中は卓球の主將として全國的に名を知られてゐるスポーツマンでもあり、卒業後も依然として

重きをなし、縣下の卓球界に貢献するところが尠くない、現在でも神宮競技には審判員として毎年上京し、日本卓球界の發達に努力するなど斯界にはなくてはならぬ人物である。その外柔道も初段の資格があり、スポーツ精神の理解者として尊敬されてゐるのである。

斯る一方に於いて松喜氏が家業に對し、否、縣下の料理界に對し、それが向上に研究、努力を惜しまぬことは人々の想像以上のものがある。近來、人々の料理に對する關心は非常なもので、殊に、縣外からの來客が頻繁となつて來た折柄、先づ眞先きに試験さるゝものが料理であるといふ關係上従つて其所に料亭の苦心を要するものがあつて一日も閑却出來ない状態に置かれてゐる。松喜氏等が、この状態に鑑みて、土佐料理の改善に腐心しつゝあることも亦うなづかれるのである。故に氏は、寸閑を窺ふでは縣下の視察を怠らず、短を捨て、長を取つて自己經營の花壇を改善するに汲々たるばかりでなく、縣下の斯界に進言して共存共榮の實を擧げつゝあるなど、其の人物を窺ふことが出来るのである。その素質より見て將來斯界をリードして行くであらうとの評は、決して過褒ではないと思ふ。

齋山又吉氏

高知宿屋組合長齋山又吉氏は前に市會議員に推されたこともある、新市町の惣代もやつてをれば高知遊漁組合の幹事もあてがはれてをる、趣味は魚釣りだが、宿屋を經營してをる程あり時としては人を釣るの手腕も持ち合はしてをる、氏は元々播磨屋町近森彌兵衛商店を振り出しに、上阪して鐵材機械商店等に勤め相當の勞をしたものだが、歸高後、家業の旅館業を經營することになつた當時は市内一流旅館が阪神地方から汽船で高知へ來る商人を好個の御客様として争奪戰の盛んな時節であつたが、先んずれば人を制すと云ふ孫子の兵法を心得た氏は、毎日菜園場より屋形船を利用して孕灣に漕ぎつけ本船へ横附けにして御客様を迎へ込み他の同業者をして指をくわへしめたことは當時の評判となつてゐた、之れと云ふのも同家が高知市における最古の旅館であり亦た先代が仁俠的に同業者を引き立てたる恩義の結晶によつて一目おかねばならぬ人情の自然的流露であり、其處に氏が宿屋業の先輩たる特權と莊嚴があると云ふもの、明治十五年生れだから本年五十五歳、まだ一々活動の出來る年齢である、土讃線開通後旅館の設備やサービスや調理やが論議せらるゝ時節柄宿屋業組合長たる氏の地位は一層重視されてをる、切に善處を希望してやまない。

服部久吉氏

服部久吉氏は民政黨の重鎮であつて現に市會副議長の榮職に居る唐詩選には喬々たる珍木の頂き豈に金丸の虞れなきを得んやと誰かの名詩を載せて後代への警句を遺してをるが、併し服部氏に限つては左様な心配は一切無用で、政黨に關係しながら八方無敵で反對黨からも嘗て一言の毀言を聞かされたことがなく、敵も味方も譽言ばかりである、こゝに他人の追隨を許さざる氏の獨壇場があり氏の人徳があることを何人も明朗に看取するであらふ。

氏は長岡郡岡豊村の出身で明治十五年生れ、少年時代には家貧しくして學資に事を欲いだから、向上心の燃ゆるがまゝに苦學力行して縣立第一中學校を優等の成績で卒業した、現高知市長川淵治馬氏と同クラスであつた關係上、今でも爾汝の間柄だと聞く、一中を卒業後大藏省の醸造講習を終了して、丸龜稅務監督局鑑定部を振り出しに、徳島稅務署鑑定課長に榮進し更に丸龜稅務監督局を経て、大正七年高知稅務署鑑定課長となり縣工業技師を兼任した、之が氏の官歴で相當光つてをるが大正九年に至り高知市に大高醸造株式會社の企てらるゝや氏は多年の知識経験を傾け大に斡旋につとめて功績があつた、氏は元來自ら野に下つて醸造家たらんとする考へを有して其の計畫をも藏し

てゐたので、此の會社の創立と共に辭意を洩らしたかなれども當局の懇望黙しがたく大高醸造の事業を督しつゝ大正十年十二月まで在勤し、在野の人と爲つてからは會社の専務取締役として品質の改善、販路の擴張に意を用ひ同社をして名實共に縣下第一たらしむるに至つたのである、氏は性格圓滿且つ磊落なれども細心周到加ふるに研究心の旺盛なるものがあるので醸造に關する造詣深く、縣下清酒改良の大恩人と仰がれてをる

川淵治馬氏が昭和十一年の春早々、高知市長の交渉を受けて難色があつた際、服部氏が上京して、『治馬よ、オラが市會議員をやめるのも遠くないが、オラがやつてをる間、市長をやつてくれぬか』と單刀直入、赤心を川淵氏の腹中に置いて説破したので川淵氏も知己の感に動き遂に受諾したものだと傳へらる、服部氏と川淵市長との關係此の如く、服部氏が市會副議長の職にあるから世間の一部で服部市政の名があるのも不思議でない、氏は現に大高醸造株式會社の社長、高知醬油醸造組合長に推されてをる。

濱田彦藏氏

土佐の富豪社會には種々の人物があり所謂十人十色の黄金群像を築ひてをるが、其の中で俗界から

超然高擧し、宛として鶏群の一鶴の觀あるものを濱田彦藏氏其の人であるとの斷定を下すものは管に筆者一人のみでなく、凡そ同氏を知る人々の間では皆な左様に觀察してゐるであらふと思はれる氏は市立商業學校を卒へ、四國第一と稱せられたる呉服反物卸商合名會社濱彦商店の主人公として其の名縣外にまで聞へたが、最近何か大悟徹底するものがあつたのか斷然廢業して名利を念とせず多額納稅者たる恒産をもつて恒心を養ひ、生來の趣味たる禪學、茶道、謡曲及び書畫骨董などに高朗なる精神を修養し益々自己の人格を磨きつゝあるところ全幅の敬意を表せしむるものがある、金がある者は其の心が荒野の如く品性の香んばしからぬもの寧ろ多きに苦しむ現狀だのに氏が禪機に徹して修養第一主義を靜かに實行しつゝあるところ如何にも奥床かしい、近代士佐人中の異彩陸離たる偉人として覺へず頭の下がる感がある。

武藤龜次氏

武藤の乳屋……といへば高知市内で三尺の童兒でも知つてをる事ほど左様に高名で、良い牛乳を澤山賣り出して日々大に儲かつてをるところ世人羨望の的である、讃岐の金刀比羅神社へ行くとき……一金一千圓也高知縣武藤龜次……の名が立派に刻されてをるが之は今日の成功を勝ち得た報恩謝徳

のしるしであらふ、氏は孔夫子の所謂四十にして惑はざる年から初めて牛乳を志したので夫れまでの氏はドン底の貧乏黨であつたと聞く、畢竟正直の頭に神の宿つた天恵かと存する、この牛乳屋の武藤氏は昔から板垣伯の崇拜者で隨つて舊時の自由黨にあこがれを有つ篤志家の一人に數へられてをる、だから板垣伯の信者で結成された十九日會の會長に推されたこともある、氏は安藝郡土居村の出身であり嘗ては高知商工會議所の議員にも當選した、文字通り温良恭謙の好々爺、嘉永三年二月十五日の生れだからアメリカの黒船が日本へやつて來た時に呱呱の聲を揚げた天運に育つてをるので幕末から明治、大正、昭和へかけて生きてきた歴史でもある。

徳直左衛門氏

高知の藥種商界において千葉藥學士徳直左衛門氏の名は斷然光つてをる、氏は香美郡野市町の出身だが、幼少の頃高知市に轉住し縣立第一中學校卒業後、千葉醫學專門學校藥學科を卒業して藥學士となり、歸縣後、高知縣衛生課に勤務したが、膝を五斗米に屈し刀筆の吏と朝夕相伍することは獨立自尊の觀念に強き氏の久しく耐ゆるところでないから、一年餘りで辭職し、高知市本町二丁目の北角に立派な藥局を開設し多年の蘊蓄を賣藥の上に應用し、徳藥局の名をして九鼎大呂よりも重か

らしめてをる、氏は圓滿無碍の人物として同業者間にも聲望があり藥劑師會員として醫藥分業の立場において善戰健闘を續けてをることは獨り業界のみならず世人周知の事實で、苟くも一たび善しと信すれば何處までも奮進せすんば休まざる血と熱の所有者である、だからこそ市會議員にも擧げられ、商工會議所の常議員ともなつてをる。明治二十三年生れで春秋に富んでをるから頼母しい。

吉岡勘平氏

高知市本町の出身、明治二十七年二月十七日生、市立商業學校第十回の卒業生で、市商を卒業するや否や直に土佐の實業海に鮮やかな游泳を始め輝やかしきスタートを切つた、それがため青年實業家吉岡勘平氏の名は高知市中に響き一時土佐産業株式會社の社員として活動したこともあつたが、同社の解散と共に大正五年十二月を心機一轉、職業轉換の再スタートとして現在の場所即ち高知市新京橋において額縁人形店を開業し爾來堅實なる營業方針を繼續し年々歳々隆昌に赴きつゝある、氏は公共の念に富む高知市の名物漢であるから前には高知商業會議所議員に當選した閱歴がある、資性剛直にして磊落、人に接して胸襟を披いて能く語り能く談することが所謂名物男の名物男たる所以であり知人間から尙ほ大に將來を期待されてをる、趣味は謡曲で堂に入つたものだ。

明石喜久治氏

高知市會議員、高知商工會議所議員、明石バス株式會社々長、高南自動車株式會社々長、浦戸灣汽船株式會社專務取締役、三和自動車株式會社取締役、宇佐運輸株式會社監査役等々の相當賑やかな肩書によつて氏の事業界における力量手腕の程が判るであらふ、氏は長岡郡三和村の出身で岡上麟藏氏の令弟である、高等小學校卒業後一時藥劑師たらんとして某藥種商店に勤めたがなれど偶々香美郡美良布村から當市中新町に出で履物業を盛んにやつてゐた明石兼吉氏に望まれ二十一歳にして同家の婿養子となり生糸商を經營したが後履物用品土佐表の縣外における需用に着眼し之れが移出の計畫を樹て吾南地方の製造業者に資金を融通して其の製品を一手に收め巨利を博したことがある、爾來三十有余年を経て着々地盤を築いたのであるが其の間洋酒の賣行旺盛なるを見てキリンビールの代理店をやつたこともある、資性機敏で商才に長けてをる。

大脇幾司氏

歐洲大戰後の好景氣時代に土佐銀行の頭取として縣の財界に重きを爲したことは今尙ほ人の記憶す

るところであらふ、氏は高知市浦戸町の出身で川口虎衛氏の實弟である、後ち富豪大脇家の養子となり大脇順路氏がアメリカ在學中は養家の財政を一手に切り廻し爾來實業界に躍進して幾多諸會社の重役となり手腕を揮ふたものだ、氏の骨肉が野村茂久馬氏に嫁した因縁に恵まれ一時野村王國の内務大臣格で勢力を張つた華やかな時代もある、大脇家は元來基督教の篤信者であるところから比も斷然クリスチャンとなり堅忍能く自己を守り一面亦た縦横に才氣を揮ふて高知の實業界に馳驅した過去の波瀾曲折は寧ろ小説以上の小説、繪卷以上の繪卷であらう、菊池寛ならずとも田中貢太郎君あたりに筆を執らしめたならば氏の苦心や、氏の才能や、氏の着想やは絢爛たる華となつて錦上更に花を添ふるの趣が浮び出で世間の喝采を博するであらふ、現に土佐倉庫株式會社常務取締役、株式會社野村組常任監査役、浦戸灣汽船株式會社取締役、株式會社三業組取締役、野村自動車株式會社監査役、株式會社丸三自動車取締役、宇佐自動車株式會社監査役を勤め頗る多忙の身柄であるが弓が得意で弓道練士の稱號を得てをる。

下川雀得氏 下川廣海氏

(73)

海外貿易のゴールド、ラツシユ、各家庭の廢物を利用して輸出品の花形たる美術工藝品を製造する高知縣の一手引受どころか名にし負ふ下川商事株式會社である、社長の下川雀得氏は明治十八年高知市に生れ共立學校に學んだが性來實業が好きであつたから長するに及び種々の事業に關係し失敗は成功の母なりの金言を體驗した後ち市内東片町に於て羊齒籠の製造を爲し神戸商館を通じて海外に取引を開始したが偶々歐洲大戰に出喰はし自然閉鎖の已むなきに至つたがなれど、剛毅剛腹の氏は之れしきの挫折に届せず益々勇猛心を振ひ起し圓座花莖製造販賣を開始し神戸市に支店を設置して活躍中、今を距る十二年以前より密かに研究を重ねてゐたところの廢物各家庭のボロを利用して眼を驚かすばかり美しくしき刺繡緞通の製造に成功し神戸の大貿易商館と提携し縣下に十數ヶ所の工場を設け千數百人の女工を使用し盛んに其の製造をやつてをるので農山漁村の婦人に絶好の仕事と與へものとして大に歓迎せられてをるが、氏は百尺竿頭一步を進め神戸に工場を設け機械工業による大量生産に従事し刺繡緞通にても一年間の取引額優に三十餘萬圓に上り世間美望の焦点と爲つてゐる、氏は此の如き一代成功者であるが令息下川廣海氏は嚴父の血を受け之れ亦た天性實業に興味を有し其の明敏なる頭腦と活達なる才智を働かして嚴父の事業を補佐し青年實業家たる素地を築ひてをる。此の父子の事業は從來個人經營であつたが昭和八年末において株式會社に變更し盛々發展を

續け、躍進又た躍進の波に乗り本縣産業界に一大異彩を放ちつゝある。
 尙ほ下川廣海氏は明治三十九年八月十五日の生れで明治大學を卒業し一時中外商業新報の經濟記者を勤めた閱歷の持主であるが現在は下川商事株式會社の専務取締役として青年實業家の本領をグン／＼發揮してをる、將來は屹度有爲の大實業家となるであらふ。尙ほ下川工場の製品は昭和十年、澄宮殿下が本縣に成らせられた節、特に縣から御台覽に供し長くも御嘉賞を賜はつた光榮を有してをる。

丁野治喜氏

賣り家と唐様で書く三代目—三代目と云ふものは存外六かしいものである、市立高知商業學校の校長は丁野治喜氏が其の三代目である、一代目の校長は銅像になつてをる程だから偉かつたに相違ない、二代目の校長は溫順守成の人柄で何れかと言へば可もなく不可もなかつたらしい、三代目の丁野校長は一代目に似ず二代目に似てをる、大體教育家の型は極つてをる、善く言へば君子、悪く言へば小心翼々の事勿れ主義だ、丁野氏は固より君子であるけれども善柔猫の如き君子にあらず覇氣のある君子である、だから三代目としては甚だ頼母しい、氏は最初横山又吉校長の部下で市商の囑

託となり、次で教諭、教頭を経て、昭和七年に校長となつた其の過程を一瞥し來つて、家光よりも寧ろ秀忠に似た人物たることを想はしむるに充分である、秀忠は謹嚴にして溫良なる好將軍であつた、父の家康から「愾ても律義第一の將軍よ、われ梯子をかけても能く及ぶところにあらず」と感嘆せしめたる品行方正の君子肌であつた、丁野氏の性格は家光に似ずして秀忠に似てゐるやうに思ふ。此の謹嚴にして溫良なる校長は、見かけによらず運動競技が大好きと來てゐる、試みに校長室をのぞくと、優勝旗や、カップや、あらゆる賞品を山と積みあげてをる。この校長の下から世界的選手の出たのは偶然でない、そして市商の名は忽ちにして全國的となり、世界的となつた、知らず、丁野氏の鼻の高さ幾尺ぞ！氏の趣味は鰻釣りと俳句である、明治十四年生だから今年五十六歳、郷里は香美郡の岩村で父祖以來の資産家である關係上、何處かにゆつたりした餘裕が見へる。

岩本仙吾氏

吾川郡西分村の出身で明治四年の生れである、人と爲り濃厚篤實、思慮周密にして事理に詳しく、若冠にして村長に選ばれ明治二十九年普通文官試験に登第するや直に郡書記に任ぜられ次いで縣屬となり恪勤精勵事務大に擧がり人皆な其の材幹に服した、爾來累進、明治四十二年六月拔擢せられ

て縣商工會議所特別議員に選ばれ、尙ほ縣立物産陳列副長及び郡長等の要職に就き縣下商工業の指導獎勵に妙腕を發揮し專念事業の開發に盡瘁して倦むことを知らず、就中宗像知事が本縣永遠の福利増進を目的とし一大英斷を以て縣營水力電氣事業の創設に着手するや當時氏は少壯屬官の白眉として中堅人物となり常に樞機に參劃し全魂を傾倒して知事を補翼し該事業の促進上寄與するところが大きかつた、大正六年官を退き野に下るや紙業界の興望を負ふて土佐紙業組合頭取に當選し、爾來重任して今日に至つてを、氏の就任當時は恰も歐洲大戰時代で財界はために波瀾重疊を極め所謂戦前の不況、時の好況、戦後の反動期の三過程を通過せる非常時であつたけれども、氏の卓越せる識見と周密なる思慮は此の間に處して克く對策をあやまらず、信望益々加はり二十年間一意紙業の改良進歩を念とし、東奔西走或は當業者の指導誘掖に粉骨砕心し、或は製品の検査を嚴正にして粗製濫造の弊を一掃し、或は製紙試驗場員を督勵して蠶植台紙、漉入障子紙等時勢に魁ける幾多有益の發明を爲して特許を得、或は機械器具の改善をはじめとして紙質の改良、或は主要原料の増殖獎勵を行ふ等實に勉めたりと謂ふべきである、そして昭和元年には老軀をかへりみず自からアメリカに航して輸出紙の販路擴張を企劃し、之がため逐年海外輸出の激増を見るに至つた、此等の功勞に對し土佐紙業組合は氏を表彰したのであつたが、昭和四年十一月日本産業協會總裁宮殿下より

寔に他の龜鑑とするに足るとの御言葉を賜つた組合の名譽の大半は無論頭取たる氏の功に歸すべきものである。氏は此の間に市會議員にも舉げられ、縣會議員にも舉げられ自治行政のため貢獻するところもあり、又大正十三年七月縣工業會の設けらるゝや副會長に推され創立以來繼續してを要するに氏が過去四十年間公生涯の大部分は光輝ある産業報國の權化である、そして紙業の生字引である、氏の如きは紙業組合の寶として組合の頭取で藹をつくらすべきであらふと思ふ。

依岡莞爾氏

野村組最高幹部の一人たる依岡莞爾氏は高知市新町の出身で明治十四年三月二十六日生だから本年五十六歳といふ人生の滿潮期に達してをり 言はゞ野村組の元老格である、堺町の野村本社へ行くと此の依岡氏が第二世好之氏と室を同じふし一見したところ好之氏の補佐役たる觀があるが蓋しムツソリーニの指金で六尺の孤を托するに足る人物だとの折紙を附けた結果だと推察したは僻目か、昔は徳川家康が二代將軍秀忠を自己の世嗣と爲すや、松平信綱、阿部忠秋、酒井忠世、土井利勝、青山忠俊等々一代の名臣をして其の近侍たらしめたが其の中で家康の最も信任したのは土井利勝であつた、野村王國の重臣中には勿論信綱や、忠秋や、忠世や、忠俊等の如き誠忠の人物は多からふが

第二世好之氏を輔導してムツソリーニ百年の後に備へる心の用意ある者は誰ぞやとの問題を掲げた時筆者は躊躇なく依岡莞爾なりとの答案紙を提出するのである、由來野村王國には親族関係が多い、依岡氏は野村氏とは親族関係はないが所謂野村の子飼ひであつて農人町の倉庫を預り眞ツ正直をもつて聞へた人だ、だから親族関係はなくとも親族以上に繋がりがあり御大の信任が厚い、氏は野村王城を護るに保守的の立場にあり性格も亦たそれであり随つて外交的手腕を望むのは無理であるし亦た何等その必要はないのである、株式會社野村組取締役、野村自動車株式會社監査役、土佐商船、大阪商船專屬野村組運送部主任を兼務して堅實なる主義を把持してをるところ頼母しくある。

山崎秀吉氏

高知市衛生課長山崎秀吉氏は明治十五年九月五日を以て高岡郡佐川町に生れてをる氏は高知市長川淵洽馬氏と同じやうに警察官がその振り出しであり川淵氏の生れ故郷窪川の署長時代に内務省の警察講習所に入り一般衛生學や、傳染病學や、細菌學やを研究して大に得るところがあつた、此の素質があるから衛生課長として中々味をやるのである試みに氏の功績を數へて見るに昭和三年頃だと思ふが「ツナ鍬」を發明して作業上非常の便を知與へたこと、患者を運搬する四輪車を案出したこと

無料健康所をこしらへたこと、城西病院を改築したこと、日本的有名な塵埃燒棄場を設けたこと、塵埃運搬貨車にバネを仕附けて急勾配の道路を行く時に勞力を軽減せしむるやう意を用いたこと、四月から實施した市營火葬場の斷行、結核療養所の計畫等々が其の主なるもので此の他種々の考案、幾多の功績があるけれどそれは略することにする此等の中で今後の喫緊問題として残されてをるのが結核療養所である、高知市は全國でも結核患者の多い都市に指を折られてをり年々激増の傾向にあるから、傳染病學や細菌學に造詣の深い氏は人一倍そこに關心がある譯で昨冬の市會で結核療養所問題をひつさげて大に奮闘した其のけなげな武者振りは今尙ほ市民の記憶せるところであらふ氏が窪川の署長だつたと云ふことが既に何んだか川淵市長とのつながりを象徴するかの如くにも解せられるが、縁は何處までデリケートで川淵氏が往年福岡縣知事をやめて歐米の漫遊から歸朝し、内務省の警察講習所長を勤めた時、氏が講習生となつて相識の間柄となり爾來知遇を受けて今日に至つた其の淺からぬ因縁と云ひ、感激性の強い氏に取つては不可思議、不可稱の奇しき思ひに満たされてゐることであらふ。

中川恒之氏

金持にも二種ある、就中金持の家に生れた所謂二世を見渡すに碌々たる者は多く金庫の番人として一生を終るが、珍らしく豪快なる者に至つては圖抜けて偉ひところがある、中川恒之氏の如き其の後に属する者で筆者が敬意を拂ふ金持の二世である、氏は明治三十四年三月二十二日高知市通町に生れ縣立第一中學校を経て慶應大學を卒業した、氏の歸縣するや政界の具眼者中には早くも將來の代議士を以て望みを囑する者があつたが、それと云ふのも氏に政治家的素質が具有してをるのを認めたからであらふ、富豪の子弟にして金の儲からない新聞社に關係する者は減多に無いが氏は新聞の經營が好きであつたものと見へ、土陽新聞社の取締役となつた、政治家として將來雄飛せんとするの士が新聞社に入つた其の勇斷は甚だ痛快であつた、筆者は此の勇氣を見て其の志の小さなことを付度した一人であり高知の富豪社會に此の如き新人の出現したことに無上の興味をそゝつたことであつた、何んとなれば筆者の人物眼には氏が實業家として立つよりも政治家として驥足を伸ばす方が遙かに偉大を成すと考へたからである、だが政治界に進出すると金は減す一方である、之は先輩の實歴が物語つてをる、故に氏の周圍は氏が政治家となることを恰かも牝鶏が家鴨の子の川に入るを懸念する心理に支配されたであらふことを想像するに難くない點もあるが、氏は土陽新聞の重役たる傍ら高知鐵道株式會社の常務取締役となり豪快な味を見せてをり、又た土佐商船及

び三浦商工の重役にも擧げられてをる、要するに氏が將來政治家となるか實業家となるかは未知數のところ面白味がある、大に飛ばんと欲せば大にやしなふ必要があるから此處では「疑問の人」として置かふ。

森田正治氏

日活館の經營者森田正治氏は東亞同文書院の卒業生である、同文書院の卒業生は大抵支那や滿洲あたりで役人をしたり、會社員となつたり、新聞記者生活をしてみたりするものなのに、氏が凡そ興行物とは縁の遠い同文書院の出身であると云ふところに寧ろより多くの興味かそゝらるゝ譯だが併し氏の前身が銀行人だと云へばフムさうかとうなづかるゝだらふ、氏は一時高知商業銀行の營業部長をやつたことがある、けれども賢明なる氏は商銀の前途を透視して早くも其の椅子を捨てたのであつた、そして此の銀行の營業部長だつた人が新開地の映畫館を經營すると云ふ時には世人は其の轉換の餘りに突飛なるに驚きもした、況んや親族や親友などは全く無謀だと言つて反對をした、けれども氏には何等かの成算あるものゝ如く人々の反對を押し切つて敢然と興行界に猛進したそして日活館の經營に取りかゝつたのであつた、氏の興行政策は世界館の岩戸氏に比すると著しく消極的

であるが、その消極的な地味な政策が日活館に永續性を持たせる、森田氏は高等教育を受けたインテリだから興行は水ものなりと云ふやうな有り来りの放漫な遣り口は斷じて承知しないし亦た其の性格が許さない、其處に森田氏の見識がある、だから他から見ればあんな映畫がといふものであつても森田氏にはチャーインと成算が立つてをる、そして日活館が兎もすれば時代劇に重きを置かうとするのは大河内や千恵藏のやうな人氣のある映畫の武器といふ外に、巧みに世界館の欠陥を狙つてあることに眼を留ねばならぬ、此の對立してゐる兩館は何れも一方の欠陥を狙ふところに對立の意義があると云ふものだ、地味な森田氏は必ずしも時代の尖端ばかりを行かふとせず、相當の用心をしつゝ態と消極政策を執つてをると見るべきであらふ、要するに森田氏は安全第一主義であり、其處に氏の成功がある所以であらふ。

馬場敬春氏

官僚か、政黨か、官吏社會に人材が多いか、黨人界に人材が多いか公平に觀察して前者に人材が多いのではないかと思う、高知市助役馬場敬春氏はその前身が官僚である馬場氏のみならず前助役の杉本鶴吉氏にせよその前の川島正伴氏にせよ何れも役人上りであつて官僚畑の出である、と云ふの

は助役には事務を執る知識と手腕を必要とせらるゝから、所謂刀筆の吏を修業した者を以て市の事務を執らすことが最も安全であり亦た最も便利を感じる譯だから自然に官僚畑をつた人物を助役に据へることになるのである、馬場氏の官界生活は相當にふるい、氏は中學校を卒業するや直に高知縣廳に入つた、そして仕事に忠實、職務に勉勵をモットーとして漸次廳内の利け者となり、土木課の主任時代には餘程羽振の好きを示したものだ、氏はクリスチャンで酒も煙草ものまないが、それでもつて官界の游泳術が非常にうまい、幡多支廳長に榮進したのは固より氏の實力の致すところであるけれども游泳術のうまいことも一つの助けとなつてをる、幡多郡は由來難治郡の筆頭である、農山漁村、商工都市のやゝこしい仕事は山積して古から郡司を苦め抜く地方である、だが氏は支廳長として立派に仕事を捌き名郡司の評判を取つた、土木課時代にも何等非難を耳にせず、其の後地方理事官、社會課長として毫も悪聲を聞かなかつた人だから市の助役と爲つても市役所の内外から受けがよろしいのが當然だ、野村茂久馬氏が馬場氏を評して村上時代には殺して使つたから平凡に見へたけれど、生かして使へば中々やるよと褒めたことがある、野人川淵市長の下に殿上人のやうな氏が在ることは配台において頗る妙を得てをると思う、頭腦の明敏なるに加へて人格も立派だし、事務的才幹も備つてをるから蓋し好個の市助役として何人も許すであらふ、明治二十三年二月

五日生だから、まだく前途春海の如くである。

野村清太郎氏

高知の少壯實業界において骨があり血があり涙のある人物である、その骨たるや俠骨であり、其の血たるや俠血であり、その涙たるや俠涙である、それと云ふのも父祖の血が氏の大動脈に滾々として日夜流れてをる爲で即ち父祖に俠客の親分野村牛造氏を有ち、嚴父に俠骨稜々の野村克太郎氏を有つてをる其の血統が氏をして今日の人格を構成せしめた譯であらふ、氏は幼にして父を失ひ賢母の手に人と爲つたのであるが、年少にして家督を相続するや克く産を收めて自から持すること頗る儉素、傍人をして其の操守の堅きを嘆稱せしめたのであつた、漸く長するに及んで天性の敏捷を發揮しソロソロ事業に關係するやうになり、傍ら劍道に精進して大に心骨を鍛錬し、仁丹製品高知縣賣捌所主、高知信用組合理事、野村組新聞部會計、劍道練士四段、高知劍道有段者會幹事、高知市消防組高知街消防部長小頭等々の事業や趣味に活動の人生を送りつゝある、氏は金持であるけれども毫も金を鼻に掛けず何處までも温謙にして着實、そして時に持つて生れた仁俠の氣前を出して弱者を救助せる美德は枚擧に遑がないが、隱徳家たる氏は左様なことを世間に知らすことが嫌ひだから

聖人の孔子に評せしめたなら、人知らずして而して懼らざる亦た君子ならずやと、氏を君子あつかいにしたであらふが、隱徳あるものには陽報ありと云ふから屹度天からあらはに酬らるゝ時機が到來することを疑はない。氏は曾て高知新聞社に關係してゐた閱歴もあり、カメラの外、新聞の經營と云ふやうなことが一つの趣味かも知れぬ、大朝の販賣部に入つたのも即ちその趣味からではなからふかとも想像せらるゝ、昔の仙台侯が男が好うて金持ちであつたやうに、氏も男が好うて金持ちである、此の二拍子へ更に『才人野村清太郎氏が』加はるから正に三拍子だ、筆者は青春の霸氣と功名心とに富む氏が、野村組を背景として一個の日刊新聞に指を染むるの日あらんことを待望する一人である。

黒岩常幹氏

黒岩眼科醫といへば久しく縣民の耳に聞きなれてをる、それは一つは嚴父が縣下の名醫であつたからでもあらふが、其の名醫の後繼者たる黒岩常幹氏が眼科においては名醫の評判がある爲で名醫の後に名醫ありと云ふ則らかな標語を人々の頭に刻み込んでをると筆者は考へるのである、出身は高岡郡戸波村で明治十六年八月十五日生れとあるからには本年取つて五十四歳の腕盛りである、大學

出身の醫學士、眼科に就ての造詣が深い、人となり頗る鷹揚で人間味たつぷりである、小さい事にこそつがない寛厚の長者たる風があり久しく接するに随ふて汲めども盡きざる眞情がにじみ出る、がそれかと言つて清濁併せ呑む人柄でなく不義を惡むこと蛇蝎の如く徹頭徹尾正を踏んで懼れざる流儀の人物である、だから寛厚なるに似て實は甚だ嚴肅なる性格の持主として通つてをる、善良なる者に對しては寛厚の胸襟を披き、邪惡なる者に對しては秋霜烈日の威を示すこれが氏の本領であると思はれる、随つて初めて氏に會う時には肺肝を見透さるゝやうな心地がする、故ら警戒するのではないが容易に心を打ち碎らないからなれることが出来ない、併しその代り苟くも信する人に向つては帶を解き切るのである若し、氏をして政治家たらしめば群雄を駕御することにおいて屹度巧みであらふし、實業家とすれば乾坤一擲の仕事をしてピクごもしない度胸を見せるであらふ、氏の性格より判斷するに患者の眼をいじくつてばかりで居つて夫れで果して満足が出来るだらふか、中々霸氣に富んだ人物だと見たは僻眼か。

武藤三男也氏

高知商工會議所會頭の野村茂久馬氏が昭和十一年二月、感ずるところあつて早起會なるものを提唱

するや率先して之に賛成し、毎朝四時半に起きて五時にキッチンと會議所へ行き野村氏等と共に種々有益なる意見や談話を交換することを無上の楽しみとする云ふ唯だ其の一事のみで氏が如何に勤勉の人であり奮闘の人であり進取潤達の氣象に富める人であるかを推知するに餘りがあらふ、氏は明治十三年六月十五日生れで本年五十七歳だ、此の年齢を迎へると大概の人が保守退嬰に傾くものであるのに、氏はそれとは反對に何時までも青年の心を失はず自から鍛鍊し自ら修養するところ中々に見上げたものだ、氏は往年市民から推されて市會議員となり自治のため貢献するところ鮮少でなかつたが現在は高知商工會議所の議員として實業界のために盡してをる、氏は元來高知市の産、少年時代より洋服商を以て身を立てんと志し種崎町田中洋服店に入つて其の業を習得し、更に阪神地方の大洋服店に入りて大に研究を積み牢固たる自信を得て然る後高知市に歸り獨立開業したのである、氏は資性温厚篤實且つ至誠の人である、高知の實業界には光つた人格者である、昭和八年末に店の組織を合資會社に變更し益々同業者間に信用を博するに至つたが現に高知洋服商組合長、高知洋服商組合理事長として斯界に幅を利かせてをる、蓋し立志傳中の人物か。

西山閣二氏

高知市の種崎町には白井と云ひ西山と云ふ二大富豪がある、そして此の二大富豪の若主人公が縣政界二名士の令嬢を妻としてをるところ一種面白い風景でもある、乃ち白井鹿太郎氏が藤崎朋之氏の令嬢と琴瑟相和する其の一方において西山閣二氏は中澤楠彌太氏の令嬢と同心一體の家庭を造つてゐるところ、世の政治家に對して或る示唆を與へてをるやうにも受け取られる、西山氏の先代は覺次氏で覺次氏の先代が安藝郡安田から高知に出て商賣を始め父子二代巨万の財を積んだもので泉覺の名は一市七郡の商界に高鳴つたものだ、閣二氏は先代覺次氏の長男として生れ嚴格なる薰陶を受けて成長し大阪成器商業學校を卒業してをるが、性温厚にして幼より書が得意で特に洋畫に興味を有ち氏の天才は次第に此の方面に昂揚することになり帝都の各美術展覽會へ出品して時々入賞の名譽を得てをる、多額納稅者であるから貴族院議員の候補者に擬せられたこともあるが明治二十二年生れで未だ五十に足りないから何も急ぐ必要はない、六十台で貴族院議員になつて結構々々高知商工會議所常議員、土佐商工聯合會常議員、高知瓦斯株式會社取締役など云ふ肩書もあり、實業家と美術家と政治家を兼ねた三才の持主である。

小川澄夫氏

温厚篤實にして缺點のない人物として知られてをる、昭和十一年一月高知市長問題が持ち上つた時、政友會の長老水野吉太郎氏は小川氏あたりがよいと思つたことであつた、小學校の教師から段々と立身出世して市長候補に擬せらるゝやうになつた其の朗らかな風景を見て誰か其の異常の進歩に敬意を表せぬものがあらふか、氏は吾川郡弘岡中ノ村の出身で師範の速成科に學び村夫子になり若い好い先生だとの令名を博したが數年後望まれて高知市本丁筋の名家たる小川澄門氏の婿養子に迎へられ家業を繼ぎて次第に隆昌を加へ漸次社交界に重きを爲すに至つたのである、既に教育家の出身であるから思想も言行も温健着實であり必ず軌道に乗る歩み方をするので安心百パーセントと稱せられ、大正七年高知教育品株式會社を起して學用品需給の圓滑を圖り亦た内國貯金銀行の預金事務を管掌して市の實業界に根強き勢力を扶植し衆望の歸するところ推されて市會議員となり副議長を勤め又た永年高知商工會議所の副會頭として入交太藏氏と雁行し行くところとして可ならざるなき力量を發揮し斯くて市政並びに實業界に貢獻するところ多く、政友會が市會に多數を制する曉には議長となること間違ひなく同時に近き將來の商工會議所會頭たることも保險附きである、此の如き人物であるから高知信用組合の理事長から組合長に推され市の經濟界に對しても刮目に値ひする働きをしてゐる尙ほ氏は土佐商工聯合會々頭、土佐商船株式會社監査役、高知縣藥種

賣處同業組合長、高知武揚協會常設委員等の重用なる仕事にたづさはつてをる、明治十一年生れだから當年取つて五十九歳である。

松原政之助氏

松原政之助氏は市立商業の出身で本年取つて三十八歳の腕盛りである。天性伶俐であり人間味豊かであり知情意の圓滿に發達した申分無き人物である、令室は土佐女學校出身の才媛で教養もあり中々の女丈夫である、斯く才子と佳人が揃ふて夫唱婦隨のカフェー松原を經營し、相倚り相助くる頭と智慧の働きから滾々として湧く熱と力と誠意の經營だから苟くもソツのあらふ筈がない、顧客に對する其の親切、女給や仲居を心服させる其の温情は實際他では見られない朗らかな松原風景である、松原に居る女給や仲居は不思議に品が良いと言はれるのは主人公や令室の眼識と感化の然らしむるところで勇將の下に弱卒の無いのと同じやうに、此の揃ひも揃つた好夫婦に使はるゝ女給と仲居は確かに一流どころの器量たつぷりである、最近土讚線の開通と共に縣外客までがカフェー松原の名を聞き傳へ盛んにやつて來るので今や四國一のカフェーたる名を取るに至つたのである、高知市新京橋の盛り場に王坐するカフェー松原が千客萬來の盛況を見るにつけ當主松原政之助氏の人物

が斯界に傑出してをることを想はするに餘りがある、三十八の男盛りだから前途は春海の如くである、松原が何處まで發展するか、伸びる力は蓋し無限であらふ。

藤田喜郎氏

香美郡山北村の出身、故藤田喜全氏の嫡子である、喜全氏は山田町の松尾富功録、在所村の前田憲秀氏と共に香美郡の三君子と稱せられたる名流で東郡の徳望家であり政治と經濟と兩方面に重きを爲したことは人の知るところである、瓜の蔓に茄子のならぬのは事實で此の人にして此の子ありで喜郎氏は縣立第一中學校卒業後直に帝都に遊び故代議士坂本志魯雄氏の令兄坂本素魯哉氏との縁故で臺灣彰化銀行に勤めたが後ち家庭の事情で土佐に歸り高陽銀行に入り赤岡支店長と爲つた、赤岡は香美郡南部の都會地で藤田氏父子の地盤に屬せるから此處では羽翼が伸べられる次第である、果然氏の卓越せる手腕は地の利と人の和を得て思ふ存分に香南の經濟界に雄飛したか、高陽銀行が四國銀行と合併するや氏は本店詰となつたが偶々土佐園藝株式會社株主の推すところとなり銀行界を去て同社の常務取締役と爲り同社内容の充實に最善を盡し大に人氣を博したことであつた、氏は嚴父の血を享けて君子型の人物であり仲買人などに對しても亦た取引先に對しても萬事温情主義で行

くので一部の株主間からは餘りに圓満に過ぎるとの非難があつたが、それは算盤一天張りの放つ矢であつて人間藤田の眞價は却つて夫れが爲に識者から認識せられたことであつた、氏は明敏なる頭腦と熟練せる手腕の持主であるから昭和十年の幕惜しまれて園藝會社を隠退し更に實業界に活躍してをるが氏が園藝會社に咲かした花は之れから弗々と果實を結ぶことになるであらふ、明治二十八年生れで在郷陸軍歩兵少尉の肩書があり春秋に富んでをる。

畠中義雄氏

宇田友四郎翁と其の郷黨を同じふする好因縁に恵まれ紀貫之の土佐日記で名高い香美郡岸本村がその郷里である、昔からの名門で「岸本の畠中」と云へば中々矢筈しく江藤新平が縛に就き監車高知に向ふの途次岸本の畠中邸で一泊したことなど明治初年には喧傳されにものだ、氏は縣立第一中學校を卒業後岸本町民の信望厚きため町長に推され久しく自治のため貢献したが後ち土佐曹達株式會社支配人となつて令名を博してゐるうち土佐電氣株式會社の支配人となり、専務の上田保氏と共に社長宇田友四郎翁を補佐し私心を捨て、同社の爲に盡くし來つたので取締役となり後ち宇田耕一氏が社長となるや益々重きを置かれ徳望社内に洽ねく昭和十一年六月の總會では専務に昇格するとの聲

が株主間に高い、流石名門に生れた程あり性温健圓満で模範的紳士の評判を取つてゐる、明治十三年二月二十一日生れ、土佐バス株式會社専務取締役、土佐セメント株式會社監査役、高知商工會議所議員などを兼ね相當繁忙の身である、近日土佐バスの社長となり情理兼到せる人間味を見せてくられてゐる。

吉村近次氏

數ある少壯實業家の中で白百合の如くに麗はしく輝ひてをる、一見したところ生れながらの實業家タイプで何人にも好感を與へる、昔ユダヤの聖人イエス、キリストは心の純眞な人格の高潔な人物を野に咲く白百合に譬へてをる、白百合には一點の汚れがなく且つ何んとも言へぬ匂ひがある、吉村氏の姿を見るに一點の塵がなく、得も言へぬ品格の香りがある、實業家として天の成せる麗質にあらすして何んぞやと言ひたくなる、氏は明治二十五年十一月三十日生れ、縣立第一中學校を経て東京高等商業學校を卒業後、三菱造船株式會社に入り、後ち久原商會社に轉じ此の間に將來實業家として立つに必要な経験を積んだから歸縣後、高知商工會議所の書記長に迎へられて實力の片鱗を示し、更に土陽新聞社の理事として程のよさを示し、現在は土佐貯蓄銀行の常務取締役の仕事

に主力をそゞぎ所謂適所に適材を得たるものとして氏の右に出づる適任者無しと云はれてを、それといふのも八面玲瓏の美質に理財的手腕を兼備してをるからこのことで確かに理想的だとの好評噴々である、氏は此の外に高知瓦斯株式会社取締役、土佐倉庫株式会社取締役にも挙げられ、多々益々辯するの餘裕真に綽々だとの實業界で稱讚の聲が満ちてをる。

竹村源十郎氏

事業の背後には必ず人物があることを知るものは、佐川の司牡丹をして一躍灘五郷の滔と匹敵せしむるやうにしたのは抑も何人の力であるかに想到して筆者は酒造界の巨人竹村源十郎氏に對して覺へず頭の下がる心地がする、佐川には明治維新以來天下的人物が輩出してをる、政治界方面に、實業界方面に學界方面に、一廉の偉人が出てをる、竹村源十郎氏は長岡郡後免町の中澤家に生れ、明治三十五年佐川町の豪商竹村家の養子となつたものだが、佐川人となるに及んで佐川の雰圍氣に同化して酒造界の第一人者を志したことを疑はない、氏は縣立第一中學校在學當時から秀才の譽れがあり、頭腦明晰にして才氣溢るゝ如くであつたと云ふから此の頭と此の智恵を縦横に働かして出来上つたものが乃ち司牡丹である、だから司牡丹は竹村氏の生命である、全魂を打ち込んだ最後の事

業である、世の中に頭と智恵と才とを働かして夫れで出来ない事業のあらふ筈がない況んや竹村氏は飛び抜けた稀代の惻巧者であるにおいて、氏が最後の事業たる司牡丹が今や四國を壓倒し、關西を風靡し進んで關八州に進出しつゝある壯觀は斷じて偶然でないことを思はずに餘りがある、竹村氏は司牡丹で屹度有終の美を濟すであらふことを朗らかに豫言する。

栗田鶴之助氏

活動常設館世界館を知る者は館主栗田鶴之助氏の名聲を必ず知つてをる筈だ、世界館が高知の映畫界に王座してをるやうに氏も亦た高知の多額納稅者界や紳士界において斷然光つてをるが天の成せる麗質が謙遜であり溫良であり純潔であることは夙に定評の存するところで虚名や虚榮に憧憬する底の人物でない、けれども餘程頭腦が冴へてをる事は完璧第一流の映畫館を經營して文化的娛樂を大衆に提供し其處に新らしい藝術の趣味を普及せしむることを以て樂しみとしてをるのヲ判る、栗田家は古くから石灰商の權威として其の名縣の内外に著聞してをり氏は嚴父の志を尊重して其の事業を繼承し益々堅實に信川第一主義を實行してをるから店運年と俱に隆昌に赴き他の追隨を許さざるものがあること之れ亦た世間周知の通りである、氏が京町の土陽新聞社跡に世界館を創め商品館

を建築して種々の施設に意を用ゐる高知市の繁榮に寄與すると同時に、藝術振興のために萬丈の氣を吐くところ如何にも豪華であり且つ明瞭でもある、氏は此の外狩獵や寫眞に興味を有し其處に一個の人生觀を開拓してをる、此等の事實を綜合大觀し來つて氏は高尚なる趣味に生き夫れに依つて自己の品性を陶冶することを心懸けてをる實業界の君子であるとの斷定を下すことが出来る、確かに紳士界の異彩である。

吉本久太郎氏

高岡郡須崎町の出身で小高坂町に住してをる、昔からの熱心なる基督教信者で高知教會の長老として信者間に重きを置かれてゐる、使徒パウロを小さくしたやうな人物で危険愈々甚しければ愈々多く勇氣を出すと云ふ熱と意志を有つてをる、日外高知市會議長として傍聽席の俗物側から彌次られたことがあつたけれども、あそこに人間久太郎としての價值百パーセントであつた、あれが若し英國とか、米國とか云ふ國々の市會議長であつたなら屹度好評百パーセントであつた筈だが、失禮ながら自治の何たるかを解せざる俗物共が唯だ或場合に議事規則に通じないと同情すべき其の弱點に投じて甚だ非人格な彌次を飛ばす其の野蠻の聲によつて氏は潔く議長を辭めたのであつた、筆者

は當時俗物から苦しめらるゝ氏の議長振りを眺めてステパノが石で打たれる光景を想像したことであつに、氏は曾て高岡郡選出の縣會議員でもあり、現在越知製材株式會社の社長、小高坂信用組合の理事として立派に其の役目を果してをる、自治体の府が理窟をならべたり、人の揚足を取つたりする場處でないことを知る者は、善良なる神の僕を磔で撲つた其の非を悔ゆるの時期は決して遠くはあるまい。

片岡武雄氏

吾川郡大崎村の片岡宇太郎氏といへば高知の宇田友四郎氏、川崎幾三郎氏、松村寛藏氏など、並び稱せられた人で一時宇田氏など、實業界を代表して縣會議員に出たこともあつた、片岡武雄氏は即ち其の賢息で明治二十二年の生れだからまだ若い、少年時代には市立商業學校に學んだけれども健康を害したため中途にして退學し嚴父宇太郎翁を輔けて父祖傳來の家業たる酒造業に精進し、大崎村附近では孝子にして勤勉家といふ令聞があつた。そして氏の眼界が次第に開けると共に吾北の天地に躡踏たることは新時代の實業家が到底満足する能はざるところであつたから大正十年斷然高知市に進出し本丁筋に宏人なる店舗を新築し氏が主として經營の任に當り少壯實業家にふさはしき

積極進取の商賣往來で大に斯業の發展を圖り大崎と高知の兩醸造場を合して造石高一千數百石を越へ縣下の酒造界に銘酒仁淀川の名聲を高からしむるに至つたのである、氏は宇太郎翁の性格を享け資性至つて高潔、名聞利慾を念頭に置かない、隨つて名譽職など云ふものを欲しないが、唯だ土佐電氣株式會社取締役、大高醸造株式會社取締役、土佐漁業株式會社監査役の三役だけ有つてをる。

岡林楠吉氏

四時盛開黒牡丹の歴史つき看板で名高い市内榊形岡林牛肉店の現主人公は岡林楠吉氏である、令兄の健三氏が亡くなるや滿洲の仕事をしたんで歸縣し、そして亡兄の事業を繼承し益々黒牡丹の名聲を昂揚せしめてをる、氏は毎朝必ず天満宮と八幡様に參拜し先づ神に祈つて其の日の仕事に取りかゝるが例である、だから氏の營業は心からの親切第一主義であり其の建前から最も衛生に重きを置き肉切り店員に御客が現金を渡さぬやう切符制度を勵行して肉の清淨に注意を拂ふてをる、だから岡林の肉と云へば萬人が安心をして買うやうになつてをる、此の岡林氏は青年時代を明治初年の參議や文部卿で時めいた福岡孝弟氏の書生格として過ごした、武術に秀で就中捕繩の名人であつたから明治十六年から同二十七年まで福岡家の護衛を勤め特別の寵愛を受けたものだ、後土石本貫太郎

氏が滿洲で活躍するに至るや氏は大正四年石本家の番頭に聘せられ頗る信任を得たが偶々令兄の計に接し石本家を辭し故山に歸つたのであつた、要するに氏は正義正直一天張りの人物で輕薄なる現代には砂中の玉の價値があり商人の模範とするに足ると思う。

長崎伊之助氏

高知市主事庶務課長として令名の特に明朗なるものがある、長岡郡介良村から毎日市役所へ通ふて文字通り恪勤精勵の人物だと言はれてゐる、明治十二年九月十九日生で本年取つて五十と八歳、相當長い間苦勞をして酸いも甘いも噛み分け切つた老巧者であり、圭角が取れて圓滿無比の人柄をその頭顱に表徴し、人生五十功無きを愧ぢとせず、六十に垂んとして野心銷すと云つた風に容貌から態度から徹底し過ぎてをる程だから、主事として洵に誂へ向きであり、庶務課長として夙に生字引の名があるところ高知市役所の國寶である、今年一月村上清氏の他界をうけて市會議員間に野村茂久馬氏を名譽市長と爲し、別に高級助役を設置すべしとの説が出るや、市役所の課長級は早くも猛烈なる自薦運動に熱中する者があるとの風來語が何處からとなく飛んで來て某々々々氏等の氏名が市民の口邊に唱へられた時にも、長崎伊之助のナノ字が出ざつたのであつた、そして二月の市會で

野村氏と川淵氏の決選投票が行はれんとし、佐竹晴記氏などの猛者連は開會前既に熱し切つて連りに怒聲を鳴らす時、偶々長崎氏の姿を見るや、急にニコ／＼を發揮して『長崎サン、お前サンの言ふことなら何んでも聴くぞよ』と非常にやさし味のある態度に打つて變つて傍聽席を驚かしたことであつた、佐竹氏に氣に入らるゝ長崎氏は確かに偉いと折紙を附ける。

松本治一氏

不動貯金銀行高知支店長として縣の財界に重きを爲してをる、前職は本店の貸付課主任から検査部主任であつた、中央の檜舞臺で鍛ふた人物だから支店長として令名のあるのに何んの不思議があらふ、氏は愛知縣の出身、明治三十二年一月十五日生れ、名古屋育英中學卒業後、大正三年不動貯金銀行名古屋支店を振り出しに東京日本橋の貸付から會計の各主任を経て本店に抜擢せられ前記の要位に据へられた中々の敏腕家である、此の垢抜けのした銀行人が高知へ來て堺町の支店に納まり支配人、支店長の實力を揮ふところ如何にもニコ／＼主義で有り難い、氏は生れつき温厚篤實で頭腦は緻密で明快、事務實に流るゝ如くであるとの評判だ、左もあらふ氏は元來素養の深き一廉の學者で嘗ては銀行經營上に關する幾多の問題に對し堂々たる論文を發表して財界の先輩を驚かしたこと

もあると云ふから寧ろ地方にくすぶらす惜しい程だ、此の如き識見の所有者であるから社長は申すに及ばす他の重役間でも氏の頭と腕とに信頼し、全國支店長中のナンバーワンたる觀がある、氏の趣味は吸江灣上の大公望で時々舟を浮かべて釣を垂るゝの圖を見かける。

泉芳輔氏

三和銀行高知支店長として令名ある泉芳輔氏は京都市の人、明治二十五年生だから本年四十四五歳の少壯實業家だ、夙に立命館大學を卒業し大正十四年の頃、三十四銀行台南支店次長を出世双六の振り出しとし、成績の顯著なるものがあつたから本店の營業部長に榮進し其處で復た磨きをかけ、銀行人としての事務振りが熟練し切ると、今度は生れ故郷の京都三條支店長を命ぜられ倍々其の地位を築き上げたのである、此の間重役から異常な信任を受けたので昭和六年高知支店長三宅喜三郎氏が高知鐵道に入るや、其の後を襲ふて來縣し能く與へられたる使命を果たし、所謂四方に使用して君命を恥かしめざる力量を示したが、昭和八年の彼の合併に伴ひ、其のまゝ三和銀行高知支店長と爲つて今日に至り、高知の金融界に重きをなしてをる、山紫水明の京都に生れた人柄程あり性質極めて温厚にして人に接するに至誠を以てするが故に甚だ評判がよろしい、何分四國銀行と對立して

の仕事であるから常隣凡介で其の職務に勤まらふ筈はないが、氏が全信頼を負ふて今日に至つてをると云ふ事實そのものが、氏の腕前を優に説明してをると思ふ、土佐へ来たなら土佐の水に合うことが必要だが氏は流石に其の邊のコツを呑み込んでをると見へる。

野中常三郎氏

宇田友四郎、川崎幾三郎、松村寛藏、井上善次諸氏の全盛時代に水通町の野中幸右衛門氏は此等の實業家と同じサークルに居り、大正七、八年頃の好況時代には白洋汽船でぼろい儲けをしたものだ。野中幸右衛門氏は元からの金持で銀行などに關係し晩年には高知製絲の専務取締役をもしてゐた、野中常三郎氏は此の幸右衛門氏の御曹子で明治二十二年三月二日生で本年四十八歳、正に人生の最盛期で花ならば爛漫の時代であるが、金の有り餘つてをる氏は謡曲を道樂とし専門家の壘を磨してをるところを見ると藝術的方面に餘程趣味があるやうに受け取られる、嚴父幸右衛門氏は鐵の如き性格の所有者であつたが、氏も其の血を享けて物堅いことにおいて定評があると同時に亦た中々温情にも富んでをる、常に眼を家政の大局に注ぎ小事に拘泥せず大抵の事は番頭任せであるが、曾ては土佐製紙株式會社常務取締役、大東漁業株式會社取締役、合資會社松川菱代表社員たりし事もあ

り、現在は多く事業に手を出さず土佐電氣株式會社監査役、五菱株式會社々長の二役をくゝりつけられ、幸右衛門氏の植林した土佐山奥の大山林を經營し、謡曲をうたひつゝ百年の計を樹立してをるところ金満家社界の堅人だと斷するが何うだ。

坂本重壽氏

長岡郡新改村の出身で代議士田村實氏と其の故郷を一つにし且つ血肉の關係にある、縣師範學校を卒業するや、朝倉小學校に奉職し、後ち池内實吉氏の校長たる須崎尋常小學校主席訓導となつたが池内氏が郡視學となるや其の後を襲ひ校長となつた、時たま、縣教育會長の中島和三氏が須崎町長に聘せられてゐた際だつたが、中島氏はぞつこん坂本氏の人の爲りに惚れ込み、中島氏が高知へ歸るに及んで中島氏の住する江ノ口小學校の校長に引き抜き益々其の才華を發揚せしめた、人材を愛する中島氏を後援者に有する坂本氏の將來は高知へ出ると共に其の前途が大に拓け一躍縣學務課の幹部に拔擢せられ更に幸運に拍車をかけて縣立圖書館長の椅子に就いた、土陽新聞の主筆千頭氏は坂本氏の人物に傾倒し實に上乘の館長を得たものと筆者に語つたことがあつたが、其の後ち中島縣教育會長に懇望せられて縣教育會の常務幹事と爲り誠心誠意會長を輔佐し知己の情に酬ひつゝ、

あるのである、容易に人を褒めることを欲せざる長尾前氏でさへ、坂本氏のサーピス振りには全く参つて仕舞ひ、應待振りと云ひ何から何まで用意周到なものだと感嘆してゐた、蓋し縣下の教育界に四時春風を吹かすがためにも無くてはならぬ人物であるとされてゐる。

畠中愷夫氏

多年紛糾に紛糾をつゞけ、世人をして其の醜態に擧げせしめた高坂高等女學校は、畠中愷夫氏を校長に迎へるに及び春月ならずして紛糾は鎮定し、日に月に面目を更改し、一時糞土の埒の如くに見えた同校は氏の就職と共に斷然校風を一新し、校紀を作興し、生徒、父兄、母姉、校友會をはじめ一般縣民をして手を額にし「これなる哉、これなる哉」と安心せしめたのであつた。

氏は香美郡岸本町の出身、明治三十年縣師範學校を卒業するや、直に城山及市高等小學校に奉職したが、志を立て、東京高等師範學校に入り三十六年優秀の成績を以て國漢專修科を出で、鳥取縣立鳥取高等女學校に就職し居ること四年、後福島縣師範に轉じ、更に岡山師範に移り居ること八年、それより米子高女に三年、兵庫縣立小野中學校首席教諭に奉職し在職八年、更に兵庫縣立豊岡高等女學校長に昇進し勤続八年、この間備さに女子教育の神髓を體得し、好譽噴々たるものがあつた、

同年八月高坂高等女學校協會は理事會において氏を同校々長に迎へることに決定し、同十月迎へられて校長の椅子に就いた、氏は公立學校生活實に三十四年六ヶ月の久しきに亘れる閱歷の持主であり、郷土に歸り初めて私立學校の經營に當ることゝなつたが、當時高坂高女は紛糾の餘焰尙ほ熾烈で氏の爲めに危惧する者もあつたが、併し氏は周到なる思と、渾身の至誠と、最善の努力とを以て其の禍根を爰除し、順次に之を統制して遂に能く今日の平和を招來し、その平和統制の基礎工事の上、着々發展の建築にいそしみつゝあるのである。

氏は一見したところ女子教育家に誂へ向きのタイプであり亦た女學校の校長として一廉の理論と見識を有してゐる、氏の主義として特に力をいたせる實際的教育、特殊教育の如き確かに時代の要求に合するもので家事、裁縫、手藝、珠算簿記、タイプライターなど何れも家庭及び實社會から歡迎されてゐる、二十名程の教職員が氏に心服し、和氣靄然として其處に同校の美風を濟す所以のものは、勿論氏の實力材幹の然らしむるところだと思はれるが、一つには亦た人格の感化であらふ。趣味は書道で雅號哥濤、岡山時代に同僚の大原桂南氏から慈恵せられ、初めて研究をはじめ今につゞけてゐるさうだ。

要するに立派な教育家として敬意を表する。

助石稻茂氏

高知市民は申すに及ばず「トモエ薬局」の名は一般縣民の耳に熟してをる、それは一つは宣傳の巧みなるが爲でもあるが「トモエ薬局」今日の信用は經營の主人公たる助石稻茂氏の人格と實力とが其の基礎を成してをること勿論である、日本の歴史を讀んで一番愉快を感じるのには微賤から起つて自己の志を成した巨人の成功譚であるが、氏は舊姓横田で新市町の一貧家に生れ幼少時に助石家の養子となつたものだが、市の高等小學校を卒業するや正木梅花堂に奉公し、居ること三年にして藥劑師たらんと志し蹶起大阪に上り一時丸本藥店の店員となつたが約一年にして其處を辭し苦學の決心をかため新聞の配達をなしつゝ大阪藥學校に入り、更に勃々たる雄心の動くがまゝに東都に出で矢張り新聞の配達をして東京明治藥學校に學び榮雪の功を積んで卒業後進んで東京藥學專門學校の研究生となり、大正十年の春、國定受験に及第して藥學士の稱號を得たのである、高等小學校を卒業して此處に至るまでの刻苦忍耐は優に國定教科書に編纂して小國民の範鑑たらしむべき價値があると思ふ、斯くて業成るや醫學博士高田研安氏の南湖院療養所藥局に聘せられ藥學に關する經驗を蓄へ、後ち大阪に赴き益々藥學上の研究を重ねること二ケ年、茲に藥學に關する智識經驗が十二分

川村嘉市氏

に養はれたから、大正十四年錦を衣て高知市に歸り市内山田町において堂々藥師商を開業し全魂を打ち込んで其の業に最善を盡したものだから「艱難汝を玉にす」の金言通り聽て現在の如き成功を見るに至つた譯で實に立派な成功立志譚中の人物である、此の如き苦勞人であるから酸いも甘ひも知り切つてをり、自己の店員には温情主義を以て臨み毎日曜日に公休を與へ、然かも店員に向上心を養はしむるがため其の日曜日を善用して宗教による精神修養を爲さしめてをる、之れなど一寸眞似の出來ないところである、氏は高知藥劑師會の理事、高知縣藥局藥劑師會の理事を勤め忠實をモットーとしてをる、氏は俳句、俚謡を好くし號を翠洞と云ふ、亦た書道の名手でもある、人間として完備せるものではなからふか。

安藝郡は由來實業家の驥北である、高知市の錚々たる實業家中には藝郡の出身が多い、川村嘉市氏の如き亦た其の一人である、氏は明治廿三年十二月を以て土居村の安岡家に呱呱の聲をあげた、そして安藝尋常高等小學校の三年から高知市高等小學校に轉じて卒業し、十六歳にして堺町の足袋醬油商高橋庫吉氏の商店に入り數年後同家の支配人に昇進し一切の業務を双肩に荷擔するに至つて店は

次第に繁昌した、果然囊中の錐は鋭脱して主家より深く其の將來を囑望せらるゝに及んで同家の二女を娶つたのである、然るに高橋氏は最初の約束を違へ無相談で氏を高橋家に入籍し、恰かも養子のやうに萬事命令的なものだから毎に營業上や其の他で意見を異にし自然感情の阻隔を來し、高橋氏は頑固なる壓迫を加へるの無分別に出づるものだから氏も遂に耐へかねて妻子を置き單身上阪して土居村出身の先輩であり親戚である豊國火災保險社長大谷順作氏に縋つて入社したが、間もなく社用で歸縣した時、家庭問題を解決し長男一人を高橋家に殘して別離し茲に川村姓を繼ぐことになつたのである。

天の重任を托せんとするや先づ試むるに艱險を以てす、氏は大正五年六月全くの裸一貫で獨立、帶屋町二丁目に家賃九圓で狭苦しい店舗を借り受け妻子三人暮して小賣商人として街頭に立ち血みどろの奮闘をつゞけた、そして百圓足らずの資金が出來たから夫をもつて大阪から再製手巾を仕入れると云ふ程度の微々たる状態に唖叫してゐたが、その後備前方面の商人から足袋の送荷を受けるまでの信用を得たるを幸ひ、時恰も歐洲大戰の影響から商品界の驀進的の値上りを見たが、進取積極主義の氏は當時地方の新聞紙面に餘な經濟記事の無きを見て、機敏にも財界の權威とされた某通信社と特約して大に活躍し市内一流の卸商店を向ふに廻して巨利を博し、此の痛快なる儲かりのため

新市町の現在の店舗を買収して、中村、室戸、安藝など縣下の樞要地に支店を開設し發展のゴールに乗つたが、後ち財界の反動期に入るや、見事に艱局を切り抜け斷然郡部の支店を廢し市中本位の方針を立て、中種崎町、新京橋などにて支店を經營し、本店は高知市で現金問屋のトップを切つたことに於て餘りにも有名である。

ところが昭和四、五年頃から、縣外の百貨店が高知市に着目し、出張販賣が頻々として行はるゝので、氏は縣外百貨店の侵入に憤慨し、蹶然起つて堺町野村ビルを目標に、デパートの創立に奔走し終に現在の野村デパートを作り上げたのである、そして氏の經營せる洋品部がデパートの中堅たる觀を呈してをる、斯くてデパートに經驗を得た氏は、持前の積極主義より數年を出でずして京町に大三百貨店を開き、又た最近は新京橋に丸新百貨店を創め、此處にも亦た洋品部を經營して常にその中心勢力と爲つてをる。

氏の營業方針は方針は新機軸を出して機先を制するにある、従つて冒險的が伴ふから内面的には幾回となく危機に遭遇し、所謂七轉八起の波瀾曲折を経てをると聞くが、氏の商賣に對する主義は一時的に儲けず大衆をよろこばしつゝ、薄利多賣の實行にあるさうだ。

最後に特筆すべきは氏の家庭である、氏は有名なる家庭ニコ／＼主義で圓滿なる其の家庭は萬祥並

び下るの風景で九人の子寶があり、内五人は現在各所の監督をやつてをり、十數名の女店員がそれに附隨してをる。

趣味は謡曲だが之は氣持を轉換して頭腦をやすけるためで決して道樂でない、商賣のかたはら先輩大谷順作氏との關係から豊國火災の代理店を引き受けてをるところなど洵に美しい。

岩原正雪氏

高知市下知の産、明治二十七年の生誕、縣立第二中學校の出身、大正九年土佐揚枝製造株式會社を創立し其の専務取締役となつたのが抑も實業界に乗り出す最初の小手調べで、其の後或は土佐郡高知市畜産組合副組合長に擧げられ、或は株式會社高知畜産協會監査役に選ばれ、或は在郷軍人會高知市下知町分會長となり、衆望の歸するところ高知市會議員に當選したこともある、現在は高知信用組合の常任理事として鳴らしてをり又た高知信用組合聯合會幹事として重きを置かれてをる、氏が高知信用組合の理事となつたのは昭和五年で足掛け既に七年、此の間再選せられてをる輝やかしき事實が組合に有する徳望と信用を物語つてをり、小川組合長とは好きコンビである、氏の功績は組合の事業を極めて順調に發展せしめたこと、四國一と稱せらるゝ持込擔保の保管倉庫をこしら

へた事と、全國に卒先して日賦償還貸附を斷行した事等々だが、保管倉庫は昭和十年十月をもつて起工し、十一年四月下旬に竣工落成し、日賦償還貸附は福岡縣の例に倣ふた新らしき試みで、昭和九年にこれを始め小商工業者のために適切有効なる金融の新路を開拓した譯で、創業當時だから可成りの犠牲は拂つてをるが、一般の小商工業者から荐りに歓迎せられてをるから將來健全に發達する見込み十分だと言はれてをる、氏の人と爲りは堅實で且つ平民的だから組合の爲には故ぐべからざる寶だ、趣味といへば盆栽ぐらいのもの、當年取つて四十三歳だから今後の活躍が觀物であらふ

武内隆信氏

高知商工會議所議員、高知酒類商同業組合副組合長の重職に居る武内隆信氏は舊名友一を隆信に改名した、安藝郡和喰村の出身、村の高等小學校を終へるや直に出高して實業家の卵たる丁稚奉公から振り出し、恰かも木下藤吉郎が抱きながら信長の草履執りを忠實に勤めたのと同一精神をもつて大に主家の信用を得、同時に商人たる腕を磨き、明治四十三年獨立して常盤町現在の場所に些々たる酒の販賣店を創めたのが抑も今日の大を成す最初の楷梯であつたことを知らねばならぬ、獅子兔を搏つに全力をもつてす、氏は全力を揮つて自己の店舗の爲に奮闘した、そして其の奮闘の

賜によつて店は次第に發展した、そして氏の正直なる奮闘主義は漸く世人から認められ、大正六年寶味淋焼酎酒製造株式會社の縣下一手販賣を引き受け、越へて同十四年伊丹小西の銘酒白雪の特約店となり縣下の一手販賣をやつてをる。

大觀綜合するに武内氏の店舗は縣内外の純粹の酒類販賣問屋であり、殊に寶焼酎と武内商店とは密着不可分の關係を馴致し、寶焼酎と云へば武内商店を聯想し、武内商店と云へば寶焼酎を聯想する程大量販賣の豪華版を鮮やかに繰り展げてをる、赤手空拳裸一貫から今日の成功に乗り出した過去の奮闘史こそ世の青少年達への好い手本であるつく／＼感服する、趣味は釣と網と其の他何でも來いの多方面だが、事業本位で道樂に熱中しない方だ、子寶は三人で長子は海南中學を出て氏の業を手傳ひ、次は城東中學校に在學中である、瓜の蔓には瓜がなるのだから行く末が頼母しい。

氏は本年五十歳の分別盛り、資性温厚、世話好きと來てをるから人氣があり人望がある、蓋し高知實業界出色の人物たるを失はぬ。

北村左久馬氏

新市町の北村染物店といへば、高知市は固より、全縣下にまで其の名聲が轟ひてをること程左様に

高名である、この北村家は代々の紺屋業で、當主北村左久馬氏は本町堀詰（延命軒の所在地）に生れ、十六歳の時、父君が死去するや、家業の全責任を双肩に負ふて奮闘のスタートを切つたのであつた。

明治二十七年、日露の役起るや、氏は召集の身となつて戦地に赴き功に依り勳八等を授けられたが歸來家業に専念し、數年間京阪神の劇傷其の他の方面において斯業の研究に没頭して大に得るところあり、大正十五年には自から率先して形染競技會を起し、廣く縣内の同業者を集めて向上心を刺戟し頗る貢獻するところがあつた、氏は性來染物に特殊の興味を有する所謂天才であり隨つて研究心が旺盛で、例へば鯉の瀧登りを研究するにしても、瀧の形態を知るがために全國の瀧の寫眞を悉く蒐集するといった風の凝り性で其處に精進の要素が備つてをることを看る、そして其の着眼が必ず時代の水平線を飛び越へてをるので進取の氣象に燃へ其處に他人が眞似の出來ない新味の香ひを放つ譯で、一例を擧げるならば衣服の防水の如き誰も氣附かないのに氏は既に着目して、京都の大原米藏氏が發明者で本縣出身の鷲野米太郎氏が關係してゐた防水を縣下に宣傳するがため、大正の末期に郡市の呉服商その他へ數百圓の見本を送り防水の知識を普及せしめた功績をのこし防水の元祖と稱せられてをるが、本業の染色の方では羽二重褌袴、着八形染で優等賞を授けられ、大正十一

年には市長より名譽ある篤行の褒賞を受けた、要するに縣下第一等の紺屋業たる折紙を附することにおいて何人も異存がない筈。

氏の趣味は多方面で、讀書、演説、史談、書畫等々、家庭には三女があり、長女へは正氏を養子に迎へ正氏は縣電氣局に奉職し、二女は九州に在る日本酒類株式會社の廣井鶴吉氏に嫁し、三女は縣立第一高女に在學中。

岡峰磯之助氏

高知の貸座敷界で押しも押されぬ人物として鬼螢の如くに光つてをる岡峰磯之助氏は安藝郡川北村の出身、嚴父の惠八翁は明治十四年住み馴れし川北村を去つて高知城下に出で經驗無き米穀雜商に手を出した所忽ち大失敗、一家慘落の境涯に轉落した、然るに氏は八歳にして慘風悲雨の家庭に發奮して駄菓子商行商に或時はばら賣りなどに憂身をやつし、夜は芝居小屋の貸蒲團方に雇はれ一家の窮乏を助けたが、後本丁筋一丁目魚の棚で當時有名な森島魚店へ奉公し十七歳まで働いた、給料は一ヶ月五十錢であつたが相當の腕が出来たから今度は蓮池町の仕出し屋大井利吉方に住み込み此處で料理の庖丁に一段の磨きをかけた、而して此の時から高知市内の大家へ出入り茶の料理の

専門家として腕の冴へを稱讃され、明治二十八年櫻井橋の元へ肴屋と雜貨を兼ねた獨立の店舗を開き大いに人氣を博したが、それより三、四年を経て山田町で宿屋兼料理屋を營んでゐた山吉の跡を引き受け益々發展隆昌して三十三年其處を買ひ取つた。此の時、山吉の主人の世話で一宮村の士族山本兼治夫人を細君に貰つた、夫人の叔父は村長であつた、斯くて夫婦の間に一子寅市郎君をもうけて夫人は果敢なくも死亡したが、その後に至り淺井家に奉公してゐた川北村生れの現夫人市の方を淺井の大旦那の世話で貰つたのである、後ち更に八幡通りへ公心館を開業したがそれが失敗で忽ち五六千圓を貸し、貸し棄てとなつた爲め倒れた、併し之れしきの事に挫折するやうな岡峰氏でない、失敗は成功の母なりと三十五年上の新地で貸座敷業をやる考へで家まで手に入れたが、考ふる所あつてそれを賣り三十七年二月埋立新地に元の大花櫻を買ひ千歳樓を經營し、三十八年輝やかしき玉の尾樓の飛躍時代に突進し、明治四十一年九月十四日土佐新聞社主催による料理人人氣投票に於て第四等に當選しその名譽を表彰する等、土佐の貸座敷界に巨人岡峰磯之助氏ありの印象を深からしめたのである、實に前後三十年間力戰奮闘のたまもので、まさに立志傳中の人物である、斯くてゴールド玉の尾樓は埋立新地に本店、第一、第二、第三の支店を有し、玉水新地にも二軒の支店あり都合六軒を持つて多額納税者として今や玉の尾王國の名を謳はしむるに至つた。嫡子寅市郎氏

は明治三十二年の生れ、市立商業を卒業するや大阪の會社に勤め、高知の片倉製絲へ轉じて來たが近時嚴父の事業を補佐し上の新地を擔當してゐる、岡峯氏は今や巨萬の富を貯へてをるが此の成功途上で或は洋食店を開き或は帶屋町梅の家に手を染め、或は後免に支店を出したことなども氏の成功史を飾る手腕の花として數ふべきであらふ、氏の趣味は相撲と闘犬で名高いものだ、闘犬道では取締役の閥歴があり現在は顧問格だ、そして愛犬の玉號は縣下の横綱で曾て伏見宮殿下及高松宮殿下御台臨の節、かしくも台覽の光榮に浴してをる、氏は青年時代からの勇み肌で俠客傳中の人物であり、公心館をやめた時、古疊で柔道の道場をこしらへ、徳島の工藤氏に就て日夜精進し立派な實力を貯へてをり、現に棧橋の中井氏と二人で工藤道場の顧問を勤めてゐる。尙ほ趣味の範圍に入るべきものに興行があり、大正十五年頃から主として浪界の大立物と呼んでフアンの人気を買ひ貢獻するところがあつた、氏は若い時より酒を飲まない、従つて信用あり、埋立新地貸座敷取締役として完全に威令が行はれてをるのは偶然でない。

宇田與八氏

高知商工會議所議員、高知洋物商組合長、上街商振會長の宇田與八氏は高知市の實業社會に於ける

輝やかしき存在である、氏は西南戦争の終つた翌年即ち明治十一年をもつて市内要法寺町に生れてをる、一代成功者の家庭には大抵貧乏な両親が付き物となつてをるが氏も亦たこの例に洩れず其の少年時代には家が貧しかつたものだから凡有る困苦欲乏と闘ひつゝ漸く小學校を卒へ、十二歳の時單身香美郡山田町に至り、酒造雜貨商の土居商店へ丁稚奉公に棲み込み此處で商人の卵としての修養を積み、勤続足掛け八年、十九歳に達するや首尾克く年期納めをして高知市に歸り種崎町の溝淵洋物店に勤め、此の大商店で洋物に關する知識経験を十二分に蓄へ、明治四十三年本丁筋一丁目に獨立開業し、こゝに愈よ風波荒き實業界に乗り出すことになつた、顧みれば山田の土居商店に丁稚奉公をして以來實に二十年間の貴き實地學問によつて身心を鍛鍊せられたのであつて、此の輩ばす鳴かざる時代こそ氏が實業家として立つに最も必要な準備時代であつたことを知らねばならぬ、何事をするにも準備が第一次の喫緊事である、聰明なる氏は能く此處を理解してをつたから、地球印の屋根看板で本丁筋に獨立の洋物商を始むるや一歩／＼に地盤を開拓して遂に今日の盛大を招來し得たのである、地球印の看板は無言にして氏の抱負を語るものだと筆者は想像する、氏は有りふれた我利々々主義の商人でなく公共の觀念に富んでをるから、上街區商家が比年消沈し行くを慨嘆し、大正十一年一月卒先して上街商振會なるものを起し、自らこれをリードして覺醒を促がしたの

の繩切れをも断じて粗末にせず、丁稚小僧にして其の繩切れを塵箱に棄てるやうな不注意をすることがあつたなら、容赦なく一喝を喰はされたと云ふ程の嚴格主義で鍛錬せられ、其の感化を受けて致富の秘訣を自得したところの氏は、一厘の錢經視すべからず、塵積んで山を成すの金言を頭腦に深く刻みつけ、大正四年自己の貯蓄金を運用して新市町に洋品雜貨店を営み、茲に實業家として立つ第一階段に猛進するに至つたのである、斯くて氏の創業に成る屋號「出善商店」は、氏が堅忍不拔の精神と、こつ／＼として休止することを知らざる努力の結晶に依つて、寸を積み尺を重ねて漸次順風に帆を張り、錢を積み圓を重ねて相當の資金を有するに至り、高知市の洋物商、高知市の實業家として重きを置かるゝ成功の域に到達したことは、一つに氏の細密なる思慮より來れる勤儉力行のたまものに他ならない、少時志を立て、郷關を辭したその目的は是に於てか完成せられたのである。氏はその名の示す如く性質圓滿で善良で、特に理財の天才を具備し、牧野貯金博士を待つまでもなく、ニコ／＼と利殖の道を實行した結果、現在の富を致し、今日の地位を築いた譯である、氏は普通の守錢奴でなく其の半面には精神尊重の金離れ魂が宿つてをる、だから曾て皇道大本高知聯合會長を勤め、尙ほ昭和神聖會高知支都次長をやつてをる、此の如き人物であるから町總代に推され町のために何くれとなく世話がるところ表彰に値する善行であらねばならぬ。

白石保平氏

人間の有つ肩書には、自からにして二様の意義がある、一つは金で買う肩書、他の一つは實力に附隨して來る肩書、此處に引つ張り出す白石保平氏の肩書は、まがひもなく其の後者に屬する方で、曰く高知商工會議所議員、曰く土佐商工聯合會常議員、曰く高知乾物雜貨商組合長、曰く高知乾物株式會社々長、曰く高知倉庫株式會社取締役等々、以つて氏の實力材幹を知ることが出来る。

氏は明治十八年二月二十三日をもつて高岡郡須崎町に生れた、學歷としては別に取り出で、書くべき程のことはないが、多く學校の課程を踏まず獨學自修、實社會を活きた實業大學と心得て一心不亂に奮闘するところに眞の勝利があり、眞の凱歌が奏せられる、偕てこの奮闘兒は徵兵適齡となるや海軍を志願して徹底的に肉體をかため、精神を鍛ひ、且つ千挫不屈の氣象を長養し歸郷後印刷業に従事したが、その經驗空しからず、天運めぐり來つて支那青島の印刷株式會社に入社し營業部長の要職に就き令名を博したが、大正九年縁あつて白石家の婿養子に迎へられ、再び高知市において舅家の營業乾物雜貨商に全身を没して生れ有つ才幹を活用し倍々その業を隆昌に導き身から出る實力の溢れるまゝに前記の肩書をくゝりつけられたのである。

であるが、氏の苦心と功勞は關係者一同の深く徳とするところであり、町總代に推されてゐるも矢張り徳望の然らしむる結果と觀る、氏は少年時代からの苦勞人程あり、誠に快活で能く語り能く行ふ春風駘蕩的人物で其處に人間宇田與八氏の眞價が輝く、赤手空拳から起つて、高知市實業界の巨人に數へらるゝ成功振りは何んと立派なものではないか。

松村誠二氏

高知市中新町上一丁目に堂々たる店舗を有する市内第一流の呉服本物商松村誠二氏は徳島縣の出身で、現に徳島縣人會の會長に推されてゐる、單にこの一事で氏の人と爲りと力量が讀めると思う、明治初年、阿波と土佐とは一縣を成し、阿波の縣會議員は高知へやつて來て大高坂城下の議事堂に出席した、此の好因縁と土讃線の開通とを綜合大觀して將來再び阿波と土佐とが一縣となる時代の到來すべきに想倒し、氏の如き有爲の人物を近代土佐人中に輯むることは筆者の最も愉快とするところである。

氏は明治三十二年六月二十八日を以て徳島縣麻植郡山瀬町なる松村泰輔氏の二男に生れ、幼少時に分家して松村爲次郎氏の養嗣子となつたものだ、そして大正八年海南中學校を卒業するや、進んで

慶應大學に學び、將來大實業家、大商人となつて思ふ存分に手腕を揮ふ素養を築き、後一年志願兵の豫備少尉となつた、氏に正八位の肩書あるは蓋しこれが爲であらう。

氏は中新町に呉服の卸商を經營する傍ら、堺町の野村デパート内に於て小賣業を兼營し、所謂長刀短刀用ゆるところ可ならざるなしの隆昌を呈し流石に實業界の新知識程あると敬服せしむる、蓋し高知市内青年實業家の白眉だ。

氏は天性溫良で至誠一天張りの人物である、だから町總代に推され、亦た高知商工會議所議員に選ばれ、その將來を囑望せられてをる、令弟は朝鮮に乗り出し、大邱に於て農園を經營してゐると聞く。

山本善吾氏

高知商工會議所議員、土佐商工聯合會常議員、メリヤス卸商副組合長の肩書を有する山本善吾氏は明治十八年五月十四日生れ、高岡郡宇佐村の出身である、紫瀾汀に打ち寄する宇佐の自然に育てられた氏は幼より實業家として身を立てんとする志の燃ゆるがまゝに十六歳の時郷關を辭して高知市に出で、當時種崎町の堅實なる巨商として名高かつた「いづかく」西山覺次氏の商店に奉公し、一尺

の繩切れをも断じて粗末にせず、丁稚小僧にして其の繩切れを塵箱に棄てるやうな不注意をすることがあつたなら、容赦なく一喝を喰はされたと云ふ程の嚴格主義で鍛錬せられ、其の感化を受けて致富の秘訣を自得したところの氏は、一厘の錢經視すべからず、塵積んで山を成すの金言を頭腦に深く刻みつけ、大正四年自己の貯蓄金を運用して新市町に洋品雜貨店を營み、茲に實業家として立つ第一階段に猛進するに至つたのである、斯くて氏の創業に成る屋號「出善商店」は、氏が堅忍不拔の精神と、こつ／＼として休止することを知らざる努力の結晶に依つて、寸を積み尺を重ねて漸次順風に帆を張り、錢を積み圓を重ねて相當の資金を有するに至り、高知市の洋物商、高知市の實業家として重きを置かるゝ成功の域に到達したことは、一つに氏の細密なる思慮より來れる勤儉力行のたまものに他ならない、少時志を立て、郷關を辭したその目的は是に於てか完成せられたのである。氏はその名の示す如く性質圓滿で善良で、特に理財の天才を具備し、牧野貯金博士を待つまでもなく、ニコ／＼と利殖の道を實行した結果、現在の富を致し、今日の地位を築いた譯である、氏は普通の守錢奴でなく其の半面には精神尊重の金離れ魂が宿つてをる、だから曾て皇道大本高知聯合會長を勤め、尙ほ昭和神聖會高知支都次長をやつてをる、此の如き人物であるから町總代に推され町のために何くれとなく世話がるところ表彰に値する善行であらねばならぬ。

白石保平氏

人間の有つ肩書には、自からにして二様の意義がある、一つは金で買う肩書、他の一つは實力に附隨して來る肩書、此處に引つ張り出す白石保平氏の肩書は、まがひもなく其の後者に屬する方で、曰く高知商工會議所議員、曰く土佐商工聯合會常議員、曰く高知乾物雜貨商組合長、曰く高知乾物株式會社々長、曰く高知倉庫株式會社取締役等々、以つて氏の實力材幹を知ることが出来る。

氏は明治十八年二月二十三日をもつて高岡郡須崎町に生れた、學歷としては別に取り出で、書くべき程のことはないが、多く學校の課程を踏まず獨學自修、實社會を活きた實業大學と心得て一心不乱に奮闘するところに眞の勝利があり、眞の凱歌が奏せられる、偕てこの奮闘兒は徵兵適齡となるや海軍を志願して徹底的に肉體をかため、精神を鍛ひ、且つ千挫不屈の氣象を長養し歸郷後印刷業に従事したが、その經驗空しからず、天運めぐり來つて支那青島の印刷株式會社に入社し營業部長の要職に就き令名を博したが、大正九年縁あつて白石家の婿養子に迎へられ、再び高知市において舅家の營業乾物雜貨商に全身を没して生れ有つ才幹を活用し倍々その業を隆昌に導き身から出る實力の溢れるまゝに前記の肩書をくゞりつけられたのである。

氏は資性極めて剛直、随つて自己の所信に邁進するに最も勇敢に、且つ仁侠の氣に富み幾多の關係者から深く尊敬せられ、市内新進の實業家として、近來頗に頭角を現はし、大に將來を期待せらるゝに至る、天は自から助くる者を助く、氏の如き正に自叙傳中の一異彩である―趣味は遊漁。

藤澤富士馬氏

小高坂には土着の近代人として三指を屈する人物がある、然かも其の三人物が氏宮の若一王子宮を中心としてをるから面白い、若一王子宮の直ぐ東に茨木谷があり其處には近澤明吉といふ自由黨時代の志士が老を養ふてをり、宮の西隣に居を構へ此處に王座するのが藤澤富士馬氏であり、其の南隣が後町で其處は物故した安藝喜代香氏の發祥地だ、藤澤氏は金もあれば徳望もあり郷村幾百軒の老幼男女は氏を郷黨の父として尊敬し、氏の命令通りに服従するから偉ひものだ、此の頃他の村落を歩ひて其の地方の名士とか有志とか云ふ人達の實際を見聞するに、一郷黨を擧げ、一人の異議者なく其の人の言ふ通りにすると云ふやうな和やかな風景は絶對に見ることの出来ない饒季の世の中となり果てゝをるか之感あるに拘はらず獨り小高坂の一角において信望、徳澤園里に遍ねき藤澤氏の存在は少くとも小高坂の誇りであらねばならぬ、小高坂が市に併合せられざる時代において、氏

が村の公共事業のために盡した其の赤誠は今尚ほ同地有識者間の時々口にする美談で氏は實に小高坂の國寶たる特別待遇を受けてゐた、だからこそ小高坂が市に合併するや氏の功績に酬ゆるがために、氏を尊敬する人達は市會議員に當選せしめたのであつた、そして現在小高坂信用購買組合の理事として重きを成してをる、此の如き地方稀に見る篤志家なるが故に、縣外、市内、町内の有志は氏を永久に傳ふるがため立派な胸像を造り昨年氏の庭内に建設し、盛大な除幕式を擧げたことがあつた、人間もこゝまで持てると満足で子々孫々にまで崇敬せらるゝこと勿論だがから之れ以上の幸福はあるまい、本年七十一歳、願くは天壽を全ふして百歳以上も延命せられんことを祈つて已まない。

川口虎衛氏

氏は高知市浦戸町の出身、明治十八年舊土佐銀行跡にあつた第七國立銀行の給仕となり月給五十錢を頂戴したのが抑も出世双六の振り出しで、當時は頭取の月給が二十二圓、課長級で七圓といふ金の貴い時代であつたが、少年時代より極めて實直な、そして堅忍力行主義をモットーとした氏は、明治二十一年に至り漸つと行員に昇進したのであつた、その頃第七國立銀行は株式會社に変更され

同時に國立銀行第八十と合併して茲に土佐銀行が生まれ氏は直に土佐銀行に入社し間もなく同系統の高知貯蓄銀行に轉じたが、明治四十三年土佐銀行が羽翼を東西兩郡に張るに及んで須崎支店長から安藝、伊野、赤岡等の各支店長を経て次第に腕を磨き大正十年十月土佐貯蓄銀行が創立せらるゝや入つて其の専務となり適材適所の令名を博したものである、昭和四年高知鐵道の監本役時代には社長役代理を勤めて手結、安藝間の建設工事を立派に仕上げ、行くところとして可ならざるなしの手腕を示し、同七年一月野村自動車株式會社の庶務部長に迎へられ現在に至つてをる、氏の家庭は洵に朗らかで三男二女あり、長子は市立商業學校を出て親戚福島珊瑚店の經營を助け、次は大倉高等商業學校を卒へて大阪の土佐商船組に勤め、三男は市商を出て土佐商船組に入り専ら實地の修養を積んでをる、長令嬢は二十代町の國手安岡氏に嫁ぎ、次女は高等女學校を卒業後自宅の家政を手傳つてをる、氏は別にこれと云ふ特別の趣味はないが、三人の令孫を可愛がること何よりの慰樂であるらしく、袋と布呂敷包の中に何時でも子供の玩具が這入つてをることは餘りにも有名である要するに高知市の實業家として尊敬すべき先輩株であり、非難のない好紳士である、明治五年生れで本年六十五歳。

廣瀬丹吉氏

「土州丹吉」の登録商標で全国的に知られてゐる廣瀬丹吉氏は釣鈎製造界の一大權威であり其の名聲は海外にまで鳴り響ひてゐる、即ちノールウエー萬國漁業博覽會や、露都萬國水産大博覽會や、日英博覽會等において金牌や、銀賞を授領してゐる事實が千言萬語を連ぬる以上の雄辯で其處に丹吉の世界的躍進に敬意を表する譯である、それと云ふのも開業以來二百有餘年の歴史を有する釣鈎の家柄が技術と信用とを兼ねて現在の豪華に到達した所以であつて、祖先の半左丹吉氏は元祿時代に城下の水通町で鍛冶屋を業とした有名な奇人青山半左のことで雅號の香舟で城下町に評判の人物だつたことは寺石杜山氏の考證を待つまでもなく著名の語り草となつてをる、當主の丹吉氏は養嗣子であるが能く家の歴史を重んじ家業を大切にして父祖の丹精を傷けまいと一生懸命の努力を拂ふてをるから、高知市菜園場町の釣鈎製造漁具卸商は當主の性格を反映して躍進又た躍進斷然斯界に雄視し、他の追隨を許さざるものがある、先代丹吉氏は土佐俳壇の宗匠で書畫骨董の道にも趣味を有つてゐた關係から今でも相當の珍品が傳へられてをる、當主の丹吉氏は趣味といへば吸江灣で魚を釣る位が關の山らしい、序に丹吉釣の左の授領賞であらして置く。

全國勸業博覽會……金牌授領、愛知縣水産工藝品々評會……特別優等賞授領、臺灣勸業共進會……金牌授領、東京平和博覽會……金牌授領、熊本三大事業國産共進會……名譽金牌授領、第二回水産博覽會……有功壹等銅牌授領、諾威國萬國漁業博覽會……金牌授領、第一回關西九州府縣聯合水産共進會……壹等賞並ニ金盃授領、露都萬國水産大博覽會……名譽金牌授領、第五回內國勸業博覽會……壹等賞授領、戰捷記念博覽會……壹等賞授領、第二回關西九州府縣聯合水産共進會……壹等並ニ金牌授領、高知縣制定産業彰功狀……銀牌授領、日英博覽會……銀賞授領、第三回全國特産博覽會……功勞金牌授領、大正博覽會……壹等賞金牌授領、全國産業博覽會……名譽賞金牌授領、大日本勸業博覽會……名譽賞金牌授領、大禮紀念國産振興東京博覽會……國産賞金牌授領、大禮紀念京都大博覽會……優良國産賞金牌授領

横山銑太郎氏

横山黄木翁の一粒種だから断じて平々凡々の齒醫者でないことを想はずに充分である、

明治十八年生れ、横山家は代々の醫者で幕末には有名な蘭法の大家を出し其の門下からは豊川良平等云ふ變り種が生産せられたが、氏は祖父の業を繼ぐべく明治四十年十月岡山醫專を卒業して直に大阪堀内耳鼻咽喉科病院に入り、滿六ヶ年間熱心に専門的研究を續ける傍ら、理科病院に通ふて理學的療法を學び茲に耳鼻科の極意を体得したのである。

後ち一年志願兵で陸軍三等軍醫に任ぜられた、正八位の位階は蓋し此の時に貰つたものであらふ、そして兵營を出づるや時恰も楠病院が耳鼻科を新設する際であり聘せられて其の科長となり居ること四年、大正七年獨立して市内に開業、昭和六年醫業研究の目的をもつて米國に渡り滿二年間親しく視察を遂げ大に得るところあつて昭和八年歸朝し、同九年二月再び高知市で開業することになつた。氏は夙に親孝行として知られてをり、嚴父黄木翁に對する孝道は實に到れり盡せりだとの評判だ、氏の長男正意君は慶應大學法科に在學中で次男崢君は東京無電學校に學んでをる趣味は玉突と俳句で俳號を菊雫といふ氏の性情が亦た菊の雫そつくりで氣高い氣品がほろ／＼流露してをる。

大原祐一氏

昭和十年の夏の頃野村茂久馬氏が滿洲を視察した結果の産物は土佐として永久に記念すべき資本金拾万圓の物産株式會社であつた同會社は木材、竹、疊表、海産物、珊瑚、眞珠、澤庵、密柑、筍の罐詰等々凡そ土佐において出来る海陸の産物を滿洲方面へ輸出するのが其の主なる目的であつて土佐と滿洲を結び附ける實業の鍵であるとして野村氏の活動に依り大連の土佐出身者なども進んで株を有つことになり大連で百万圓の巨富を擁して幅を利かせてをる見元七財氏の如きも亦た大株主の一人となり昨年十月三十日入交好保氏を中心として創立されたのであつた、そして本社を高知市に、支社を大連におき定款の文字を共まゝ茲に借用すると「縣の物産を關東洲及び滿洲國方面に輸出販賣を爲し滿洲の特産物を本縣に直輸入す」ることに全國を傾盡することになつたが此の愉快なる壯圖を抱ひて呱呱の聲を擧げた最も有意義なる會社へ常務取締役として迎へられたのが初月村万々出身の大原祐一氏であつた氏は昭和四年慶應大學の法科を出た高材逸足で當年三十四歳の少壯實業家だ氏は年齢から言ふても實業界の新知識で十萬圓位の小會社にくすばらすには惜しい人物だが併し氏の理想が高遠なる如く會社の理想も遠大で經營の如何によつては何處まで伸びるか分らぬ希望を有つ

てをるから實力の所有者たる氏に取つては正に一個の登龍門でもある、氏は常務取締役として既に幾多の成績を擧げてをり、お蔭で會社の事業は益々發展して奉天から新京にまで進出し着々地盤を開拓しつゝある、此の如き將來性の豊富なる會社は氏の如き手腕家を見るのは如何にも痛快で謂ゆる適材を適所に据へた天の好配劑とも考へられる。氏の家庭は男二人、女一人だが男息の一人は富豪をもつて聞ゆる野村家を相続することになつてをる。

秋澤三郎氏

高知市中新町秋澤内科病院の院長として知られてをる、明治二十六年十月一日生れ、高岡郡斗賀野村の出身である、幼より明敏で小學校代から秀才の名を取り村夫子をして後世畏るべしと言はしめたさうだが、明治四十五年三月縣立第一中學校を卒業するや、愛知醫學專門學校に學び、大正六年四月優秀の成績をもつて同校を卒業し、之より實社會に出でて多年の蘊蓄を實地に試みんと腕を撫してをる際、たまく高知病院内科部に招ぜられ此處で二年餘り研究を重ね、確信を得るに及んで同九年十月現在の中新町二丁目に醫院を構へて華やかに開業したのであつて、其の恬淡なる資性と患者に接する心からの同情と親切が人氣の焦點となり「秋澤先生」の名は北街方面の各家庭に權威

と親愛と尊嚴とを以て呼ばれてをる。

桃李言はず下自ら徑を爲すと古人はうまい言葉の後世に遺したものが、氏の人氣、氏の徳望は花に譬ふれば桃李である、黙つてをつても人の下駄で自ら徑が出来る城東商業學校の囑託醫となり或は同校野球後援會長に推さるゝなど矢張り氏の人徳からである趣味は中々廣汎で繪畫、寫眞、盆栽スポーツ野球等々行くところとして可ならざる英しだが特に野球には百二十パーセントの熱が出るほど如何にも熱心なものだ愛翫する盆栽の中で眞柏、五葉の逸品が珍中の珍と稱せられてをる、氏の人と爲りが恰も眞柏の姿そつくりで、何時見ても見飽かず、誰が眼にも奥床かしく映するところ流石に人中の天品たるを思はする。

岡崎眞積氏

高知の醫師社界には種々の人物があり、それ／＼門戸を張つて生存競争の渦中に独自の色彩を發揮し、尊敬すべき人、或は尊敬すべからざる人など汗だく／＼の優勝劣敗繪卷を展開してをる其の中に、此等の渦中から遠ざかり神を友とし神を語りつゝ靜かに自己の使命を完行してをる眞の仁術家が市内浦戸町に接頭した、その眞の仁術家こそキリスト教の篤信者で聞へてゐる岡崎眞積氏である。

ことを茲に更めて紹介する、頼まれて紹介するのでなく筆者の義務として紹介するのである、氏は學歷においても何等見るべきものなく、中學校を中途で退學し、獨學自修でもつて醫師の資格を得たのだから其の出發點が決して平凡でなく、其處に亦た人間岡崎氏としての面白味があると云ふもの、氏は嘗て帝都に出で前三井慈善病院橋の泉病院で研究を重ね、歸來浦戸町に於いて十七ヶ年間開業し此の間その人格の輝きと、不眠の活動に依つて次第に地位を築き醫院、狹隘を感じるに至つたので昭和十年一月高知驛前に移轉した。

氏はクリスチャンであるから、其の處世觀は聖書の教ゆる通り、人生の下敷きとなることに甘んじ斷じて上へ出る杭とならず、常に椽の下の方石たることを其のモットーとしてをるので、常に明朗で何等の不平不満がない、そしてキリストの謂ゆる「愛」に生きることが何よりの楽しみであるから其の愛が自然動物にまで擴充せられ、動物愛護の見地より犬や猫を飼ひ、人間と同じやうな待遇してをる、氏は他に趣味と云ふ趣味がない、患者の脈を握るのが第一等の趣味であるさうな、年齢四十と九歳です。

安並宏篤氏

筆者が氏を識つたのは、大正四年氏が高岡郡東部から推されて縣會議員に當選した當時であつた、

全く温厚な君子型の人物で、三十議員中に玉の光りを放つてゐた、これでこそ選良だと心から敬慕の情が湧き出たのであつたが、野武士の仲間に入つて、黨略や、黨争やに没頭するには、人品が余りに上品過ぎると思ふたが、果して一期だけ勤めて政界から足を洗つた、その頃氏は北原村のお医者さんであつた、爾來二十年間聲息相通するの機会がなかつたところで、昨年の暮、圖らずも東唐人町長尾前氏の病室で相會ふた、實に偶然であつたが其の時筆者は思ふた、長尾のむつかしやが、始終かゝりつけのお医者さんだ、タゞの御医者さんでないか、そして其の温厚なる君子型は二十年前と些しも變りがなく次第に圓熟せる風貌を見受けたのであつた。

高知市朝倉町の安並病院、その院長の安並宏篤氏は、明治十四年三月高岡郡浦ノ内村に生れ、十七歳の時發憤して東上し、東京醫學專門學校濟生學舎に學び、同三十三年を以て業を卒へ、翌三十四年内務省醫術開業試験に合格し二十一歳錦を衣て歸郷したが、明治三十七年九月陸軍豫備役見習醫官となり三十八年一月陸軍三等軍醫に進んだ、三十七年十一月四十四聯隊附となつて日露役に出征し、戦地に活動をつづけ三十九年一月軍旅と共に凱旋、功により功五級金鷄勳章並に勳六等旭日章

光章を賜つた、そして凱旋後の三十九年の夏、高岡郡北原村において獨立で醫を開業し大正七年末まで繼續し、大正八年六月高知市に躍進して朝倉町に堂々たる門戸を張り安並病院の名を高からしめてをる、氏は醫師社界においても徳望があり、現に高知縣醫師會理事、高知縣衛生會理事として忠實に盡してをる、忠實の二字は蓋し氏のモットーであらふ

趣味は投網、園碁、家庭には二人の令息がある、長男の宏君は東京慈惠會醫科大學卒業後、京都帝國大學婦人科に在り熱心に研究中、二男篤君は昭和十年東京帝國大學醫學部を卒業後、目下同大學において病理學を専心研究中だ、長男君と、二男君の名を合して嚴父の名となるなど何んと明朗な姓名風景よ。

福島磯彌氏

昭和十一年五月十九日、高松宮殿下が本縣に御台臨遊ばすや、高知市京町の福島珊瑚加工所は畏くも同殿下御成りの一大光榮に浴し、店主福島磯彌氏をはじめ、氏の全家庭、全従業員を擧げて只々恐懼と感激に充ち満ちたのであつた。

この光榮に輝く福島珊瑚店は明治七年の創業で當主磯彌氏はその三代目である、氏は見るからに實

直律義その物の如き人物で、珊瑚のやうな人格を備へ磨けば磨く程光澤彌増す眞人間である、氏の代に至つて宮殿下の御成りを辱ふしたと云ふことは、一たび氏の家の歴史を振りかへる時、これは決して偶然でない、積善の家の余慶であると朗らかに首肯し得らるゝるのである、抑も同店の創業は明治七年の昔で、土佐では自由民権の議論が沸騰し京町の立志社には天下の志士を以て任ずる論客が雲集し、野中兼山がお月灘桃色の俚諺で國産珊瑚の珍重すべきを後代の土佐人に教へたに拘はらず、猫も杓子も自由民権説に浮かれ切つた明治初年頃には幾んど一人として此の海の寶庫に着眼する者がなかつたが、初代の福島喜三郎氏は徳川時代の末期において幡多郡月灘村に珊瑚の密生せるを發見したが、當時の土佐藩は珊瑚の濫獲を防止する政策よりして一時その採取を禁止した時代であつたので、折角氏が發見した寶庫も如何ともすることが出来なかつたが、明治維新と共にその禁が解けたので氏は茲に珊瑚網を完成し寄生せる優良珊瑚の陸揚げに成功し、次ひで其の加工法に研究を重ね、高知市朝倉町に加工店を開業し、専ら玉根掛に従事したので次第に繁榮を來し、加工の案出が意の如くに行はるゝに至つて多々益々新機軸を出し、明治二十三年第三回内國勸業博覽會に出品して俄然全國的に認めらるゝに至り、總裁宮大勳位貞愛親王殿下より褒狀を賜はり、土佐珊瑚漁業並びに加工技能及び貴重商品としての聲價を一躍世界的に高揚せしめたのであつた、

二代の喜三郎氏も初代の遺志を繼ぎ加工の研究に全魂を打ち込み、時勢に順應して婦人の美粧、又は優美にして雅致に富む彫刻、床の置物等に漸次加工範圍を擴張し珊瑚の福島として内外の稱讚を博するに至つた。三代目が即ち當主の磯彌氏である、天稟の才華を發揚して、營業に加工に愈々益々傳統の精を磨き、能く時代の要求を洞察し、堅實なる發展の明朗路を歩みつゝ、創業より守成へ守成より躍進への向上道を踏みしめ、現在の大福島を建設し、事業の擴張に伴れ、朝倉町より京町に進出、更に分店を同じく京町に設け、輝やかしき歴史と、最新の技術とをもつて土佐の珊瑚界に顯著なる貢獻を爲し、その功績の煥發するところ、高松宮殿下の御成りとなつて、家門の榮光を子々孫々に傳へる劃期的名譽を双肩に荷ふた譯で、三代目の氏の代に至り福島珊瑚店の名は九重の上に達したのである、筆者は縣民大衆と共に氏が不朽の名譽を壽き併せて氏の業績に對し最高の敬意を捧げる。

藤村 徳次氏

多額納稅者として本縣の長者番附に載つてをる種崎町の藤村徳次氏は、高知商工會議所議員、高知吳服小卸同盟會員長、藤村製絲株式會社の社長と云ふ豪華な名譽と地位を併せ有する實業界の立物

である、氏は明治二十二年一月十日の佳き日をもつて高知市朝倉町浦鉾商永野鹿藏氏の三男に生れ十三歳の時、種崎町島内商店に奉公したが、大正三年藤村家が同店を買収して開業すると同時に氏も亦たその店に移り重要な役目をあてがはれたのである、藤村氏は人を見る明があつたから、氏の行動の端正にして日つ商略に富む非凡の材幹を愛し、此の好男子に店を委ねば大丈夫だとの囑望から、翌四年同家の養子に迎へらるゝ機縁を生み、茲に藤村姓を名乗るやうになつたのである、伯樂は斯の如くにして二十四万石の城下に千里の馬を見出し藤村呉服店の一切を一任した、人生意氣に感ず、氏は令舅藤村氏の期待に酬ゆべく、爾來二十年間堅實第一主義の商法の上にながしりと立脚し、顧客本位を信条とせる勤勉努力の効果空しかず、店舗日に月に榮ゆる一方で、資産と信用がそれに伴ひ遂に本縣呉服商界の三大商店に指を屈せらるゝ躍進譜を奏することになり、地下の令舅をして、予が眼鏡は正しかつたと北叟笑ましむる大成功の天地を打出したことを偉としなくてはならぬ。氏は資性温健にして着實、人に接して城壁を設けず、然かも商業經營に當つては斗の如き膽力と、利刃の如き果斷と、不退轉の勇猛心をもつて、能く計り、能く斷じ、能く行ふので商算必ぞ中るの定評となつてをる、藤村呉服店今日の成功は要するに氏の有つ此の三拍子の發露でなければならぬ、故高橋是清氏は物よりも人を高くの主義であつた、が寔に事業の成否は物質にあらず

して人を得ると得ざるとの一点にあることが、氏の實例において極めて昭明較著だと思ふ、だが人間の力には限りがある、豊太閤の下に幾多の小秀吉があつて彼の大業を成したやうに、藤村呉服店をして今日の大をなさしめたのは、氏の股肱となり手足となつて働く店員に其の人を得たことゝ、そして氏がその店員を遇するに極めて懇切である其の用意の周到を見遁してはならぬ。氏の趣味は謡曲、他にこれと云ふ道樂はないが町總代として町内の世話焼きをすることが道樂位のものであらふ。

多田嘉之助氏

天の其の人を試みせんとするや先づ與ふるに難險を以てす帶屋町の下、上橋の西詰に精肉舗の看板を出し薄切肉界に斷然異彩を放つてゐる多田嘉之助氏の成功苦心譚と、松榮夫人内助の功は好個の修養學として廣くこれを紹介したい。多田氏は明治二十三年八月十二日を以て香川縣三豊郡材田村に生れ、翌々年二十五年兩親に伴れられ高知へ來たが、赤貧の家に育つた氏は十歳の時生魚商小野屋に奉公し、明治三十七年轉じて松原精肉店に雇はれた大正六年まで一心不亂に働きつづけたなれど、家庭の事情に余儀なくされ大正七、八の二年間は市役所の消毒人夫となつて備さに苦楚をなめ

たが、併しこれを契機に市吏員と親善のチャンスを得たを幸ひに大正九年帯屋町の公設市場に精肉店を開業し、翌十年京都生れの松榮夫人を娶り組合外の營業により大に奮闘したものであるから、忽ち組合側の壓迫を受けたが神は自から助くる者を助く、大正十一年頃には多少の蓄財が出来たので高知商業銀行に預金したところ破綻の飛沫を食つて全部の預金を失ひ途方に暮れてゐたところ、其の翌日全郷である牛馬商の川南左平氏が突然二頭の牛を曳き來り氏の苦境に同情してそれを貸してくれた、ところが不思議にも亦た二頭の牛が一日のうちに賣り切れとなつたので、氏は深く感激しその夜元價の三百五十圓を綺麗に返済した。

川南氏に救はれた氏は、爾來松榮夫人と共に日夜寢食を忘れて精肉に勉勵し、千圓の貯金を目標に粉骨碎心の甲斐あり、數年にしてその目標に到達し、それを資本に勇氣百倍の大勉強振りに今や貸家の十二軒も有ち數萬圓の富を積み、昭和九年以來現在の三階建を購入し經濟第一、目方賣りのスキ焼きで非常の人氣を博してゐる。

氏は信仰に厚く天理教を信じ、天理學校を卒業し、權訓導より補訓導となり營業のかたはら神に奉仕することを怠らない、そして氏が今日の成功は水仕一人も使用せず、家事萬端を自己の細き腕一つで立働いてゐる松榮夫人、内助の功に歸すべきであらふ。趣味は仕事本位、酒は一杯も口にせず

働くことが何よりの好きで飯を喰はずともよい程ださうな、氏の成功蓋し偶然にあらず。

中山百馬氏

辨形の菊水堂といへば高知市第一流の高等菓子商として其の名は全市郡に知られてゐる、中山百馬氏はこの菊水堂の主人公で吾川郡芳原村の出身だ。

氏は二十三歳の頃、郷里に於て雜貨店のかたはら菓子商を営んでゐたが、明治三十年楠信馬氏が經營してゐた菊水堂菓子舗を譲りうけ楠に就いて製造販賣の手ほどきを習ひ、同氏死亡後は辛らい思ひの裡に職人を師匠と仰ぎて研究に没頭し、又た縣外より渡り來る菓子職が尋ねて來るのを幸ひと、一週間滞在せしめて、秘訣の傳授をうけなごして次第に知識と經驗を積み、斯くて開業以來四十年の輝やかしき歴史を有する菊水堂を再建したわけで、成功の半面に潜む苦心こそ忍耐強き中山氏の精神的資本であらふ。

名物の百合羊羹は大正三年帝國菓子館共進會に出品し特等賞名譽賞金牌を得た、爾來全國各種博覽會、共進會等に引つゞき出品し特等名譽、金牌を受くること前後數十回に及び、亦た審査員より感謝狀、賞狀等を十數回貰つてゐる。

大正六年菓子商組合成るや氏は會計に推されて十ヶ年間勤績、組合長も數年間勤め令名を博した。大正十二年八月、拓務勸業夏の夜博覽會において長崎流カステイラを出品し有功一等賞金牌を授與、又た平和博覽會當時高知市役所より指定され、その後、組合より神戸、大阪、名古屋、京都、東京等この業界視察を爲し大に得るところがあつた。昭和九年、高知新聞社主催の土佐代表十名産に當選し、百合羊羹の聲價は縣外にまで響き、今や土佐の代表菓子の一として鐵道省指定のもとに高知驛構内でも販賣してゐる。昭和十年、高知菓子卸商業組合設立せらるゝや推されて理事となり現在に至る。

家庭には一男一女がある、長男岩雄君は市商卒業後家業を佐け、長女喜美子さんは土佐高女補習科を卒後して甲斐くしく家事を手傳つてゐる中山氏の趣味は盆栽。

桂井學司氏

高知市中央卸賣場土佐園藝株式會社の常務取締役桂井學司氏は、吾川郡長濱の出身で高知市助役馬場敬春氏、幡多支廳高原早雄氏と三人兄弟だが、氏はその長兄で本年五十二歳、小學校時代よりの秀才で、頭腦の明敏と、腰の強ひことが持つて生れた特色だから、如何なる場處へ押し出しても謂

ゆる四方に使ひして君命を辱かしめざる底の人物である、氏は學校を出て其の天品の發露するがまゝに幾多の社會的地位を獲得し、大正九年には新潟木材株式會社(資本金七百萬圓)の常務取締役として大に北陸地方に活躍したのだが、その後同會社を退き、土佐に歸つて風雲を觀傍中、昨年九月土佐園藝株式會社の常務取締に迎へられ、頭の牙へ、腕の牙へ、口の牙への三拍子でもつて、多年紛糾に紛糾を重ねてゐた新舊二派の仲買人を巧く收め、難局に立つて能く調和を圖り、壘卵の會社をして泰山の安きにおかしめたのである。

氏は責任感の強ひことが人一倍である、一例を挙げると、氏は最近約四ヶ月間チブスに罹つて療養し、五月一日をもつて退院したが、醫師は嚴に退院後の靜養を注意したに拘はらず、氏の責任感と氣持とは、到底じつとして靜養することを許さず、退院の翌日から會社に出勤し雜務に就ひてゐる氏は實に事務に熱心だが併しその半面には會社の生字引たる濱川營業部長の補佐與つて力あることを見通がしてはならぬが、其の生字引を活用するところに桂井氏の大を認めることが出来る、氏は家庭的にも恵まれてをり長男和男君は土佐山小學校長を奉職し、二男は海南中學校を出て専門學校に入るべく準備中だと聞く。蓋し、土佐園藝株式會社は、氏の利器を試むるに恰好の舞台であらう好漢自愛せよ。

田中 信元氏

近森虎治氏といへば、全高知市民から追慕せらる近代の名醫、眞の仁術家として範を後代に垂れてをる、田中信元氏はこの近森氏を叔父に有つ、蓮池町の内科小兒科醫院の院長であることを先づ書ひて置く。

氏は明治十五年十月、香美郡夜須村の士族の家に生れたが、家計豊かならざる爲め、郷里城山高等小學校を卒業するや、將來醫をもつて身を立てんと志したが、叔父の近森氏は氏に軍人たることを奨めた子を識るは父に如くはなく、甥を知るは叔父に如くはなし、近森氏は氏の性格が軍人に適してゐると鑑定したから軍人となれと言つたが折角の忠言を聽かず、最初の信念通に醫師たらんことを志し笈を負ふて上京した、時は明治四十三年頃であつた、幸ひ親戚の者の援助で一ヶ月十七圓の學資補助を得て、私立日本醫科専門學校に學び、鏡意研究に勉め、螢雪の功空しからず、在學中に内務省醫術開業試験に合格し、歸縣するや、蓮池町近森内科病院に勤め、博士以上の腕前と稱せられた叔父の下に在りて益々醫術を研磨し、近森氏隱退後はその後を繼承し大正五年に至り現在の場處において獨立開業した。

斯くて、その間、遊學中親戚より借りた學資金は之を成功拂ひとして疾くに全部を返済し、一意醫業に、勉勵し、叔父の感化を受け診療に當るに患者を友と心得て晝夜の區別なく親切を旨とし眞面目に取り扱ふことを第一の務と習慣つけられてをる、要するに氏の今日あるは意思鞏固、志操堅確なる叔父薰陶の賜であると言はれてゐる。現に高知縣醫師會健康保險部理事、高知市醫師會評議員として活動してをる。趣味は、醫師の天職から割り出し、外に求むるよりも内に求めよの主義で、寫眞書畫、刀劍の類を愛翫し、旁々疲勞した頭腦を轉換せしめつゝ個性の向上洗鍊を圖つてをるのは流石だ。

坂井兼太郎氏

德島縣人は由來商才に秀でゝをる、だから高知市の實業界を見渡しても德島出身者にして成功してをる者が鮮少でない、履物卸商坂井兼太郎氏の如き亦たその一人である。

氏は種崎町砂糖卸商坂東宇平氏(多額納稅者)の令甥で明治廿二年德島縣那賀郡羽ノ浦村の産、年少商業をもつて身を立てんとするの志あり、年十三にして叔父坂東氏をたよりて高知へやつて來た、その時坂東氏は本丁筋で煙草店を開いてゐたから其處で丁稚奉公をしてをるうち、煙草が政府の專

賣となつたので坂東氏は砂糖商に轉向した、當時氏は二十一歳の青年であつたが、何時までも叔父の厄介となつてをることは男子の恥だと考へ、斷然獨立獨行の決心をかため、零細なる給料貯蓄金を運用し本丁筋に履物店を開業し、二十三歳の時、新市町に移轉、刻苦奮勵晝夜をわかつた全力を履物業に傾注し、次第に發展して今日の盛況を見るに至つたが、此の間の苦闘實に二十八年、一昨年の夏京町に大三百貨店を組織し多々益々辨する豪華繪卷商賣往來を展げてをる。氏は資性濃厚篤實にして商略に長け善謀善斷着々として成功のゴールに突進してをる、高知履物商盟會の會計、氏の將來は同業者の刮目するところである、

香川一氏

現代は「食」の世の中である、大谷光瑞師さへ「食」といふ出版物を出して、信濃の蕎麥料理、門司のフグ料理、南京の蛇料理までを品階してゐるではないか、酒の國の土佐の高知で、浦戸町の「食通」が持て囃さるゝのは矢張り時勢だ、經營者香川一氏の着眼点は流石に勝れてをると思はせる。

氏は明治三十六年幡多郡清水町に生る、十四歳の時出高小島町楠瀬支店に奉公して約三年間相當の腕を磨き茲に愈々料理をもつて身を立つべく決心し、十七歳の六月斷然上阪して灘波新地の京定事

務所を通じ、同地一流の料亭たる平野町「酒亭」、「灘萬」、「鶴屋」、等々に採用せられて益々腕に磨きをかけ、充分の自信が出来たけれども、小成に安んぜざる氏は更に東京を除く全國著名の料理店を武者修業同様に巡遊して自信を裏附けるに至つたので、昭和三年二月得月中店の招聘に應じ、調理部主任として月給百二十拾圓をうけ六年間忠實に勤め上げた後、昭和九年七月現在の浦戸町に獨立して「食通」を經營することゝなつた、此の「食通」は大阪の一品料理式に客の好みに應ずるのが其の特長となつてをる、毎年五月と九月の料理變り季節には、大阪、名古屋、岡山等へ研究に出かけ、器具や室内設備等に就ても他の長を探つて近代的新味を應用することに細心の注意を拂つてをる。此の如き料理の名人であるから、昭和九年四月閑院宮殿下御來縣の砌、昭和十年八月、澄宮殿下御來縣の砌の兩度とも、御調理方を拜命する光榮に浴し、又た宮殿下が室戸岬山田邸に御成の節にも調理方の恩命を辱ふしたのである、氏が庖刀の牙へは多言するまでもなく右の事實が何よりの雄辯であらねばならぬ。

一口に調理と云ふけれども、其の道に入れば種々の様式がある、殊に婚禮の儀式には古イイガマ流四條流、小笠原流の三派があるが、氏は悉く之を体得し各流の調理に庖刀の切れ味を示してをる、特に氏はフグ料理が得意中の得意で食通のテツチリは縣下隨一との定評がある。氏の趣味は網と狩

獵、矢張り料理の天才程あると微笑れる。

横矢重包氏

本町二町目に門戸を張つてゐる横矢齒科醫院長の横矢重包氏は明治三十四年十一月をもつて香美郡赤岡町に生れ、同四十四年城東中學校を出て、東京齒科醫學專門學校に學び、大正二年卒業後、歸縣して嚴父重義翁の業を助け、後ち朝鮮總督府慈惠病院齒科部長を奉職し、大正六年嚴父の易簣に遭ふや、歸郷して先代の跡を繼承し、出藍の譽れ高く、昭和九年現在の場處にモダン洋館の建築に外觀内容の充實せる新装を凝し今日の光景を招來してをる。

氏は現に東京齒科醫專同窓會高知支部長の要職を勤め、高知縣衛生會評議員、高知郵便局の醫事衛生囑託員として令名がある、年齒纔かに三十有六、これからが人生の働き盛りである、故重義翁は高知の一名士であつた、そして社交界に名聲を馳せてゐた、出藍の譽れある氏は必ずや故翁以上の光彩を輝やかすであらふ。

吉本榮氏

人間の立身出世には運、根、鈍の三要素を必要とするが、中にも實業家に缺ぐべからざる要素は運と根である、縣下の醬油醸造界に雄視する吉本榮氏の如き即ちその要素の所有者である。氏は明治十四年、菜圓場町先々代中屋虎次氏の三男に生れ、運命の神は氏をして絶家せる親族吉本家を襲がしめるべく因縁づけたのである、中屋家は代々の酒造業であつたが本縣の氣候風土が醬油醸造に適せるを見て九反田に工場を新設し、氏をして之が管理に當らしめたのである、此處にも亦好運の導きがあつた譯で、氏が今日の大を成す第一歩は正に此の時において踏み出されたことを知らねばならぬ、當時縣下の醬油業頗る幼稚であつたが、氏の慧眼は時勢の進歩に伴ひ、機械力を利用して生産費の軽減を圖らなければ、到底輸入品に對抗が出来ないことを看取したので革斷をもつて新設備を整へ品質の改良に努め、精根第一主義に確乎と立脚し着々理想を實現したが爲、漸次躍進し造石高一ヶ年一千石を越ゆるの盛況で「中醬油」の名は汎く喧傳せらるゝに至り、創業以來三十有五年、縣下第一の老舗たる名實を兼有し、品質に於て關西の本場たる小豆島や、播州の龍野産に比して遜色なく、否寧ろ此等を凌駕する呼聲さへある、これと云ふのも市商を卒業して家業を輔けてをる

長男の融君が毎年東京に在る日本醸造試験所へ行き熱心に研究する新知識の蘊釀が與つて力あることと言ふまでもない氏は子福者で二男富士君は特務機關の重任を帯びて蒙古に非常時國家の足場を築き、その次の正君は名古屋高商に在學中で、外に市商や、中學校に學んでをる第二世が多々ある。趣味は書畫骨董から俳句、謡曲、現在高知縣醬油組合の幹事を勤めてをる。

濱田定太郎氏

高知の保險業界には人材が多い、これは業界のためただ祝福すべきことである、福德生命保險四國支部長の要職を勤めてゐる濱田定太郎氏の如きすなはち其の一人だ。

氏は吾川郡弘岡の産、明治二十年生だから本年五十歳、青春志を抱けて上阪し、某先輩の推薦で國光生命大阪支店に入社、間もなく歸縣して同社の外務に従事すること二ケ年、爾來高知縣監督、高知出張所長に進み、三十歳の時徳島出張所長を兼務して益々其の手腕を認められ、三十六歳の時、上司の懇請黙しがたく和歌山縣出張所長を兼ねるに至つて、三面六臂三縣の探題を振り當てられて多々益々辯ずるの概を示したところ雄辨に氏の非凡なる材幹を物語つてをる、斯くて足掛十四年間同社の爲に盡した多年の努力に若が咲き大正十三年先輩の推薦に依り福德生命に轉社、直に四國

出張所長を仰せ附かり、氏の入社と同時に營業所を現在の場處(本町舊警察署前)に新設し、建築の竣工するや四國支部に昇格して支部長の大役を命ぜらたと云ふのが名譽あり光輝ある氏が經歷の梗概で、二十有七年間一日の如く保險界に貢獻した其の志操と功績は儒夫をして起たしむるに足る、氏は五十にして既に功成り名遂げたのであるが今後四、五年すれば引退する考へを有つてをるらしい。だが、四十、五十は鼻垂れ小僧の部で、男盛りは六十からだから、氏は保險界を退ひても恐らく隠居はせないだらふ、活動力の旺盛な氏は胸底深く藏する何物かの片鱗を窺知することが出来る長男薫君は帝大を卒業の俊才、長女靜子嬢は第一高女出身の才媛、家庭的にも恵まれてゐる、趣味は圍碁と魚釣り、沖の鯛釣は素人界の大先輩だと言はれてをる。

徳弘 鴻氏

銀行人から眞珠業へ、これが徳弘鴻氏の人生行路だ、人生の行難は山にあらず河にあらず唯だ人情反覆の間在りと昔の詩人は歌つたが、朝から晩まで金を取り扱ふところの銀行界にも左様な行路難があるか何うか、氏は明治二十年旭の井口に生れた、井口には戰國の武將井口氏の居城がある、至つて小さい城ではあつたが長曾我部軍の包圍攻撃に遭つて最後の最後まで頑張り、戰國男兒の度

胸を見せた尊敬すべき士人である、我が徳弘氏も定めし少年時代から其の感化を受けたことだらと想はれるが、近代人の武器は剣にあらずして算盤である、氏は明治三十五年高知銀行に入り雨滴岩を穿つの恒久力を以て四國銀行と改稱せらるゝまで忠實に勤務し、その間高岡支店を振り出しに縣下の各支店から徳島支店などに派遣せられるところ成績を挙げたが、昭和七年五月四銀を辭し井上眞珠株式會社に轉向した、同社は最初の資本金が八万圓であつたが、昭和十一年六月一日三十万圓の増資を斷行し一躍三十八万圓の資本が出来たから氏の手腕も揮へる譯で、隅田氏と共に恰好のコンビとして縣の實業界に眞珠の如き光りを放つてをる。

貝を以つて生命とする氏の趣味は釣、家庭には三男一女あり、長男は城東中學校を卒業、次男は工業學校の出身で京都の瓦斯會社に勤め三男は商業學校に在學中である。

竹村與右門衛氏

ブラジル移民會社をイの一番にこしらへた先覺者、貴族院議員を二期つとめた有徳の紳士―それが竹村與右門衛氏だと言つただけで大體その人物を評價し得る譯だ。

氏は文久元年十二月二十九日をもつて茶場園の二百五五番屋敷に生れた、茶場園の「木屋」といへば

高知城下で一等ふるい金物店として知られてをる、金物店を木屋とは之れ如何にとの疑問が生ずるが、同家は淺井、川崎などと比肩する舊家で、明暦の昔から現代に連綿と彌榮へてをる福徳圓滿の名家だ、明暦といへば今から二百五六十一年程も前の年號で氏の祖先は木材商を茶園場で營んだものらしい、堀川に沿ふて木材の店舗が設けられ、屋號を「木屋」と稱する由來がこれで解かる、氏は此の歴史ある竹村家第十六代の主人公で明治十六年十二月二十五日家督を相續し

二十二年九月區會議員、二十三年三月市會議員、二十四年三月徴兵參事員、同年六月所得稅調査委員、二十六年四月より三十四年十二月まで高知商業會議所常議員、同年高知金物商組合長、三十九年市參事員、同年外務省の許可を得て伯國移民會社を設立、四十四年九月貴族院議員、大正五年歐洲大戰時の功勞により勳四等に叙せられ、大正七年九月貴族院議員に再選、同八年茶園場總代に推さる、同十三年六月勳三等に叙せらる、同年市第一小學校五十年會長に推さる

右が其の大様で氏の輝やがしき經歷は祖先に對し子孫に對し實に立派なものであると誰でも尊敬の念を起すであらふ、斯くて功成り名遂げたる氏は昭和六年より家督を長男義雄氏に譲り、他の令息三名を伴ふて帶屋町の別邸に隱居し悠々閑日月を銷し最も幸福に満ちた理想的の考後を送られてをる、家庭には男四人の外に二人の令嬢があり一女は分家して永國寺町に家を構へ一女は辯護士界の

名士濱田虎太郎氏に嫁してをる。氏の趣味は園芸と讀書で其好尙が何よりもよく氏の人と爲りを語つてをる。

仁尾進氏

高知市の實業界や政界を見渡して風采の堂々たることに於て類を絶ち群を抜ひてをるものに我が仁尾進氏がある、前には民政黨支部の大幹事長として持つて生れた剛直と溫情味でもつて同志の間に尊重せられ、亦縣會議員、市會議員、商工會議所常議員、四國自動車株式會社取締役、清水製氷冷蔵株式會社取締役等々の要職に推されて小事に抱泥せざる器局の大を示したものであるが、明治二十二年十月五日生だから まだくこれから全盛の彼岸に到達するべく氏の九星がさやくのだから前途未知數の烙印を捺す。

氏は安藝町岡本大吉氏の二男に生れ、幼年の頃親族仁尾家の養嗣子となり、養母丑刀自の眼鏡に叶つて、大阪商業學校を卒業するや家業經營の衝に當り倍々紙文具商の發展を圖ると共に、時勢の進運に伴隨して洋帳簿製造印刷を開始して銳意家運の隆昌を期し、就中印刷業は設備の完全と技術の精妙においては高知市第一等の定評となつてをる、此等の事實をもつて氏が實業家としての材幹は

優に社會から認められ、多額納稅者の番附が斷じて偶然でないのを想はずに充分である、氏は人に對して城府を設けず赤心を他人の腹中におく美質の持主であるから、大西正幹氏と親善な關係を作り、大正十四年五月市會議員の選舉あるや有志の推選するところとなり輿望を背負ふて當選し、爾來政治に興味を有するに至り同志の懇請に依り一躍民政黨支部の幹事に据へられたのである。氏は剛直の性質であるから當時民政黨總裁濱口雄幸氏と大に共鳴するところがあり華々しく奮闘したが親分濱口氏の長逝は氏の心機に大に變化を與ふるに至り間もなく政界より隱退の形と爲つたので同志者からは荐りに惜まれてをる。

氏はその風采が物語ることく政治家としての素質もあれば、幸運に恵まるゝ實業家としての天分をも有してをるだから再飛躍の時代は必ず到來するものと一般から待望せられてをる、雌伏數年、黙々として自から修養するところに近き未來の大成がある 『大器晩成』 筆者は此の四字を氏への嘘とする

徳久勇氏

カフェー『ミカド』の主人公、本年五月高知市において第三十四回全國理料業同盟大會の擧あるや

氏は大會の副委員長として其の明敏なる頭腦と、縦横の手腕を働かして萬に一遺算なきを期し、晝夜不眠の活動で、縣外五百の出席者に大満足を與へたアタマとウデの冴へは只々感嘆のほかはなかつたのである。

氏は長岡郡三和村片山の出身、十六歳の時、郷貫を出で、大阪砲兵工廠に先輩吉川技師をたよりに會計課に入り、その後技術部や彈丸製造部に轉じ五年間辛棒をつづけてゐるうち、徴兵検査に合格し入營して經理部に入つたが偶々シベリヤ事件の風雲が捲起し黒龍江省に出征を命ぜられ戦闘に立ち功に依り勳八等白色桐葉章を賜はり、滿期退役後長岡郡後免町で一ヶ年ばかり西洋洗濯をやつてをるうち、安藝町門田寅方「一力樓」の養嗣子に迎へられ、大正十二年高知市帶屋町でカフェーを開業した、その時代にはカフェーの看板を高知市で見るとは殆んど珍らしかつたので開業匆々から千客万來の繁昌を呈し滿三年二月後、現在の場所（新市橋の南北街）に移轉し益々發展の波に乗つたのである、此の前後、高知市内には百軒をもつて算するカフェーが雨後の筍の如くに出來たが、また、くまに夫れが二十軒に減少した、氏のミカドは經營よろしきを得たるがため日に／＼發展の一路を辿るのみで、其の間或はミカド支店の出現となり専ら日本料理で客を呼び或は大和屋を創め二十錢均一の丼ものや鮎の出前で遠隔の地へはオートバイで急配すると云ふ勉強振で人氣を取り、或

は銀星を大丸と改めて經營したり、或は野村食堂を引き受けなどしたが、思ふところあつて斷然此等から手を引き、全精力をカフェー「ミナト」に集中し、時代に順應すべく最初平家でやつてゐたのを、巨費を投じて宏壯なる二階建に改築し、時代の尖端に魁ける氏一流の「最新味」哲學から割り出した「文化は交通と光から」をモットーに、室内の照明、店頭照明、街頭の照明と云ふ三拍子の照明に最善の工夫を凝らし、此等の照明だけに五千圓投じてをる、氏は頭腦が冴へてをるから、常に客の氣分を明かるくし、同時に客の氣分を時々轉換せしめねばならぬと云ふ点に重点を置きネオンの利用につとめてゐるのは流石だ、だからカフェー「ミカド」は人の心に沁み透るやうな、そしてモダン味のある種々相の光彩で百パーセントの快感を興へる近代的裝飾が完備してをる、此の点大阪の一流カフェーに比較して毫も遜色がないと云はれる、すなはち照明の室、ネオンの街は實に氏の生命線とも謂ふべきもので「ミカド」の新築總工費三万余圓の内、ネオン電気工事七千圓、一ヶ月の電気料百三十圓を支出してゐる一事が其の一切を物語つてゐる、だから電気會社々長の宇田耕一氏は街を明るくする宣傳の爲め會社の陳列室へ「ミカド」のネオンを並べて一般の觀覽に供した程であつた。

氏の實力聲望は、高知和洋料組理合において夙に認められ曾て其の組合長に推され、現在は副組合

長として實際の事務を取扱つてをり、傍ら高知カフエー聯盟の理事長を勤めてをる年齢正に四十、家庭には一男一女ある趣味は競馬で一時これに熱中した時代もあつたが此の頃では商賣一式で他の道樂は一切やめてをる、蓋し高知カフエー界のナンバーワンであらふ。

岡村長藏氏

「魚長の料理は實にうまい」この聲は最近に至つて次第に高まりつゝある、その「魚長」は朝倉町の旅館兼料理業である、旅館を兼ねてをる關係から鐵道省の側でも、うまい料理を食はす宿屋として頗る評判がよろしい、然かも其の料理たるや土佐固有のローカル、カラーだから有り難い、魚長の名は斷然土佐の料理界に光つてをる。

斯くも盛名ある「魚長」の岡村長藏氏は明治十九年六月をもつて長岡郡久禮田村の領石に生れた、少年時代より料理に格別の嗜好があつたから其の天分を發揮すべく十五歳の時に木履屋町の「山六」へ奉公した、當時高知城下において料理の腕利きをもつて目されてゐたのは、山六の山岡六兵衛、小野喜太郎、大井利吉、西村清太の歴々で、土佐固有の料理のために万丈の氣を吐いたものだ、岡村氏は山六で腕を磨くこと十年藍より出でて藍よりも青き出藍の譽れを博し、二十四歳の頃、朝倉町

に獨立の料理店を開き、昭和五年現在の場處に増築して旅館兼料理業を經營し高知城下に「魚長」の名を高からしめたのである。

この間、土佐魁新聞主催の料理競技會に皿鉢料理を出陳して二等賞を得、その後毎年の競技會に優等賞を授かり、昭和九年高知新聞創業三十周年記念祝典に皿鉢料理を出品し審査の結果一等賞銀牌を貰つたのである。

今日の土佐料理は或る一面においては進んだと言はるゝけれども、固有の郷土味は次第に失せて上方を崩した位のものであるが、お茶の料理といへば岡村氏と大井氏位のもので岡村氏は何處までも土佐の傳統を崩さないところに特長特色がある。

氏は養嗣子で藤尾夫人との間に三男五女の子寶がある、長男一君は土佐中より一高を経て帝大を卒業せる當年二十四歳の秀才だが穂積博士の斡旋で東京第一銀行に勤務中だ、令閨は東京鹽水港會社の重役で臺灣に一大農園を經營する榎尾具包氏の令嬢で、若夫婦の間に一男子を擧げたが、産後の五月十八日令閨が死去せられたことは實に同情且つ愛惜の極みである。

山下嘉平氏

蓮池町の油商「松竹屋」は藩政時代からの老舗で一市七郡の津々浦々にまで知られてをる氏は此の松竹屋嘉平氏の嫡男で明治二十八年三月の生れ幼名は泉、第十二回市立商業學校の卒業生で明治三十九年先代の死亡後、襲名して家業を継ぎ、大に新知識を應用して縣下一圓に亘る取引は倍々順調に發展し、氏の圓滑なる性格が商策に反映して、些しの無理もなく、先代の名を辱かしめず油の如く滑がに廣汎なる地盤を培ふてをる。

氏の趣味は銃獵にあるけれども、年と共に商業に勵み、現に商工會議所の理事として申分なき材幹を發揮し令名を博してをるところ、地下の嘉平翁も定めし満悦であらふ。

家庭は内助の功多き賢夫人との間に一男一女を擧げ、令息誠二君は城東中學校に在學中であり、氏の令弟快吉君は東京美術學校の彫塑家で帝展に入選すること既に二回、現に世田ヶ谷にアトリエ生活をつづけながら東京寶塚劇場に勤めてゐる。

元田政太郎氏

商業に最も必要なるは地の利である、地の利を得ると得ざるとによつて商店の榮枯盛衰は定まると言つても過言であるまい、人通りの最も多い新京橋の帽子專業店元田政太郎氏の店舗が今日の隆昌を見るに至つたのは、氏が地の利に着目した慧眼の然らしむるところであらねばならぬ。

氏は高知市掛川町の出身、十四歳の時、新京橋の齋藤裁縫店に丁稚奉公をしたのが抑も今日あるの因縁を結成せるもので、七年間の修養と鍛練を積んで丁年に達するや、斷然獨立して現在の中央食堂の階下に當る處で洋品店を創めた、そして此の商賣で經驗と云ふ實地學問が出来たから、その貴き經驗を應用して大正十一年から時代の要求する帽子專業店を堂々と開始して之に全魂を打ち込んだ、果然商算は命中した、元田帽子店の名は日に月に高揚された、幸運は氏の店舗を訪れた、畢竟氏の慧眼が此の隆昌を贏ち得たのである。

新京橋の店舗が理想通りに發展したのだから、百尺竿頭一步を進め、昭和八年京町の四ツ角、元栗尾洋物店支店の跡へ帽子専門の支店を出し之れ亦たグン／＼と伸びてをる本店も支店も地の利に加へて、眞似目で堅實で正札付きの三拍子が揃ふたから、商店の生命たる信用が厚くなり何人も安心

して買へるので顧客店に満つるの光景を織り成す所以である。一店員から現在の本店舗に躍進した其の成功は輝かしい。氏の長男正三君は大村洋物店へ見習にやつてあつたが、相當の知識経験が出来たから今では家嚴を佐けて支店の主任をやつてをる、外に一人の女子と一人の男兒あり家庭は至つて圓滿だ、當年四十四才趣味は釣り。

谷脇賢輔氏

枳形で松村寛藏氏と並び稱せられた谷脇静一氏は、鶴屋呉服店を經營する傍ら、商業會議所の副會頭や呉服商組合の組合長や市會議員などを長らく勤めて巨然たる存在を示した高知市の一名物男であつた、茲に描かんとする谷脇賢輔氏は乃ち静一氏の賢息で明治二十六年五月二十五日をもつて高岡郡葉山の里に生れた、そして市立商業學校卒業後は枳形の家庭にあつて呉服商を手傳ひ、その後齋藤琢磨、吉岡勘平氏等と協同で『城西俱樂部』を設け、玉突の娛樂に興じつゝ、同氣相求むる社交機關に青春の明朗性を長養したが、玉突の營業化に伴ひ現在は其の俱樂部を専門業者に貸與してある。士讚線の開通後、觀光客の殺到に刺戟を受けて高知實業界の一流どころがホテルの建設を目論むその計畫を尻目にかけて、枳形オリエンタルカフェエの跡を改築し、七月初旬より旅館「松竹」を經營

することになつた、收容定員約五六十名を限度とし、街頭に添ふ洋館は、館下をガレージとし、階上は洋室ベツト式四室を設け、日本間には一室毎に卓上電話を設置し、階上四十疊の間は團休客の室に當てゝある、各客室には名流の筆に成る書畫の軸が床の間を飾り、それに配するに高雅な氣品のある骨董品を以てし其處に松竹式の落ち着きを豊かに取り入れて滔々たる他の旅館で味ふことの出来ぬ奥床かしさに自から旅の怡悅を満喫せしめるやうに構成されてをるところなど流石は谷脇氏の着眼程あるワイと感心せしめられるそれに裏庭園の特別上等室は、園の東隅に茶室の設けがあつて閑靜なる一個の小天地を領してをるから、蒼然たる古色が此の新築に滲透し、俗惡な氣分は此の室に入ると不思議にすつかり洗ひ落さるゝ、建築は人格の象徴であると云はるゝから谷脇氏の人格は「松竹」の建築様式に遺憾なく露はれてをる。

氏の趣味は玉突、謡曲、遊漁、繪畫等々、令閨文子夫人は土佐高女出身の才媛で、一男二女がある、長男の嘉平君は城東中學に在學中ださうな。

溝淵拾太郎氏

鯉節問屋の「改拾」と言へば全縣下に響き渡つてをること程左様に高名である、先代の拾太郎氏は長

岡郡三和村改田の出身であつた所以から最初は屋号を「改田屋」と稱してゐたかなれど世間で拾太郎の拾を取り入れ改田の改と結んで「改拾」と呼ぶやうになつたものらしい。先代は少年時代に九反田の生魚問屋十市屋に丁稚奉公をし紺の厚子一枚から今日の致富に漕ぎつけた一代成功者であるが昔し十市屋で汗と魚臭にもつれてゐた時代同家に一人の箱入り娘があり主人夫婦は先代の將來を見込み、養子に貰ひうけんとしたなれど、面貌の美醜を第一條件とする箱入り娘の眼鏡にみごと不合格となつたのであつたが、之が先代をして發憤せしむる一つの動機ともなつた。

第二世の溝淵拾太郎氏は幼名慶明、明治三十一年十一月七日をもつて市弘岡町に生れ、大正五年市立商業學校卒業後家業を佐け、昭和七年先代の永眠するや、其の業を繼承し其の名を襲ふたのである、氏は先代の血を享けて自己の職業に精勵し、鯉節の製法も時代と共に進歩せねばならぬ理解を多分に有つてゐるから毫も家聲を墜さない「改拾」の鯉節は明治二十年以來、内國勸業博覽會、大日本水産會、全國水産食品々評會、高知開市記念博覽會、優良國産品鑑査會等々に於て、毎々一等賞や、名譽賞牌や、頌功狀や、感謝狀を授與せられ、宮内省御買上の光榮にも浴してゐる、だから土佐で鯉節といへば必ず「改拾」を聯想することになつてゐる。

氏は有名なカメラマンである、寫眞機を携へて縣外にまで足跡を印する、母堂米刀自は喜多流の流

曲に老後の幸福を滿喫し、睦子夫人は土佐高女の出身で茶の湯と活花が御手の物だ、令弟宇三郎君は市商の出身で現在東京牛込區辨天町に住し謡曲觀世流を極め其の免許を得て門弟養成の準備中だと聞く。

濱口柳吉氏

高知食品界の「すし柳」は汎く人口に膾炙されておる、播磨屋橋交叉点に隣るその店舗は凡有る社會、凡有る階級の人々に依つて驚くべき繁昌を呈してゐる、高知で「すし柳」の鮨を知らない者は味覺を何處かへ置き忘れたものだ、これ程名高い「すし柳」の經營者は誰か、曰くそれは高岡郡新莊村安和の出身濱口柳吉氏である。

この濱口氏は小學校時代から獨立の氣象に富み安和から須崎の高等小學校へ通うのに毎朝一斗の酒樽を肩にし、その勞働によつて得る二錢を自分の小遣とし未だ會て兩親を煩はさずに苦學力行を續け高等小學校卒業後十八の歳まで郷里の土に親しみつゝ家事を手傳ふたそしてその歳に志を立て、高知城下に出で盛り場の新京橋で盛んに客を呼んでゐた「すし市」に弟子入りをして茲に食品界の第一歩を踏み出した「すし市」の主人公は縣外から最初大貞へ來た料理の名人で後ち單獨専門の鮨屋を始